

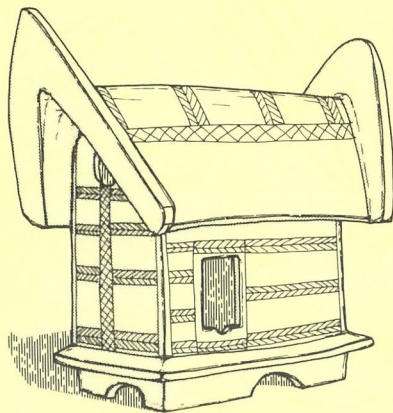
(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第60輯

陶邑・伏尾遺跡

A 地区

近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

本文編



1990

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第60輯

す え む ら ふ せ お
陶 邑 ・ 伏 尾 遺 跡

A 地 区

近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

本文編

1 9 9 0

大 阪 府 教 育 委 員 会

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



遺跡全景（北西から）



遺跡全景（南から）



遺跡近景



谷部断面



豎穴住居群



土坑 (1766-00)



古墳 (41-OG)



家形埴輪

序 文

近畿自動車道松原海南線は、関西国際空港への重要なアクセス道路として大阪府泉州地域を縦断する高速道路ですが、多くの遺跡が建設予定地に存在しています。

大阪府教育委員会では先人の足跡たるそれら遺跡の重要性に鑑み、取り扱いについては万全の体制でのぞんでおります。今回、報告書を刊行することができました伏尾遺跡につきましても、丘陵上ならびに平野部の広い範囲を対象とした試掘調査を財団法人大阪府埋蔵文化財協会に委託して実施し、その結果から関係機関と協議を重ねた上、引き続いて丘陵上の発掘調査を行なったものであります。

遺跡の所在する丘陵は、我が国の須恵器生産の中心地として著名な陶邑古窯跡群の高蔵地区に属し、弥生時代からの集落をはじめとして「陶邑」の須恵器生産に係わるとみられる大規模な古墳時代集落が検出されました。特に建物群や古墳と共に多くの初期須恵器を得ており、陶邑の当初の姿を考えるうえで重要な知見を得ることができました。

多大な成果を収めることができた本調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局をはじめとして、地元堺市教育委員会および関係者各位と、調査を担当された財団法人大阪府埋蔵文化財協会の皆様の多大な努力に深く感謝しております。

今後とも本府の文化財行政に対して、引き続き関係各位のご理解とご援助を賜わりますようお願い申し上げます。

平成2年5月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 川 瀬 誠

序 文

大阪府の泉州地域は古代においては百舌鳥古墳群、そして「陶邑」の成立にいたる重要な地域として歴史の舞台に登場し、大きな変貌を遂げたのでありますが、いままた関西国際空港の建設という国家事業を前にして、再び注目を浴びることとなったのであります。

泉州地域北部の泉北丘陵に所在する伏尾遺跡は、日本の須恵器生産の一大中心地として著名な陶邑古窯跡群の中に位置しています。このたび近畿自動車道建設に伴う事前調査として発掘調査を実施したところ、多種多様の遺構と遺物が眼前に表われ、古代の窯だけではない「陶邑」の一端を解明することができました。

弥生時代から連綿と続く丘陵上のムラ、そして古代国家成立期の激動の中で我国の窯業生産の中心的存在となる集落の一部が検出されたことは、泉北地域史の歴史的解明はもちろん、日本古代社会の研究にも多くの歴史資料を提供することになったと信じています。

とりわけ、初期須恵器の良好な遺物群は渡来人の活躍を物語り、大規模な集落は須恵器工人のムラの実態や集団構造に迫る手掛かりとなりえます。また同時に検出された古墳は前方後円墳の時代における政治関係にも考察を進めることができましょう。本報告書が古代史の解明におおいに利用されることを願ってやみません。

最後に本調査の実施にあたって、ご配慮いただいた日本道路公団をはじめとする関係各位に謝意を表すると共に、職員の派遣など本協会の事業にご理解をいただいている近畿各府県教育委員会、ならびに大阪府下市町村教育委員会に深謝いたします。

今後とも本協会の事業に対して、各位のご理解ご協力をお願い申し上げます。

平成2年5月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈 祐 吉

例 言

1. 本書は近畿自動車道松原海南（和歌山）線建設工事着工に先立つ埋蔵文化財発掘調査のうち、堺市伏尾・平井に所在する伏尾遺跡（A地区）の発掘調査報告書である。
2. 本調査と本報告作成は、日本道路公団の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、（財）大阪府埋蔵文化財協会が実施したものである。
3. 現地調査は、1988年7月に開始して1989年3月に終了し、報告書作成作業は1989年度に実施した。本調査に関係したものは以下の通りである。

現地調査 調査課第4班 班長 主査兼統括班長・森村健一（8月まで）

調査課第4班 班長 主査 尾上 実（9月～12月）

調査課第1班 班長 主査兼統括班長・森村健一（1989年1月から）

技師 第I区担当・岡戸哲紀

技師 第II区担当・田中一廣

技師 第III区担当・岸本道昭、近藤康司

4. 調査の実施に当たっては、日本道路公団大阪工事事務所・岸和田工事事務所、堺市教育委員会、地元自治会などの格別の配慮を得、調査・整理中は最終項で記すように多くの方々から有形無形のご教示・ご協力を得ている。
5. 本書の写真は遺構について各調査担当者、遺物を小倉 勝が担当した。
6. 本報告書の作成については、第I章を岸本、第II章を近藤、第III章を岡戸、第III章第4節第3項を森村、第V章を岸本・近藤、第VI章を岸本が執筆分担し、第IV章については当協会資料班が作図も含めて担当した。それら各作業の編集統括は岸本・岡戸が行なった。

凡 例

1. 本調査および本書では、第I章第2節で述べるような地区割り設定や遺構番号の付与がなされているが、平面図では方位が座標北を示している。図中にはXとY座標軸が必ずm単位で標記され、断面図はA-A'などと示される。レベル高は、東京湾標準潮位T.P.で統一している。
2. 遺構番号は全地区にまたがってあらゆる遺構に通し番号を付し、遺構の性格を示す記号は当協会「発掘調査規程」に準じて以下のように表現している。
掘立柱建物-OB, 竪穴住居-OD, 土坑-OO, 柱穴・小穴-OP, 溝-OS,
井戸-OW 古墳-OG, 窯-OK, その他(落ち込みなど)-OX。平面図中には、基本的に本文に登場する遺構のみを示している。
3. 本書で使用した土壌色は、第IV章の一部を除いて小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』を使用して命名した。
4. 遺構平面図のうち原則的には掘立柱建物は1/60, 竪穴住居は1/60ないし1/80で表示したが、その他は適当な縮尺を採用した。
5. 遺物は、出土地・種類を問わず通し番号を付し、図と写真に共通する。一部は写真または図のみのものもある。遺物は原則として土器を1/4, 石器を2/3で示すが、一部は異なる場合がある。土器の実測図の断面はすべて黒塗りとした。これは特に初期須恵器や半島様式の土器、埴輪の焼成状況において土師質か須恵質かの判断を下せない例が多く、報告者の誤認による遺物の一人歩きを避けたかったためである。
6. 本文中に「古墳時代中期」, 「5世紀後半」などの言葉を使用するが、本書の主要な遺構の時期は、いわゆる「初期須恵器」の時期にあたり、周知のように須恵器生産開始実年代についても考古学では5世紀初頭から5世紀中頃という説があり、約半世紀の開きがある。報告では厳密な立場を示すには至っていないため、以上を念頭にして不統一や学説との距離をお許しいただきたい。
7. 本書の中で、研究の現状から勘案して不適當な表現が見られた場合は、すべて報告者の責に帰すが、他意のあるものではない点御容赦願いたい。

目 次

卷頭図版	
序文	
例言	
凡例	
第I章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	4
第II章 位置と環境	7
第III章 第I区の調査成果	12
第1節 概要	12
第2節 基本層序	14
第3節 遺構と遺物	16
第1項 弥生時代	16
第2項 古墳時代前期	24
第3項 古墳時代中期	29
第4項 中世以降	79
第5項 谷部の調査	82
第4節 小結	101
第1項 弥生時代における集落の展開	101
第2項 古墳時代中期における集落の展開	103
第3項 谷部出土の移動式竈について	113
第IV章 第II区の調査成果	116
第1節 概要	116
第2節 基本層序	117
第3節 遺構と遺物	119
第1項 弥生時代	119
第2項 古墳時代	143
第3項 中世以降	199

第4項	包含層の遺物	200
第4節	小結	205
第1項	弥生時代以前の遺物	205
第2項	弥生時代～古墳時代前期の集落の展開	205
第3項	古墳時代中期における集落の展開	208
第V章	第III区の調査成果	215
第1節	概要	215
第2節	基本層序	217
第3節	遺構と遺物	219
第1項	旧石器時代	219
第2項	弥生時代	219
第3項	古墳時代中期	226
第4項	古墳時代後期	256
第5項	室町時代	264
第4節	小結	272
第1項	遺構と遺物の変遷	272
第2項	伏尾古墳群の性格	274
第3項	伏尾古墳群に供給された埴輪の検討	280
第VI章	まとめ	285

挿 図 目 次

第1図	伏尾遺跡位置図（1982年）	2
第2図	伏尾遺跡位置図（1885年）	3
第3図	伏尾遺跡（A地区）調査位置図	5
第4図	地区割概念図	6
第5図	伏尾遺跡周辺土地状況	8
第6図	伏尾遺跡と周辺の遺跡（大阪府文化財分布図による）	10
第7図	第I区主要遺構配置図	12
第8図	第I区基本層序模式図	13
第9図	第I区基本層序図（1/80）	15
第10図	1820—OD平面・断面図（1/80）	17

第11図	1820—OD出土遺物 (2/3)	18
第12図	1540・1820—OD出土遺物 (1/4)	19
第13図	1540—OD平面・断面図 (1/60)	20
第14図	1780—OD平面・断面図 (1/60)	22
第15図	1830—OD平面・断面図 (1/60)	25
第16図	1520—OD平面・断面図 (1/60)	26
第17図	1830—OD出土遺物 (1/4)	26
第18図	1520・1830—OD出土遺物 (2/3)	27
第19図	1861・1868・1872—OB平面・断面図 (1/60)	30
第20図	1846—OB平面・断面図 (1/60)	31
第21図	1826—OB平面・断面図 (1/60)	32
第22図	1856—OB平面・断面図 (1/60)	33
第23図	2051・2100—OB平面・断面図 (1/60)	35
第24図	1883—OB平面・断面図 (1/60)	36
第25図	1943—OB平面・断面図 (1/60)	37
第26図	1557—OB平面・断面図 (1/60)	38
第27図	1558—OB平面・断面図 (1/60)	38
第28図	1510—OB平面・断面図 (1/60)	39
第29図	1804・1810—OO平面・断面図 (1/40)	40
第30図	1804・1807・1810—OO出土遺物 (1/4)	41
第31図	1806・1822—OO遺物出土状況図 (1/20)	42
第32図	1806・1822—OO出土遺物 (1/4)	43
第33図	1507・1824・1825—OO平面・断面図 (1/40)	44
第34図	1507・1802—OO出土遺物 (1/4)	45
第35図	1778・1779・1797・1800—OO平面・断面図 (1/60)	47
第36図	1778・1779・1800—OO出土遺物 (1/4)	48
第37図	1764・1767—OO遺物出土状況・断面図 (1/30)	49
第38図	1764—OO出土遺物 (1/4)	50
第39図	1767—OO出土遺物 (1/4)	51
第40図	1758・1759・1761・1762・1773—OO平面・断面図 (1/60)	52
第41図	1758・1759—OO出土遺物 (1/4)	53

第42図	1777-〇〇平面・断面図 (1/60)	54
第43図	1777-〇〇出土遺物 1 (1/4)	55
第44図	1777-〇〇出土遺物 2 (1/4)	56
第45図	1787-〇〇出土遺物 (1/4)	57
第46図	1752・1753・1760・1766・1785・1787・1793・1796-〇〇平面・断面図(1/60).....	58
第47図	1766・1796-〇〇遺物出土状況図 (1/30)	59~60
第48図	1766-〇〇出土遺物 1 (1/4)	62
第49図	1766-〇〇出土遺物 2 (1/4, 2/3)	63
第50図	1766-〇〇出土遺物 3 (1/4)	64
第51図	1530・1752・1796-〇〇出土遺物 (1/4)	65
第52図	1751・1757・1763-〇〇平面・断面図 (1/40)	67
第53図	1508・1509・1530・1531・1544-〇〇平面・断面図 (1/40)	68
第54図	1750-〇S遺物出土状況・断面図 (1/30)	70
第55図	1750-〇S出土遺物 1 (1/4)	71
第56図	1750-〇S出土遺物 2 (1/4)	72
第57図	1750-〇S出土遺物 3 (1/4)	73
第58図	1755・1789・1811・1812・1813・1814・1821-〇S断面図 (1/40)	73
第59図	1821-〇S出土遺物 (1/4)	74
第60図	1811・1812・1813-〇S出土遺物 (1/4)	75
第61図	1749・1755-〇S出土遺物 (1/4)	78
第62図	中・近世遺構出土遺物 (1/4)	81
第63図	谷部土器出土密度分布図.....	82
第64図	谷部土層図 1 (1/80)	83
第65図	谷部土層図 2 (1/80)	84
第66図	谷部出土遺物 1 (1/4)	86
第67図	谷部出土遺物 2 (1/4)	87
第68図	谷部出土遺物 3 (1/4)	88
第69図	谷部出土遺物 4 (1/4)	89
第70図	谷部出土遺物 5 (1/6)	90
第71図	谷部出土遺物 6 (1/6)	91
第72図	谷部出土遺物 7 (1/4)	93

第73図	谷部出土遺物 8 (1/4)	94
第74図	谷部出土遺物 9 (1/4)	95
第75図	谷部出土遺物10 (1/4)	96
第76図	谷部出土遺物11 (1/4)	97
第77図	谷部出土遺物12 (1/4)	98
第78図	谷部出土遺物13 (1/4)	99
第79図	谷部出土遺物14 (1/4)	100
第80図	遺構変遷図	102
第81図	掘立柱建物法量グラフ	104
第82図	掘立柱建物主軸グラフ	105
第83図	須恵器器種構成グラフ	112
第84図	第II区主要遺構配置図	116
第85図	第II区基本層序図 (1/80)	118
第86図	126-OD平面・断面図 (1/80)	120
第87図	126-OD出土遺物 (1/4, 2/3)	121
第88図	104-OD平面・断面図 (1/80)	122
第89図	104-OD出土遺物 (1/4, 2/3)	123
第90図	104・105-OD出土遺物 (1/4)	123
第91図	105-OD平面・断面図 (1/80)	124
第92図	105-OD出土遺物 (1/4)	125
第93図	110-OD平面・断面図 (1/80)	126
第94図	110-OD出土遺物 (2/3)	127
第95図	154-OD平面・断面図 (1/80), 出土遺物 (1/4, 2/3)	129
第96図	303-OD平面・断面図 (1/80)	130
第97図	106-OD平面・断面図 (1/80), 出土遺物 (1/4)	132
第98図	103-OD平面・断面図 (1/80)	133
第99図	103-OD出土遺物 (1/4, 2/3)	134
第100図	114・3388・3433-OO平面・断面図 (1/40)	136
第101図	114-OO出土遺物 (1/4)	137
第102図	288-OS, 289-OX平面・断面図 (1/60)	138
第103図	288-OS, 289-OX出土遺物 (1/4)	140

第104図	133-O S 出土遺物 (1/4)	141
第105図	702・3221-O P 出土遺物 (1/4)	141
第106図	147・470・459-O P, 149-O S 出土遺物 (2/3)	142
第107図	3402-O D 平面・断面図 (1/80)	143
第108図	3402-O D 出土遺物 (1/4)	143
第109図	111・112-O D 平面・断面図 (1/80)	145
第110図	111・112-O D 出土遺物 (1/4, 2/3)	146
第111図	3406-O D 平面・断面図 (1/80)	149
第112図	3406-O D 出土遺物 1 (1/4)	150
第113図	3406-O D 出土遺物 2 (1/4)	152
第114図	3406-O D 出土遺物 3 (1/4, 2/3)	153
第115図	153-O D 平面・断面図 (1/80)	154
第116図	153-O D 出土遺物 (1/4)	155
第117図	363-O B 平面・断面図 (1/60)	156
第118図	363-O B 出土遺物 (1/4)	156
第119図	760-O B 平面・断面図 (1/60)	157
第120図	765-O B 平面・断面図 (1/60)	158
第121図	841-O B 平面・断面図 (1/60)	159
第122図	918・209-O B 平面・断面図 (1/60)	160
第123図	258-O B 平面・断面図 (1/60)	162
第124図	211-O B 平面・断面図 (1/60)	163
第125図	1040-O B 平面・断面図 (1/60)	164
第126図	776・889-O B 平面・断面図 (1/60)	166
第127図	1239-O B 平面・断面図 (1/60)	167
第128図	3662-O B 平面・断面図 (1/60)	168
第129図	3730-O B 平面・断面図 (1/60)	169
第130図	3321-O B 平面・断面図 (1/60)	170
第131図	735-O B 平面・断面図 (1/60)	171
第132図	307・3122・3168-O B 平面・断面図 (1/60)	172
第133図	ピット群 1 平面図 (1/80)	174
第134図	ピット群 2 平面図 (1/80)	175

第135図	412・415・743-OP, ピット群2出土遺物(1/4)	176
第136図	3401-OO平面・断面図(1/40)	177
第137図	3401・3403・3810-OO出土遺物(1/4)	178
第138図	119・122・3403・3810-OO平面・断面図(1/40, 1/20)	179
第139図	119-OO出土遺物(1/4)	180
第140図	122-OO出土遺物(1/4)	181
第141図	285-OO遺物出土状況図(1/20)	182
第142図	285-OO出土遺物1(1/4)	183
第143図	285-OO出土遺物2(1/4)	184
第144図	280-OO遺物出土状況図(1/30)	185
第145図	280-OO出土遺物1(1/4, 1/2)	186
第146図	280-OO出土遺物2(1/6)	187
第147図	120・121・291-OO平面・断面図(1/40)	188
第148図	120・291・741-OO出土遺物(1/4)	189
第149図	155・156-OO遺物出土状況図(1/20)	190
第150図	155・156-OO出土遺物(1/4)	191
第151図	115・116・134・138・3380-OO平面・断面図(1/40)	193
第152図	115・116・134・138・3380-OO出土遺物(1/4, 2/3)	194
第153図	107・109-OS出土遺物(1/4)	195
第154図	土器溜まり出土遺物1(1/4)	197
第155図	土器溜まり出土遺物2(1/4)	198
第156図	近世遺構概略図	199
第157図	包含層出土遺物1(2/3)	200
第158図	包含層出土遺物2(1/2)	200
第159図	包含層出土遺物3(1/4)	201
第160図	包含層出土遺物4(1/4)	202
第161図	包含層出土遺物5(1/4)	204
第162図	弥生時代・古墳時代前期遺構配置図	206
第163図	古墳時代中期遺構配置図	209
第164図	第Ⅲ区主要遺構配置図	216
第165図	第Ⅲ区基本層序図(1/80)	218

第166図	包含層出土遺物 (2/3)	219
第167図	70-OD平面・断面図 (1/60)	220
第168図	503-OD平面・断面図 (1/60)	221
第169図	16-OD平面・断面図 (1/80)	222
第170図	16・70・503-OD出土遺物 (1/4, 2/3)	223
第171図	688・732-OO・埋没谷出土遺物 (1/4)	224
第172図	687-OS平面・断面図 (1/80, 1/40), 出土遺物 (1/4)	225
第173図	625-OW平面・断面図 (1/30), 出土遺物 (1/4)	225
第174図	41-OG平面・断面図 (1/160, 1/80)	227
第175図	41-OG遺物出土状況図1 (1/30)	228
第176図	41-OG遺物出土状況図2 (1/30)	229
第177図	41-OG出土遺物1 (1/4)	230
第178図	41-OG出土遺物2 (1/4)	231
第179図	41-OG出土遺物3 (1/4)	232
第180図	41-OG出土埴輪1 (1/4)	234
第181図	41-OG出土埴輪2 (1/4)	235~236
第182図	41-OG出土埴輪3 (1/4)	238
第183図	41-OG出土埴輪4 (1/4)	239
第184図	41-OG出土埴輪5 (1/4)	240
第185図	41-OG出土埴輪6 (1/4)	241
第186図	41-OG出土埴輪7 (1/4)	242
第187図	41-OG出土埴輪8 (1/4)	243
第188図	41-OG出土埴輪9 (1/4)	244
第189図	41-OG出土埴輪10 (1/4)	246
第190図	41-OG出土埴輪11 (1/4)	247
第191図	41-OG出土埴輪12 (1/4)	248
第192図	689-OG平面・断面図 (1/160, 1/80)	249
第193図	689-OG遺物出土状況図 (1/30)	249
第194図	689-OG出土埴輪 (1/4)	250
第195図	40-OG平面・断面図 (1/160, 1/80)	252
第196図	40-OG出土遺物 (1/4)	253

第197図	40-OG出土埴輪 (1/4)	254
第198図	39-OG平面・断面図 (1/160, 1/80)	255
第199図	39-OG遺物出土状況図 (1/30)	256
第200図	39-OG出土遺物 (1/4)	257
第201図	土坑群1・2平面図 (1/200)	258
第202図	土坑群1 (59-OO)平面・断面図 (1/30)	259
第203図	土坑群1 (15・60・69・100-OO)平面・断面図 (1/30)	260
第204図	土坑群1出土遺物1 (1/4)	261
第205図	土坑群1・2出土遺物 (1/4)	262
第206図	土坑群1出土遺物2 (1/4)	263
第207図	中世掘立柱建物平面・断面図 (1/80)	265
第208図	中世遺構出土遺物1 (1/4)	269
第209図	中世遺構出土遺物2 (1/4)	270
第210図	72-OS断面図, 53-OO平面・断面図 (1/60)	271
第211図	周辺地形と古墳時代中期の遺構概略	275
第212図	小代古墳群採集の埴輪 (1/4)	276
第213図	伏尾と野々井古墳群の規模比較	278
第214図	埴輪に描かれた線刻集成 (1/4)	282
付図1	第I区 全体図 (1/200)	
付図2	第II区 全体図 (1/200)	
付図3	第III区 全体図 (1/200)	

表 目 次

表1	掘立柱建物一覧表 (1)	106
表2	掘立柱建物一覧表 (2)	107
表3	掘立柱建物一覧表 (3)	108
表4	掘立柱建物一覧表 (4)	109
表5	41-OG円筒埴輪, 内・外面調整別個体数	281

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経過（第1・2図）

伏尾遺跡は、堺市伏尾・平井・小代にまたがって所在しており、遺物の散布について古くから知られていた遺跡である。本調査区の位置は、「大阪府文化財分布図」では大半が小阪遺跡・一部が伏尾遺跡と周知された範囲にまたがっており、丘陵地であることから小代古墳群の一角にも当たるものと考えられていたのである。

大阪府を縦断する近畿自動車道は、天理・吹田線以南は松原海南線として計画され、建設が進められているが、1980年代になって関西新空港事業構想が具体化すると、空港関連事業として、完成がいつそう急がされることとなった。

この地を通る近畿自動車道松原海南線（A地区）と、一般道との出入口道路（B地区）の建設計画を受けて、日本道路公団と大阪府教育委員会では、路線内の遺跡の取り扱いについて協議を重ねてきた。大阪府教育委員会では、より具体的な遺跡実態確認の為に日本道路公団から試掘調査の依頼を受け、まずは試掘調査を実施することになった。試掘調査は、大阪府教育委員会の指導の下、（財）大阪府埋蔵文化財協会が1987年8月と1988年3月の2次にわたって実施し、道路計画部分のほぼ全体にわたって遺構・遺物を確認した。

試掘調査の結果を受けて大阪府教育委員会では、対象地の全面発掘調査の必要を認め、日本道路公団に通知すると共に、近畿自動車道松原海南線は、関西新空港建設関連事業として、（財）大阪府埋蔵文化財協会に発掘調査の委託を行なったのである。

今回の調査対象地は、土地の買収状況や池・里道の関係から制約を受けたものとなっているが、道路敷部分の幅約70m、延長約330m（間に未調査部分含む）、総面積は約18000㎡に及んでいる。

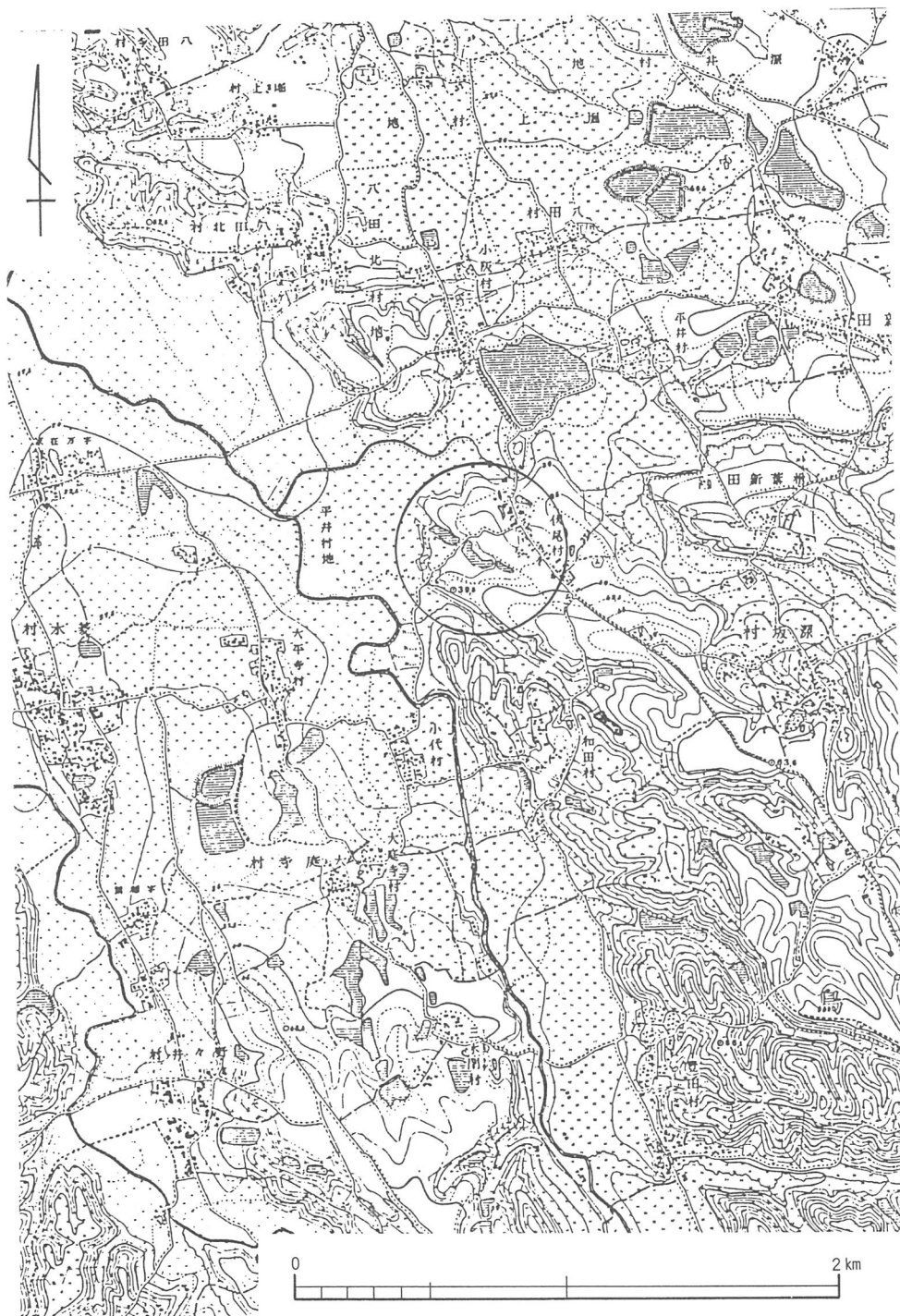
大阪府教育委員会と（財）大阪府埋蔵文化財協会では1988年度、すみやかに関係諸機関と調査にかかる協議・契約を行ない、現地調査は1988年7月から1989年3月の間に実施完了した。本書作成など整理調査は1989年度に行い、年度中に予定業務を完了した。

なお、調査の進展と共に重要な遺構が次々に検出され、調査終了後の埋め戻しには砂による遺構面の保護や、道路建設の際の工法変更などの協議が適時行なわれ、遺跡は最低限の保存措置がとられることとなっている。

第1節 調査に至る経過



第1図 伏尾遺跡位置図 (1982年)



第2図 伏尾遺跡位置図 (1885年)

第2節 調査の方法（第3～4図）

本調査対象地区は、18000㎡と広大であり、一度に全面調査することは残土置き場などの関係から不可能であった。また、里道と溜池によって調査区が分断されている状況があり、それを利用する形で三箇所の調査地区に分けて、それぞれの地区で排土を反転して調査を実施することにした。調査区は丘陵端の北から第Ⅰ区、里道を挟んで溜池までを第Ⅱ区、溜池から対象区南端までを第Ⅲ区と呼称し、遺構・遺物番号は全調査区を通して命名したので番号は調査全体の固有名詞となる。

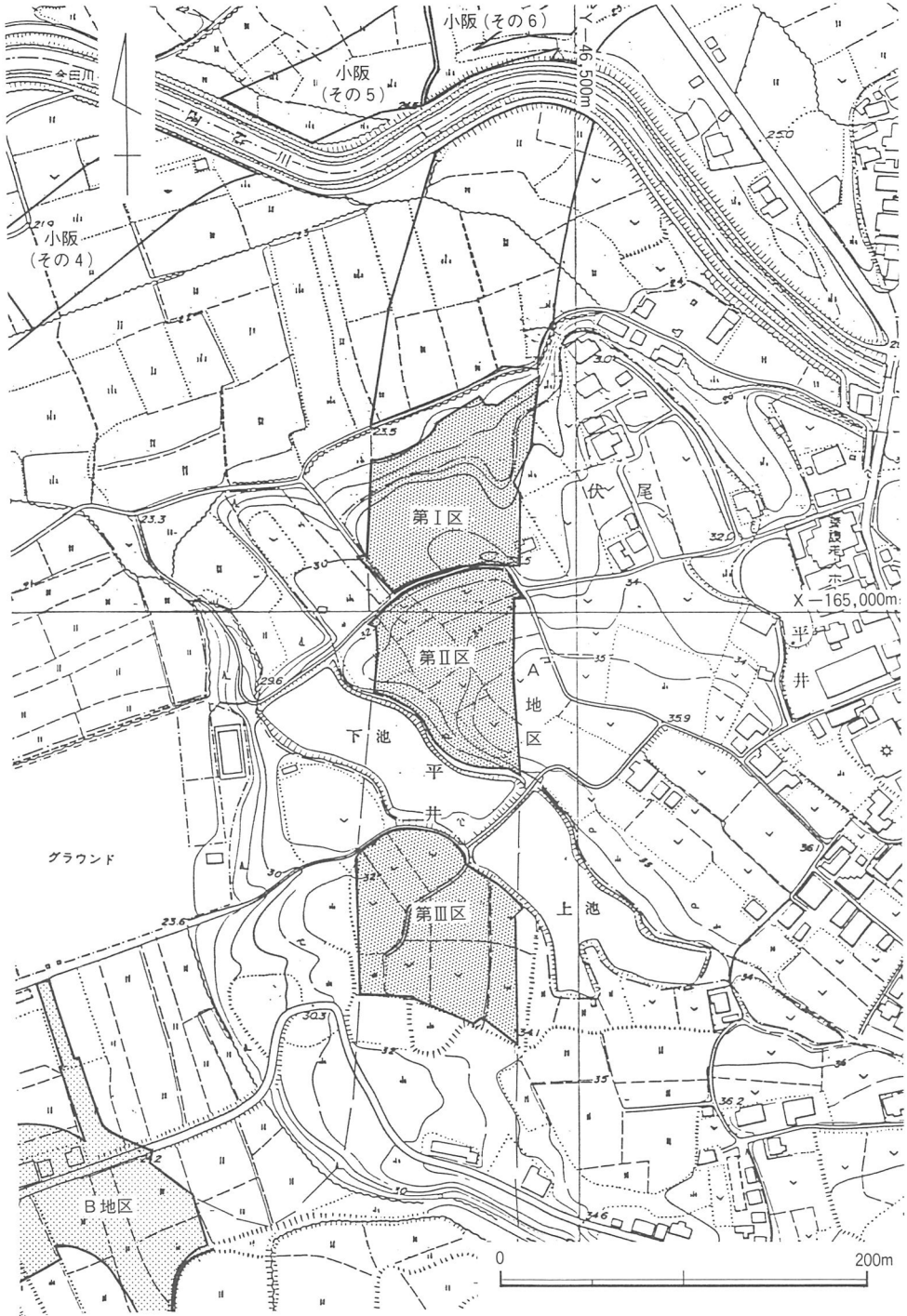
また、調査を実施するに当たっては、本協会の「調査規程」に従っているが、調査の地区割り方法について、以下説明を加えておく。

本協会では、全ての調査について地区割りを統一しており、国土座標を基にして最小4mの区画まで表示し、遺構・遺物の検出地点を明確にしている。その方法によれば、伏尾遺跡A地区は国土座標第Ⅵ座標系を使用し、地区割りの基本となる大阪府発行（1984年建設省国土地理院承認）1：2500地域計画図の大E-5-5と5-9に当たっている。つまりこれは、大阪府地区割りのうち大E-5-5で表される地域計画図に位置していることを示している。さらに、この図を12等分して500mの区画を作り、この区画にA～Lの呼称を与える。次にこの区画を25等分して100mの区画（これには01～25の名称）、さらにこの区画は625等分されて4mの最小区画ができるわけである。それには縦軸（優先）と横軸に、第4図のようなアルファベットが与えられ、地区の名称となっている。

例えば、遺物出土地点や遺構位置は、正式にはE 5 5 - L 15 O Rなどと標記されるが、たいていの場合、E 5 5については略される。

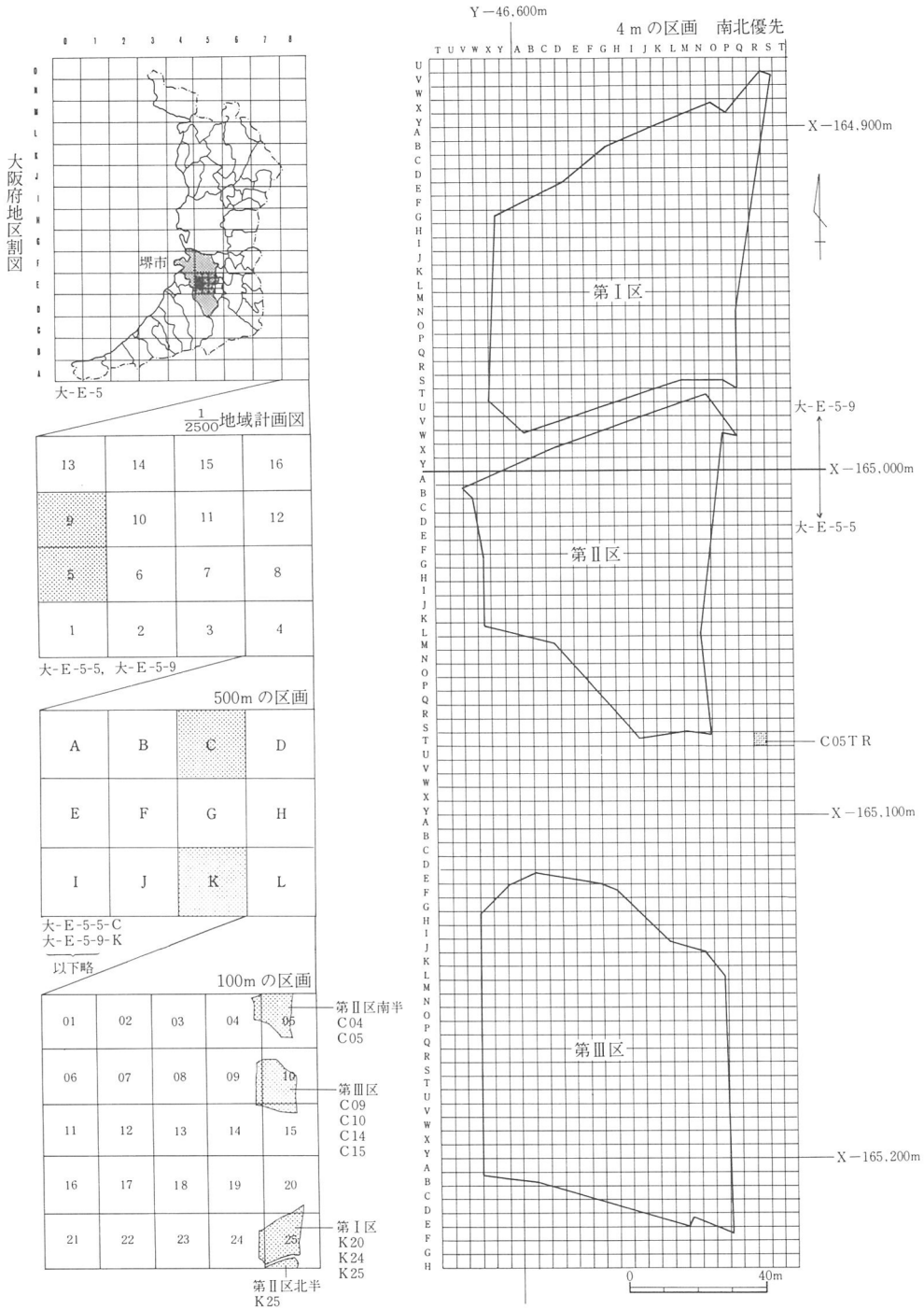
以上に従って、包含層の遺物は取り上げられ、遺構はその位置する区画（一部で良い）が記入される。遺構番号は、各調査区で通した数字のまとまりになっていないが、第Ⅰ区1501～3000、第Ⅱ区101～500・700～1500・3001以上、第Ⅲ区1～100・501～700が与えられている。遺構の種類はそのあとに記号で表示される。遺物の取り上げ時の登録番号は、第Ⅰ区が1001～2000・2601～2685、第Ⅱ区101～400・601～1000・2001～2600、第Ⅲ区では1～100・401～600が与えられている。

図面については航空測量を実施し、1/20図化が基本となっているが、その他については、調査中適宜図面を作成している。図対象の平面的位置については、必ずXとYの座標値を表示して明確にされている。



第3図 伏尾遺跡 (A地区) 調査位置図

第2節 調査の方法



第4図 地区割概念図

第II章 位置と環境

地理的環境（第5図）

伏尾遺跡（A地区）は、大阪府堺市伏尾・平井に所在する。この伏尾遺跡の位置する堺市南部地域一帯には洪積層の泉北丘陵が広がり、丘陵の北側には広範囲に広がる中位段丘と低位段丘が存在する。また、石津川は泉北丘陵中に源を發し、流路を北西にとり大阪湾へ流れ込んでいる。この川は、中流で和田川や陶器川、下流で百済川と合流する。川の流域は、地形的には中流域で谷底平野や沖積段丘を、下流域で沖積段丘や氾濫原を形成している。

伏尾遺跡は泉北丘陵の北端、中位段丘に至る標高30m付近に位置する。この中位段丘からは、広く北西方向が一望できる丘陵地となっている。西側の石津川右岸の沖積段丘上には、本年度同時に調査を実施した伏尾遺跡（B地区）が位置する。

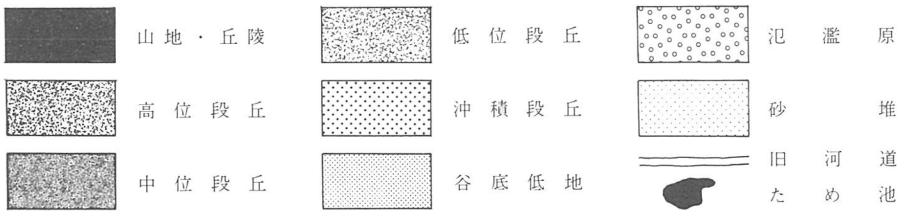
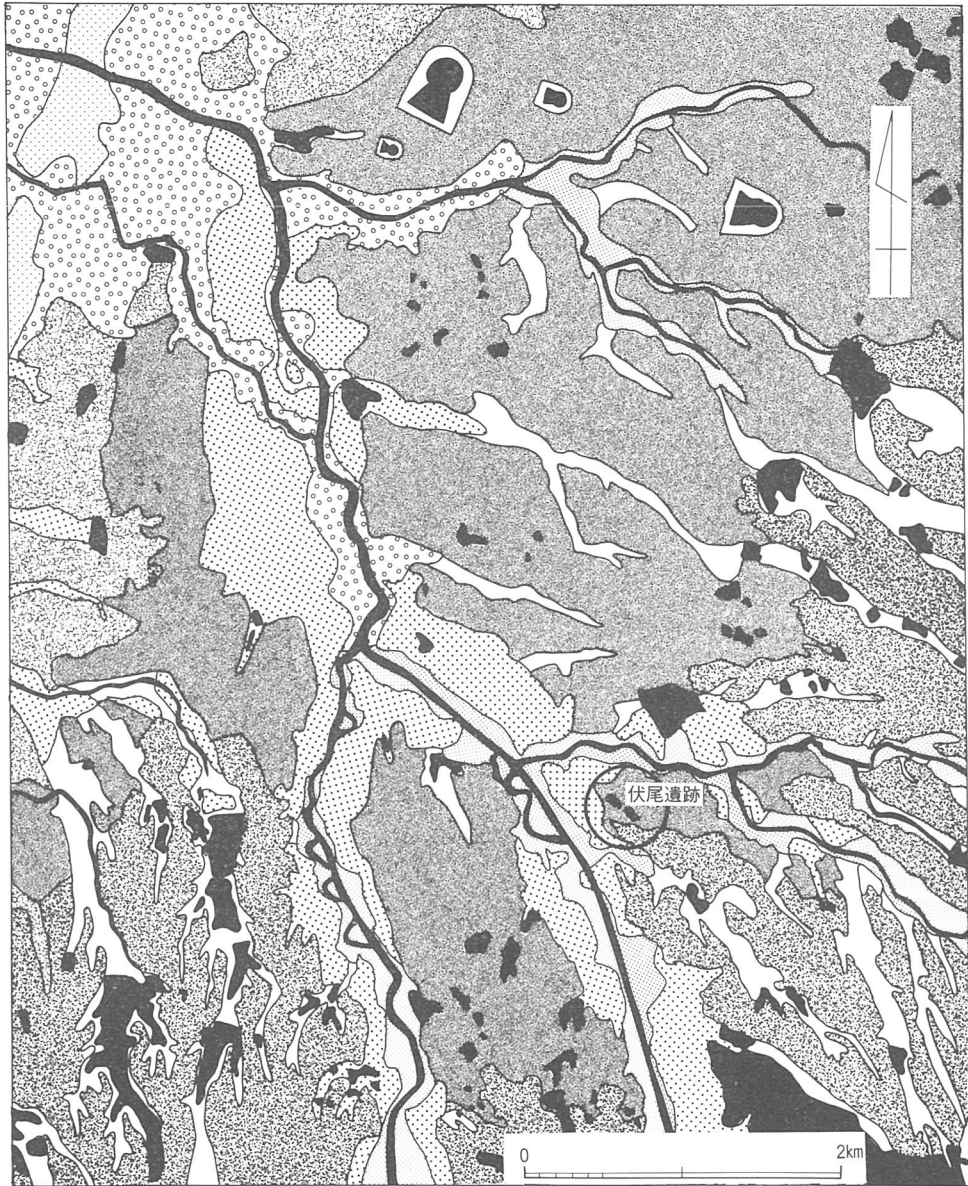
歴史的環境（第6図）

旧石器時代

石津川流域の旧石器時代は、遺物のみが数ヶ所の遺跡から出土している。遺物は、西浦橋遺跡、万崎池遺跡、野々井遺跡、鈴の宮遺跡などにみられ、また、今回、伏尾遺跡（A地区）においてもナイフ形石器が出土している。この地域では明確な遺構はみられないが、遺物が石津川流域一帯にみられることより、旧石器時代人の生活の場となっていたことは疑いない。

縄文時代

石津川流域の縄文時代の歴史は、太平寺遺跡の早期末から前期初頭にかけての深鉢形土器、野々井遺跡・小角田遺跡の有舌尖頭器の時期に遡る。続く前期には太平寺遺跡、小阪遺跡、中期には太平寺遺跡、小阪遺跡、伏尾遺跡（B地区）に各々遺物がみられる。以上の早期から中期までの遺跡は、遺物が出土するのみで明確な遺構は検出されていない。四ッ池遺跡では後期になると台地上に集落が営まれる。石津町東遺跡でも後期の遺構がみられる。その他遺構は検出されていないが遺物が出土する遺跡では西浦橋遺跡、上遺跡、小阪遺跡がある。晩期では四ッ池遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡では遺構を伴い、その他太平寺遺跡、黄金山遺跡、上遺跡、小阪遺跡では遺物のみがみられる。また四ッ池遺跡の深鉢形土器に靱痕のついたものがあり、後述する弥生時代前期との接点を考えるうえで重要で



(財) 大阪文化財センター『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』1984の第2図をもとに作成

第5図 伏尾遺跡周辺土地状況

ある。石津川流域では縄文時代には段丘上に集落が営まれ始めるが、時期が下ると低地にも進出するようになる。また、遺跡数も増えていることからいくつかの集団が集落を形成したものと考えられる。

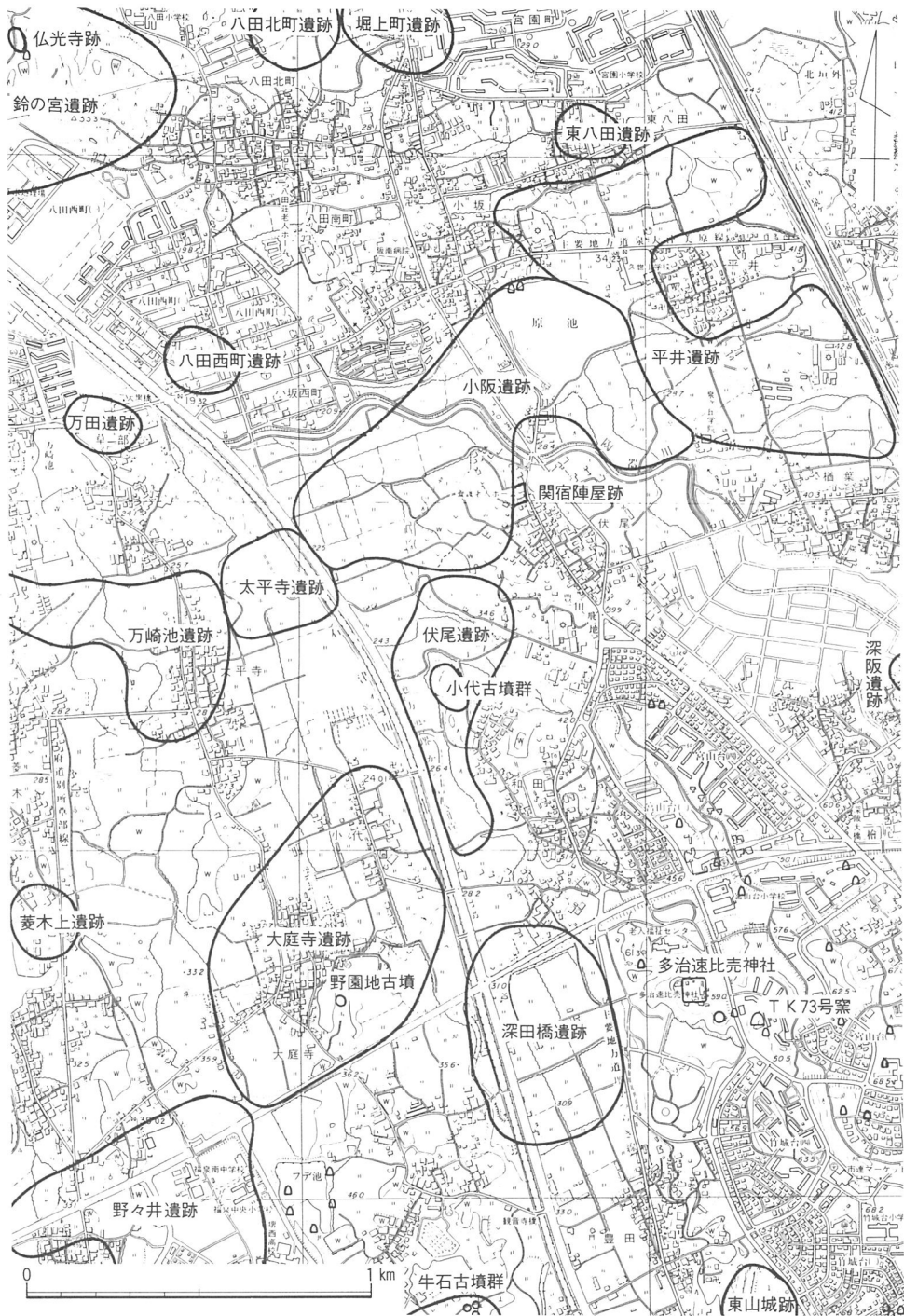
弥生時代

石津川流域の弥生時代の代表的遺跡は四ッ池遺跡であろう。四ッ池遺跡は先述の様に縄文時代中期以後に遺構・遺物がみられ、集落の成立が縄文時代に求められるが、大きく展開するのは弥生時代以降である。四ッ池遺跡は環濠集落として、また規模や存続期間から考えて石津川流域の拠点集落としての位置付けができる。他に前期の遺跡は黄金山遺跡、浜寺元町遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡、小阪遺跡がある。弥生時代前期の遺跡は縄文時代晩期から存続するものが多いが、縄文時代晩期の土器と弥生時代前期（新段階）の土器が共伴する例が四ッ池遺跡、上遺跡、西浦橋遺跡、鈴の宮遺跡でみられる。泉州での縄文時代晩期と弥生時代前期の状況を明らかにすることが課題である。ところで、この時期には立地も氾濫原などの低地の遺跡が増加する。

中期になると四ッ池遺跡が集落の規模を拡大する。浜寺元町遺跡、黄金山遺跡、上遺跡では前期から継続して遺物がみられ、日明山遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡、万崎池遺跡、磨製石剣・蛤刃石斧が出土した万崎遺跡、伏尾遺跡（A地区）がある。また、最近の調査成果では野々井遺跡から径約10mの大形の竪穴住居跡が、下田遺跡では竪穴住居跡、壺棺墓などが検出されている。この時期には、集落が中位段丘などの丘陵上に分布を広げる傾向がある。

後期では四ッ池遺跡、黄金山遺跡が前期以来存続するが、四ッ池遺跡では後期には集落も小規模化する。一方、万崎池遺跡では新たに竪穴住居、土壘墓がみられ、小阪遺跡のように後期になって土器がみられるようになる遺跡もある。弥生時代後期には前期、中期以来の低地の集落は、この石津川沿いに限らず規模を縮小あるいは廃絶するものが多い。このような地域的な変化は、集団関係になんらかの再編がなされた可能性があるであろうか。伏尾遺跡（A地区）でも後期の住居跡が検出されており、石津川流域を一望できる場所に立地し、中期以後の集落が高地へ移動する傾向は存続している。

石津川流域の弥生時代は、縄文時代晩期より継続する遺跡が多く、低地から高地へ広く定着する集団が増えている。この地域の弥生集団の状況は、石津川下流域の四ッ池遺跡を拠点的中軸として集団分岐を展開する小集落と考えられる各遺跡と、中期に成立する中流域のいくつかの集落によって成り立っている。後期には規模を縮小、廃絶する低地の集落



第6図 伏尾遺跡と周辺の遺跡（大阪府文化財分布図による）

がある一方で、新たに成立する集落もある。また、丘陵上に成立する集落が多いことも指摘できよう。

古墳時代

弥生時代後期から古墳時代前期へ継続する遺跡として四ッ池遺跡、石津遺跡、小阪遺跡、野々井遺跡、万崎池遺跡がある。この時期になって新しく成立する遺跡としては、船尾西遺跡、下田遺跡、太平寺遺跡がある。

前期には泉北地域の首長古墳として主体部に割竹形石棺をもつ二本木山古墳が知られる。

中期になると百舌鳥古墳群の造営、泉北丘陵での須恵器生産が始まる。百舌鳥古墳群のように「大王」級の墓が造営される一方、泉北地域の中、小首長や須恵器生産に関わったと考えられる集団の墓も造営されている。伏尾遺跡（A地区）では4基の古墳が5世紀代に築造されている。泉北丘陵内では、中期から後期には野々井遺跡、野々井南遺跡で約50基の古墳が造営される。中には前方後円墳2基、帆立貝形墳（大芝古墳）1基、木心粘土槨を主体部にもつもの1基が含まれる。

後期には牛石古墳群、檜尾塚原古墳群、陶器千塚古墳群などの群集墳が存在する。牛石古墳群は約15基で構成され、横穴式石室をもつ前方後円墳の高塚山古墳、木心粘土槨を主体部にもつ5号墳、7世紀に築造され磚積横穴式石室を主体部にもつ13、14号墳などが存在する。檜尾塚原古墳群は約10基で構成され前方後円墳が2基含まれる。木心粘土槨は「カマド塚」と称される21号墳と須恵器の円筒棺をもつ29号墳の2基がある。さらに、四ッ池遺跡内にも後期の高月古墳群があり4基で構成される。また、万崎池遺跡、菱木下遺跡、野々井遺跡、伏尾遺跡（A地区）で土壙墓群が検出されている。

次に、この時期の集落についてみると、須恵器製作道具の当て具などを出土した小阪遺跡を始めとして、泉北丘陵内では西浦橋遺跡、万崎池遺跡、野々井遺跡、菱木下遺跡、田園遺跡、山田遺跡、伏尾遺跡（A地区）の各遺跡も須恵器生産に関係した集落である可能性が高い。また深田遺跡、辻之遺跡、豊田遺跡のように須恵器の流通機構的な集落の性格を考えられる遺跡も存在する。

石津川流域の古墳時代の遺跡は弥生時代以来存続する遺跡と、中期の陶邑窯における須恵器生産に関連して成立した遺跡により成り立っている。この点は百舌鳥古墳群の造営とも密接な関係をもつものであり、この地域の歴史的特質となっている。

紙数の関係で参考文献は割愛させていただいた。

第III章 第I区の調査成果

第1節 概要 (第7図)

今回の調査地は、大きく見ると伏尾段丘と呼ばれる丘陵の先端部に位置する。この伏尾段丘は、大小数本の開析谷が走り尾根状の丘陵によって形成され、第I区の調査区の東側でも小規模な開析谷（以下は谷部と呼称する）が確認された。東西両丘陵（今回の調査では開析谷を挟んで東丘陵部と西丘陵部と呼称した）は、ほぼ北西に張り出す丘陵の先端部にあたり、後世の耕地化により現在ではかなり平坦に開発されているが、旧地形を復元すると南東に向かって緩やかに高くなるものと考えられる。丘陵先端部と石津川によって形成された平地部との標高差は約8～10mである。

東丘陵は、尾根状に張り出す丘陵先端部の西側一部を調査したにすぎず、遺構は確認されなかった。しかし後世の耕作土や東斜面部の堆積土の中には5世紀後半から6世紀にい



第7図 第I区主要遺構配置図

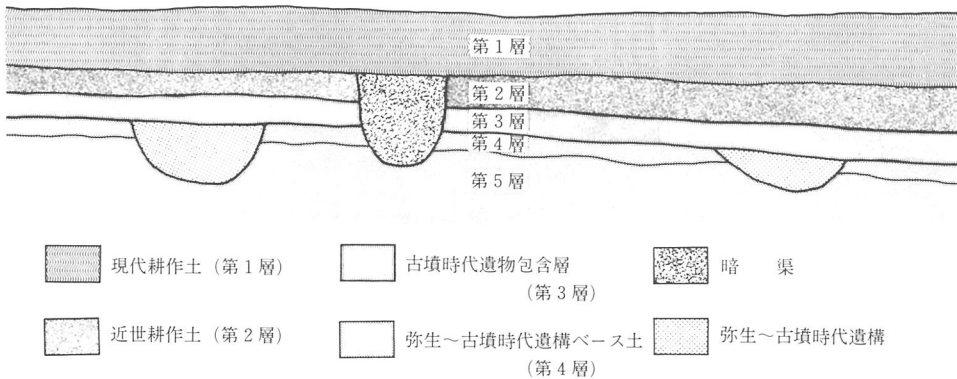
たる須恵器の破片がかなり出土しており、今回の調査区の東側に位置する丘陵の中心部には当代の遺構が存在することが窺える。

西丘陵は、丘陵の中心部に位置し後世の耕地開発によってかなりの範囲で削平されていたが、弥生時代、古墳時代前期、古墳時代中期、中・近世の遺構を確認することができた。弥生時代の遺構は、円形の竪穴住居1棟、方形の竪穴住居2棟の計3棟と土坑を6基確認した。古墳時代前期の遺構は方形の竪穴住居2棟、土坑3基を確認した。

古墳時代中期になると掘立柱建物を中心とした集落が丘陵全体に大きく展開する。確認された遺構は掘立柱建物17棟、溝10条、土坑約60基であり、当調査区では竪穴住居は確認されなかった。掘立柱建物は大きく分けて1間×1間のもの、梁行が1間、桁行が2間あるいは3間のもの、2間×2間の総柱構造のものなどがある。溝は大小2種類のものがある。土坑は、土器を意識的に納めたと考えられる状況で出土したものや、焼土や炭化物と共に、投棄された状況で出土したものがある。この集落の存続時期は陶器編年のI型式2～3段階を中心とした非常に短い期間である。

古墳時代中期の掘立柱建物を中心とした集落が廃絶して以後、新たな開発が行われるのは中世後期、16世紀以後の耕地開発に伴うものである。この耕地開発は丘陵部だけでなく、谷部にもみられる。丘陵部では埋甕、水溜め用の土坑、溝、池、谷部では井戸等の遺構が確認された。

東斜面部、西斜面部は近世以後の堆積が著しく、弥生時代から古墳時代にかけての旧地形はかなり急地形であったことが確認された。



第8図 第I区基本層序模式図

第2節 基本層序（第8・9図）

調査区内、西丘陵では前述した後世の耕地開発によって棚田状に開墾されているため、北側の下段部では良好な遺物包含層は確認されず、現代耕作土直下に弥生時代から中世後期の遺構が同一面で検出されるという状況である。遺構面は丘陵の基盤となる無遺物層で、礫層や粘土層によって形成されている。

南側の上段部も後世の削平を受けているが、西端部で比較的良好な形での基本的な層序の把握ができ大きく五層に分けられた。

第1層は現代耕作土である。

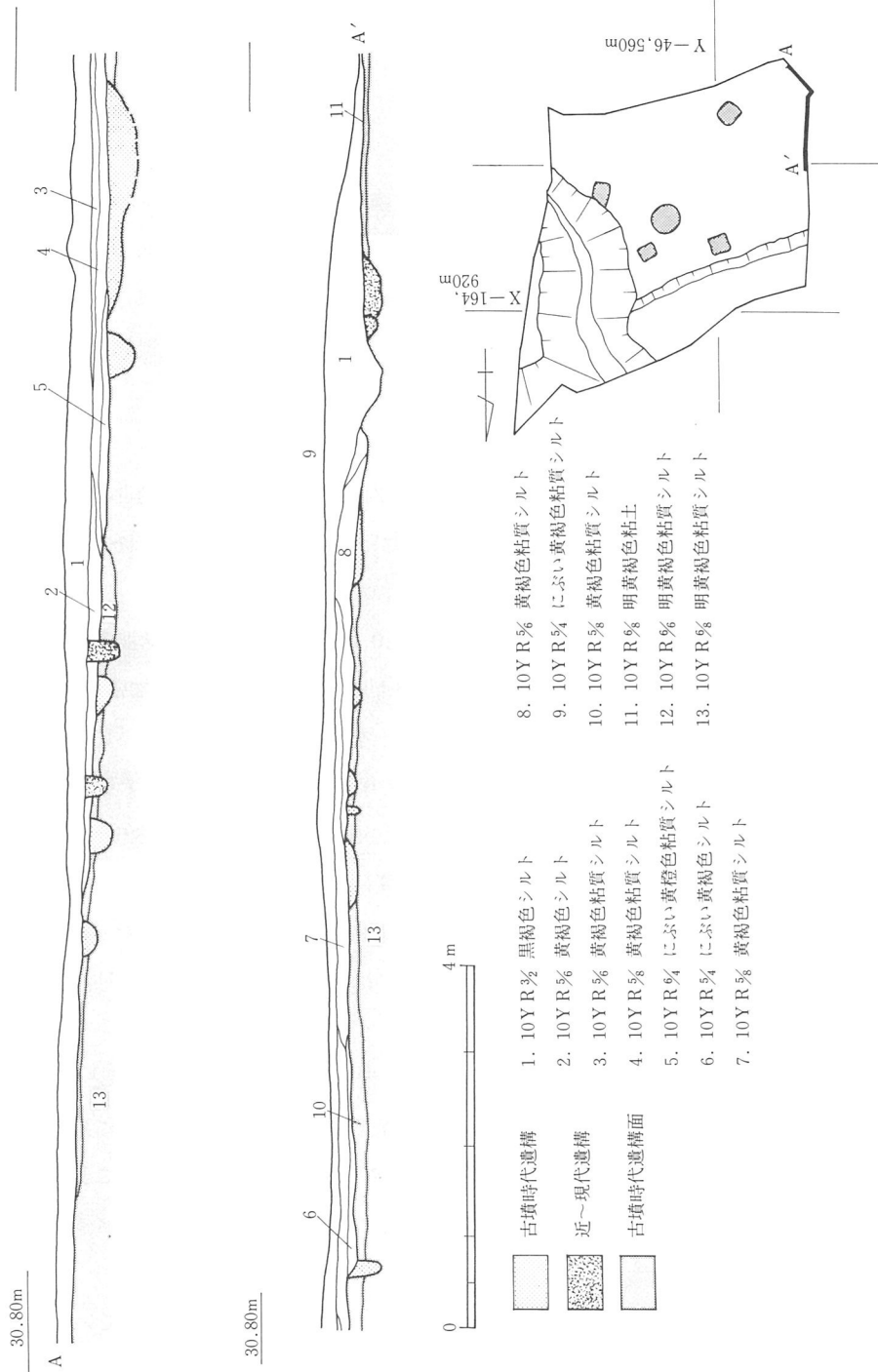
第2層は旧耕作土と考えられ、上段部では一様に認められる。西側から東側にかけて徐々に薄くなり部分的には二～三層に細分される。遺物は近世に属する染付碗の細片等が少量出土している。また第2層をベースとする遺構は現代の耕作に伴う石敷の暗渠がある。また上段部東端の谷部に向かう斜面部では礫や粘土を互層にして平坦に整地が施され、その上面に第2層の旧耕作土が確認された。整地層からも近世に属する染付碗の細片等が出土している。

第3層は弥生時代から古墳時代の遺物を包含する層である。調査区内で最も標高の高い南東端のわずかな範囲で確認された。土色は黄褐色を呈し、土質は粘質土である。層厚は約10cmである。

第4層は基本的に弥生時代から古墳時代に属する遺構のベース層である。上段部ではほぼ一様に認められるが、全体に削平は著しいと考えられる。層厚は西に向かって低く傾斜する調査区西端部が最も厚く、東側にかけて徐々に薄くなる。西端部で約15cmを測る。土色は黄褐色を呈し、土質は粘質及び砂混じり粘質土である。遺物の出土はみられず無遺物層と考えられる。

第5層は丘陵の基盤となる無遺物層である。黄褐色系の礫層あるいは粘質土層で構成される。

基本的な層序について以上であるが、第3層（古墳時代遺物包含層）は一部の狭い範囲でしか確認されておらず、前述したとおり標高も高く後世の削平を免れたと考えられる。また他のほとんどの調査区内では後世における耕地開発によって第3層および第4層の上面は削平されたと考えられ、遺構の残存状況も一様ではない。



第9図 第I区基本層序図 (1/80)

第3節 遺構と遺物

第1項 弥生時代

1. 竪穴住居

弥生時代に属する住居は、円形プランのもの1棟、方形プランのもの2棟の計3棟を検出した。いずれも後世の削平や攪乱により残存状況は良好ではないが、拡張の状況、炉の構造、排水溝の構造等、住居の構造を考える上では比較的良好な資料が得られた。また時期の決定は詳細な時期の検討を行える出土遺物は少なく、ここでは出土遺物からだけでなく、第II区で検出された住居の形態なども考慮して行った。

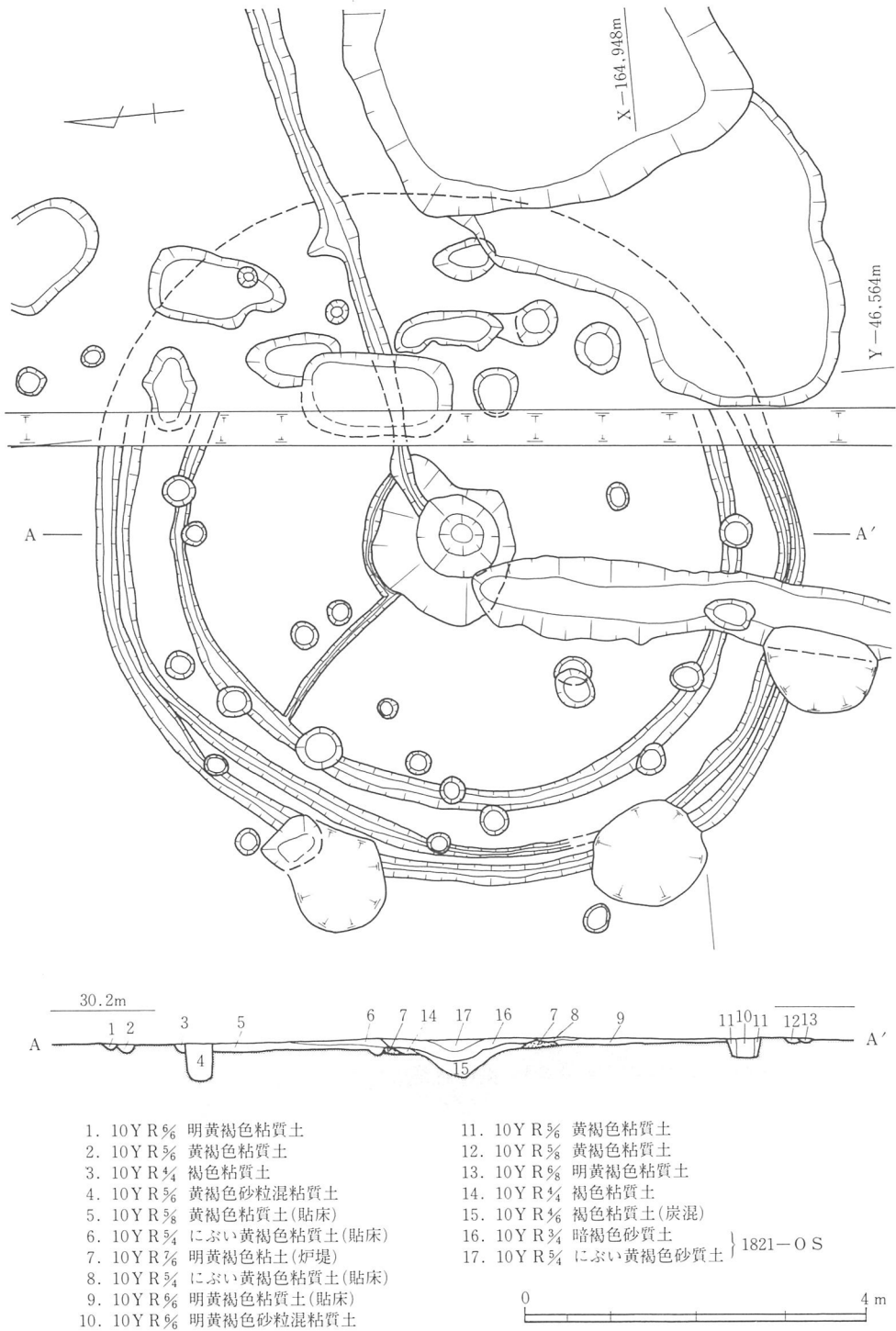
1820-O D (第10・11図・12図の3～11, 図版8・78・79)

丘陵縁辺部にあたるK25K I付近に位置する。平面形は円形を呈し、後世の開墾により東側は削平され、北側の一部は古墳時代の溝(1821-O S)によって切られている。壁溝は3条巡り、土層観察により二度の拡張が確認された。

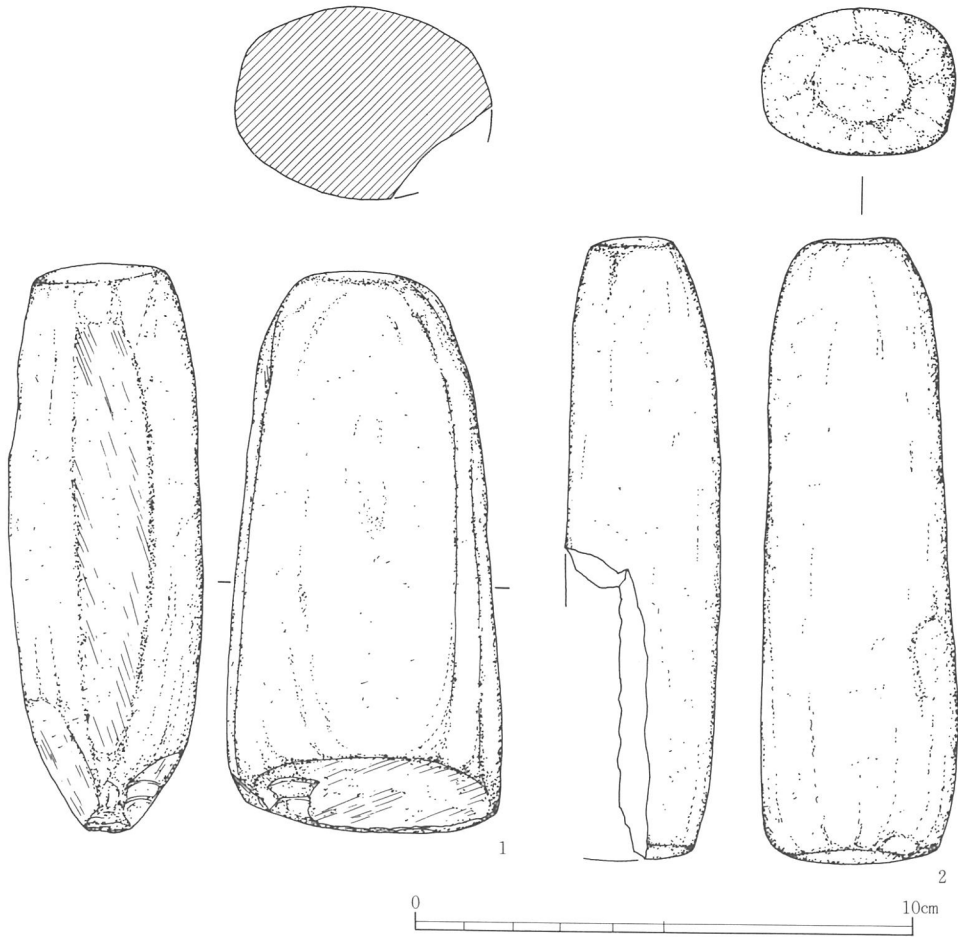
拡張前の住居は直径約6.7mを測る。壁溝は幅約0.25m、深さ約0.1mを測る。中央には直径1.6m、深さ0.4mの円形を呈する炉が確認された。炉の周りには上端幅約0.1m、下端幅約0.3m、高さ約0.1mの黄色粘土による盛り土を堤状に巡らす。堤の外周北側の一部には幅0.15m、深さ0.1mの小溝が巡り、北西側で床面を横断するかたちで壁溝とつながる。炉内は下層に炭を多量に含む褐色粘質土の堆積が認められた。上層は1821-O Sによって切られているため不明である。炉壁の顕著な赤変は認められなかった。また排水溝と考えられる炉から谷部に向かって派生する幅0.3～0.7m、深さ0.2～0.4mの溝が検出された。支柱穴は二箇所しか検出されていないが、構造的には四本柱と考えられる。柱穴埋土は黄褐色砂質土で、柱痕跡は認められなかった。

一度目の拡張後の住居は、直径約7.9mを測る。壁溝は幅0.1～0.25m、深さ0.1mを測る。拡張に際しては、床面を均一にするため拡張前の床面に黄褐色の粘質土による貼り床が施されていた。貼り床の厚さは約0.1mである。炉の周辺も新たな盛り土による堤が構築されたと考えられるが、後世の攪乱により確認はできなかった。支柱穴は拡張前の壁溝に沿って検出された。

二度目の拡張後の住居は、一度目の拡張後の住居の壁溝に沿って行われている。直径約8.4mを測る。壁溝は幅約0.3m、深さ0.1mを測る。柱穴は一度目の拡張後のものを利用したと考えられる。規模は直径0.3～0.5m、深さ0.25～0.4mを測る。埋土は黄褐色系



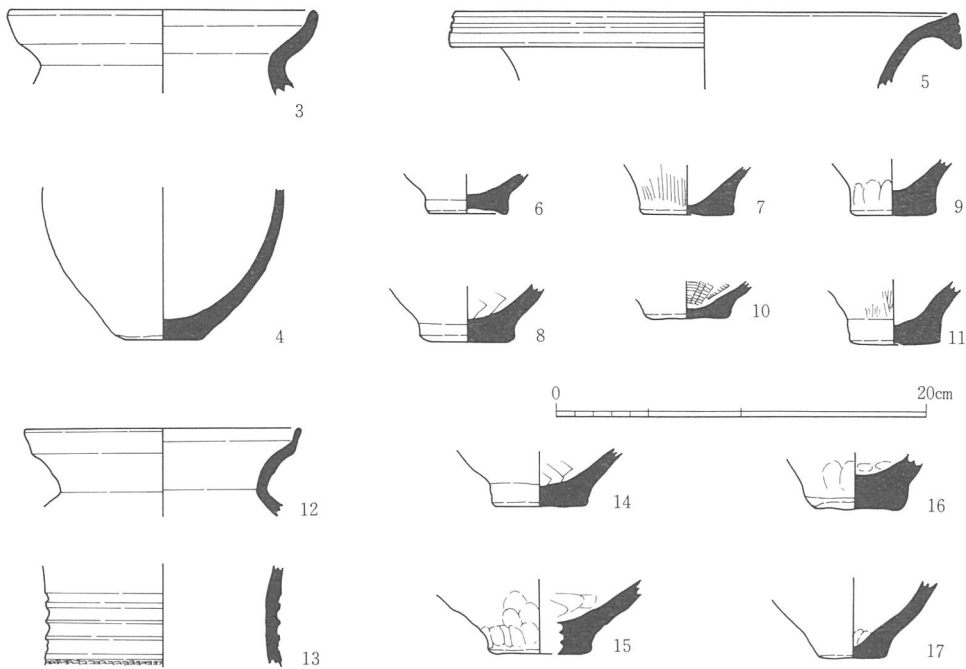
第10図 1820-O D平面・断面図 (1/80)



第11図 1820-OD出土遺物 (2/3)

の粘質土で、これらの中には柱痕跡の確認されたものもある。

遺物は、二度目の拡張住居の壁溝より甕2点(4)、甌1点、蛤刃石斧1点(1)等が出土し、炉内から甕の底部2点(8)、高杯脚部1点等が、柱穴内からは長頸壺の頸部1点、甕の底・体部3点(6・7)、甌の底部1点、すり石1点(2)等が出土した。また、排水溝からは、長頸壺の頸部3点、広口壺の口縁部2点(5)、高杯の脚部2点、甕10点(3・9~11)等が出土した。甕(3)は口縁部を若干上方に屈曲させる。甕(4)は全体に剝離が著しく調整は不明である。蛤刃石斧(1)は全長11.3cm、最大幅5.6cm、最大厚3.9cmで、側面が一部欠損するがほぼ完形である。刃は両刃で、両面でやや大きさが異なり、先端部は刃つぶれが認められる。側面には甘い面取りを施す。すり石(2)は全長



第12図 1540・1820-O D出土遺物 (1/4)

12.6cm, 最大幅4cm, 最大厚3.1cmで, 下半部はやや肥厚し扁平な円柱形を呈する。両端部に使用面が認められる。

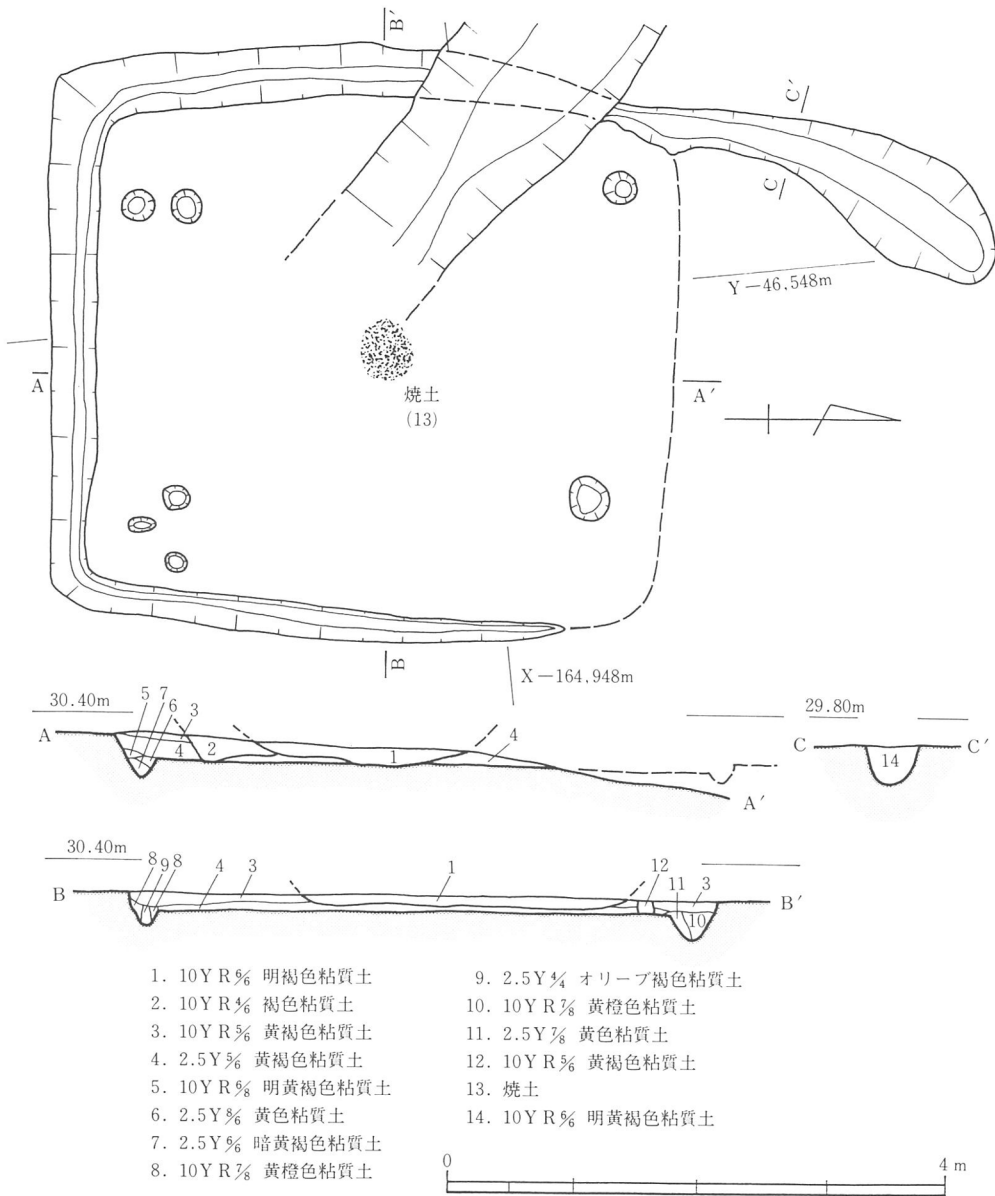
住居の時期は, 出土遺物から後期の前半を前後する時期と考えたい。

1540-O D (第12図の12~17・13図, 図版9・79)

丘陵縁辺にあたるK25MM付近に位置する。平面形は方形を呈する。規模は東西4.8m, 南北は北側の壁が後世の削平のため確認できなかったが, 約5mと考えられる。壁の直下には幅0.25~0.45m, 深さ約0.15mの壁溝が巡る。壁溝の断面形はU字形を呈し, 土層観察によって板壁材と裏込め土の痕跡を確認した。床面には貼り床土は認められなかった。床面ほぼ中央には, 炉と考えられる赤変した焼土が直径約0.4mの範囲で検出された。床面には非常に浅い小ピットは検出されたが, 支柱穴と考えられるものは検出されなかった。住居の埋土は黄褐色系の粘質土である。また住居の北側には排水溝と考えられる谷部に向かって派生する幅0.35~0.9m, 深さ0.2~0.5mの溝が検出された。溝の埋土は明黄褐色粘質土である。

遺物は住居の埋土中より甕10点, 高杯の脚部1点等が出土したが, いずれも細片で図示し得なかった。排水溝からは, 甕片30点(12・16・17), 壺片10点(13~15)等が出土し

第3節 遺構と遺物



第13図 1540-OD平面・断面図 (1/60)

た。甕 (12) は口縁部を上方に屈曲させ、体部には若干タタキ調整の痕跡が認められる。壺 (13) は広口壺の頸部と考えられ、体部には簾状文が認められ、他のものより時期の遡るものである。住居の時期は、甕 (12) に代表されるように、タタキ調整を施すものが含まれ後期と考えられるが、住居の平面形、炉の形態等の構造から見てみると時期の下る可能性も指摘される。

1780-O D (第14図, 図版9)

丘陵上段部の比較的標高の高いK25 T E付近に位置する。後世の開墾による削平が著しく、壁溝、柱穴、炉のみが残存していた。平面形は隅丸方形を呈する。壁溝の北西側半分は完全に削平されているが、南東側には壁溝が二条巡り、建て替えが行われたことが確認された。

外側のものは一辺約5.6mで、東側と南側の一部を古墳時代中期の土坑(1777・1767-O O)に切られる。壁溝は現存状況で幅0.15m、深さ0.12mを測る。内側のものは一辺約4.3mを測り、壁溝は現存状況で幅0.2m、深さ0.05mを測る。壁溝の埋土は黄褐色粘質土である。

床面のほぼ中央には円形を呈する、直径0.5m、深さ0.3mの炉が検出された。炉の埋土は最下層に褐色粘質土がレンズ状に薄く堆積し、上層には炭化物を含む黒褐色系の粘質土の堆積が認められた。炉の壁面には顕著な赤変は認められなかった。主柱穴はP 1～4の四箇所と考えられる。規模は直径0.3～0.35m、深さ0.3～0.5mを測り、埋土は黄褐色粘質土、黄橙色粘質土等で、柱痕跡の確認されたものもある。P 6～9は、柱間が狭く、層位的な根拠もなく、ここではどちらに伴うものかの判断は避けたい。

また住居の北側には当住居の排水溝と考えられる西北方向に走る幅0.3m、深さ0.2mの溝(1794-O S)が検出された。断面形はU字形を呈し、埋土は黄褐色粘土である。

遺物は柱穴内より甕の体部片が約15点出土している。これらの遺物の中には、体部にタタキ調整の認められるものがあり、後期に属するものと考えられる。また住居の形態から見ても、平面形が隅丸方形を呈し土坑状の炉が認められることなど、第II区で検出された後期に属する106-O Dと共通点が認められる。排水溝からの遺物の出土はみられなかった。

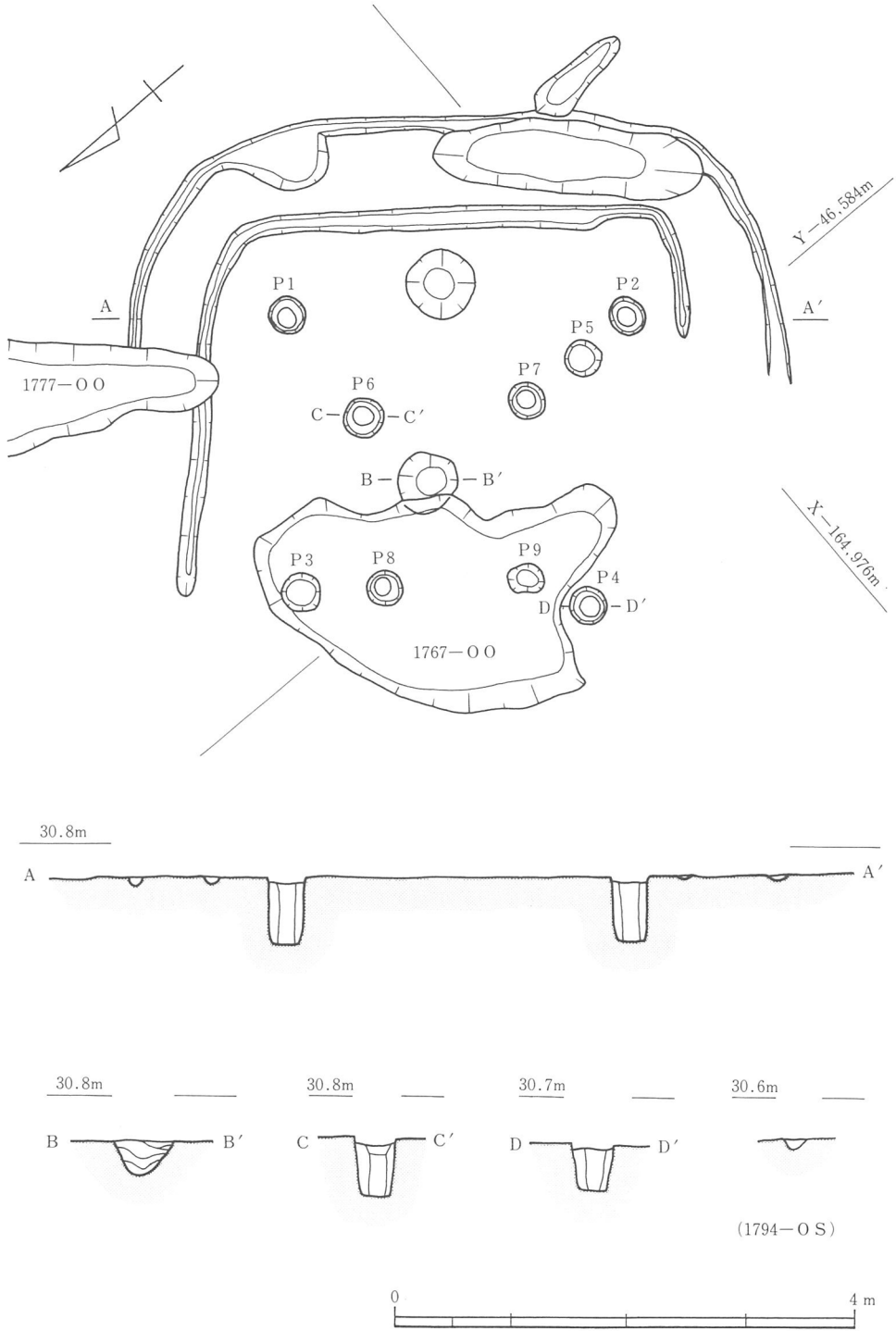
2. 土坑

弥生時代に属すると考えられる土坑は6基検出された。いずれも、住居の周辺部に位置する小規模な浅いものである。出土遺物は甕等の破片が数点出土したのみで、詳細な時期や性格の検討はできなかった。

2187-O O (付図1)

住居1821-O Dの北側、K25 I Iに位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径0.5m、深さ0.15mである。埋土は大きく二層に大別でき、下層が明黄褐色粘質土、上層が黄褐色

第3節 遺構と遺物



第14図 1780-OD平面・断面図 (1/60)

粘質土である。

時期については、遺物の出土がみられず、古墳時代まで下る可能性もあるがここでは埋土の状況等から判断して弥生時代のものとしておく。

1551-〇〇（付図1）

住居1540-〇Dの東側、K25N〇に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は黄褐色砂礫混土である。

遺物は出土しなかったが、1540-〇Dの周辺に位置し埋土等の状況からもほぼ同時期に属すると考えられる。

1552-〇〇（付図1）

住居1540-〇Dの東側、K25N〇に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.7m、深さ0.15mを測る。埋土は黄褐色砂礫混土である。

遺物は出土しなかったが、1540-〇Dの周辺に位置し埋土等の状況からもほぼ同時期に属すると考えられる。

1781-〇〇（付図1）

K25QDに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.65m、深さ0.1mを測る。埋土は黄褐色粘質土である。

出土遺物は甕の底部1点、長頸壺の口縁部1点がある。

1768-〇〇（付図1）

K25SDに位置する。平面形は円形を呈し、直径0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は黄褐色砂質土である。

遺物は甕の体部片1点がある。

3. 溝

1545-〇S（付図1）

1540-〇Dの南側、K25OMに位置する。検出全長が短く、細長い土坑とも考えられるが、ここでは溝として報告しておく。規模は検出全長2.6m、幅0.4m、深さ0.3mを測る。断面形は緩やかなU字形を呈し、埋土は黄褐色粘質土の単一層である。

出土遺物は後期に属すると考えられる甕の底・体部片13点、広口壺の口縁部片1点等がある。甕の体部にはタタキ調整が認められる。

第3節 遺構と遺物

第2項 古墳時代前期

1. 竪穴住居

古墳時代前期に属する住居は2棟検出された。いずれも方形プランを呈し、丘陵の縁辺部に位置する。後世の削平によって残存状況は良好ではないが、拡張の状況や住居の構造の把握は行なえた。また遺物の出土点数は少ないが、詳細な時期の検討を行なえる資料は得られている。

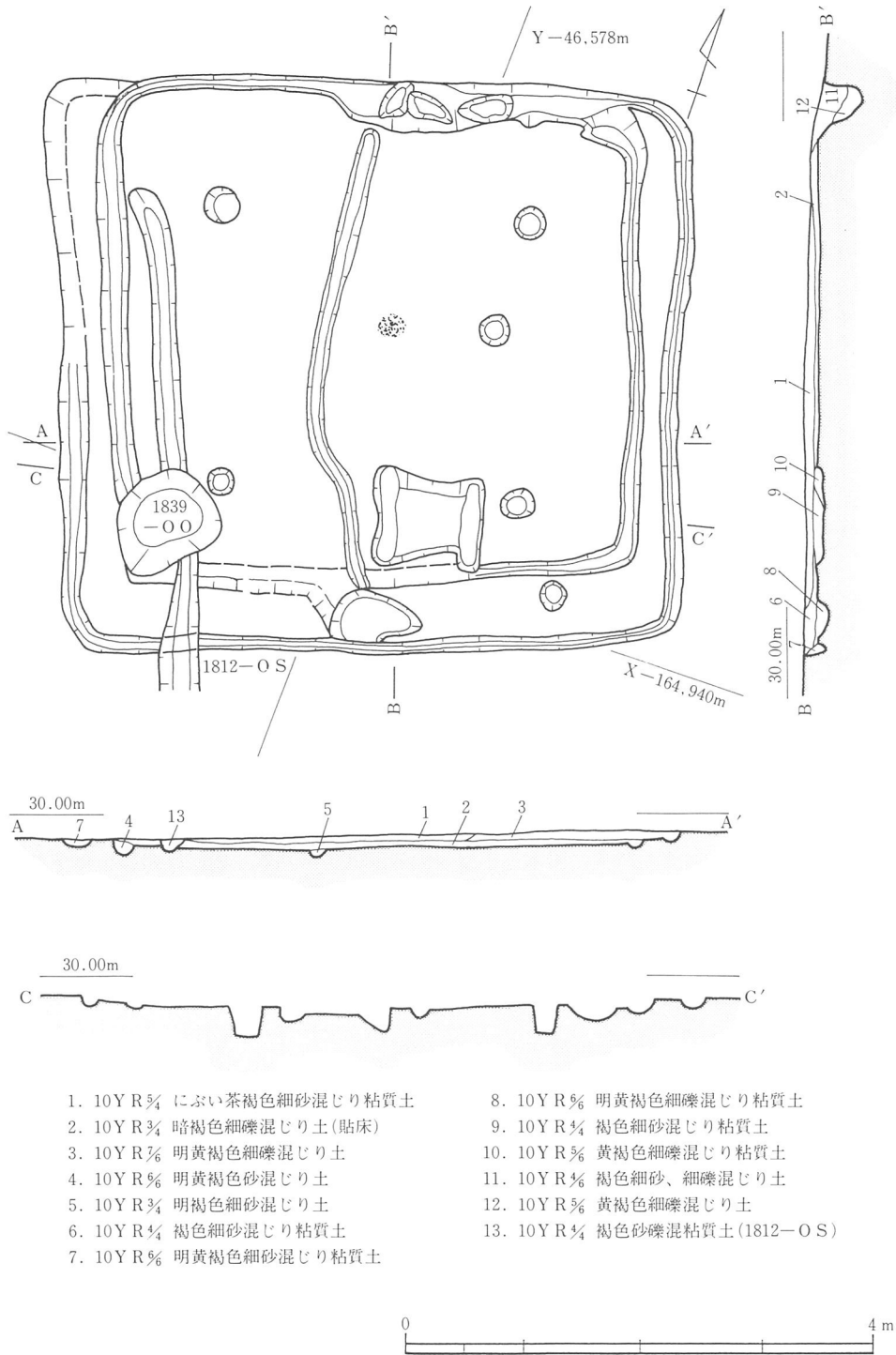
1830-O D (第15・17・18図の23, 図版10・78)

丘陵縁辺部のK25KE付近に位置する。平面形は方形呈し、断面観察等により拡張を行なっていることが確認された。

拡張前の住居は南北4.3m、東西4.6mを測り、壁直下には幅0.12~0.22m、深さ0.05~0.1mの壁溝が巡る。住居の南辺中央付近には、壁に接して平面形が長方形を呈する0.9×0.7m、深さ0.07mの土坑がある。この土坑の東西両端は幅0.15m、深さ0.1mで、溝状に落ち込み、中からは古墳時代前期に属する土師器の甕の口縁部(20)がほぼ完形で出土した。床面のほぼ中央には炉と考えられる赤変した焼土が直径約0.2mの範囲で検出された。支柱穴は四箇所あり、直径0.22~0.3m、深さ0.26~0.3mを測る。柱穴内の埋土は黄褐色系の細礫混じり粘質土である。また、住居床面の中央部では、住居をほぼ二分するかたちで、南北方向に走る小溝が検出された。

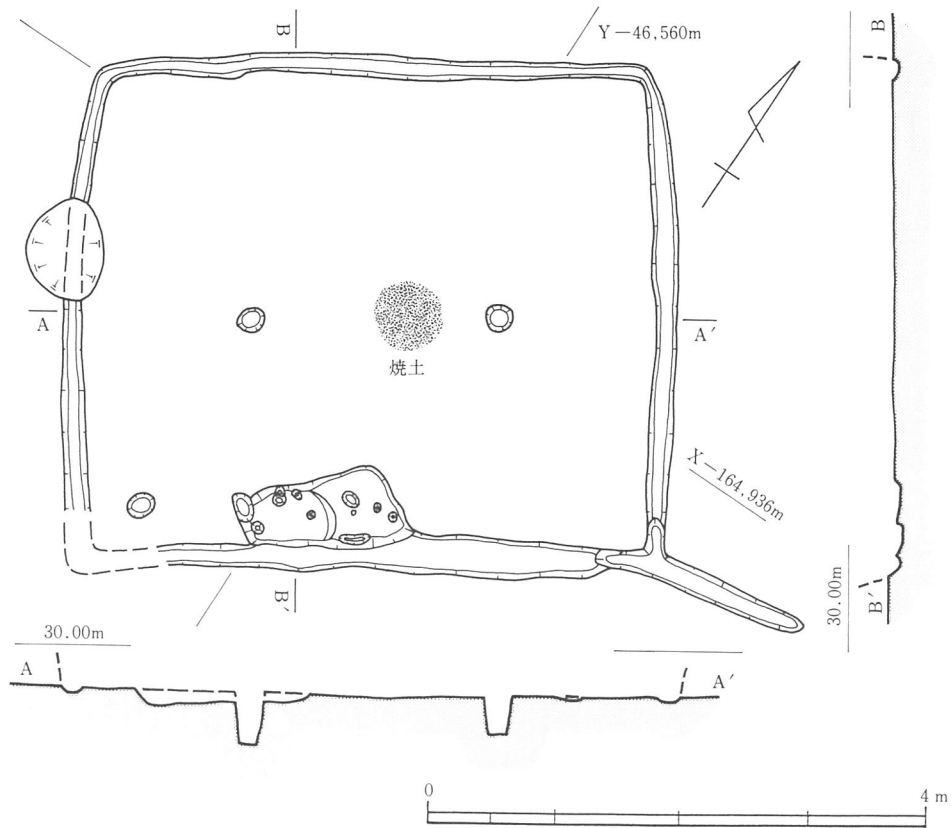
拡張後の住居は南北4.95m、東西5.35mを測り、東、西、南側をそれぞれ0.3~0.65m拡張し、北側は拡張前の壁溝を踏襲している。拡張後の壁溝は幅0.15~0.2m、深さ0.07mを測り、一部北辺中央付近は幅0.45m、深さ0.3mを測り、広く深くなる。南辺中央付近には壁に接して平面形が楕円形を呈する0.8m×0.45m、深さ0.1mの土坑がある。床面は拡張前のものに貼り床土を施し、ほぼ均一に仕上げている。貼り床土は暗褐色細砂混じり土である。焼土は後世の削平のため確認されなかった。支柱穴は拡張前のものを踏襲しているものと考えられる。また他の住居では普遍的に見られた排水溝は当住居では検出されなかった。

遺物は住居の埋土内より古墳時代前期に属する、甕片6点、壺片1点、高杯の脚部1点(19)の他、弥生時代に属する甕の底・体部片が11点、壺2点(18)、石包丁1点(23)が出土した。また拡張前の土坑からは、前述した甕の口縁部が1点(20)、拡張後の土坑からは、弥生時代の甕の細片が出土した。甕(20)は口縁部が肥厚する、いわゆる布留式と呼称されるものである。高杯脚部(19)の外面はヘラミガキ調整を施し、内面は粗いケ



第15図 1830-O D平面・断面図 (1/60)

第3節 遺構と遺物

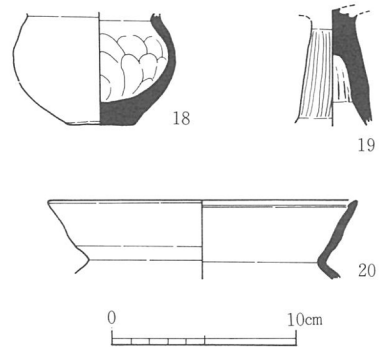


第16図 1520-O D平面・断面図 (1/60)

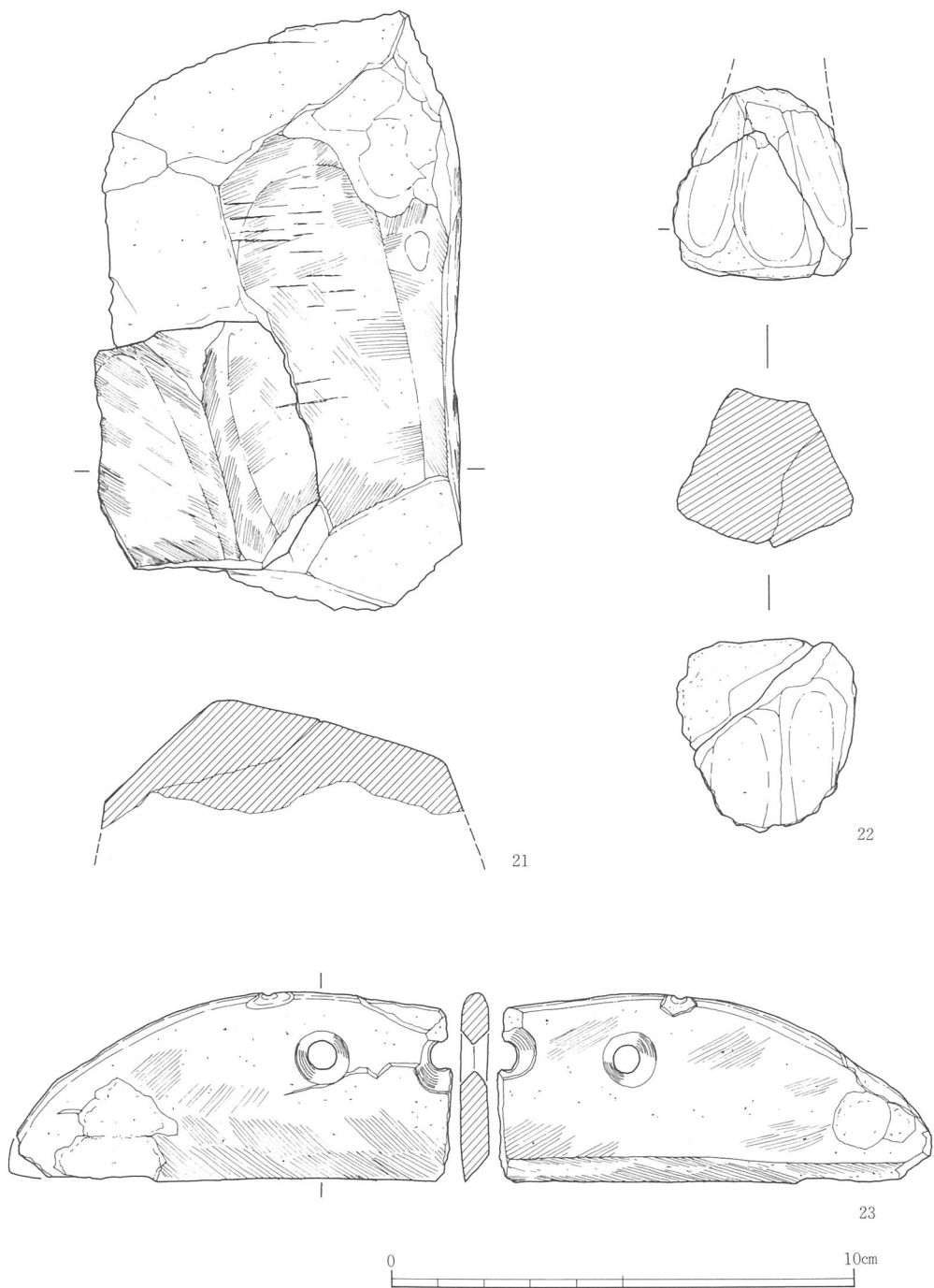
ズリ調整を施す。18は弥生時代に属する小型壺で外面はナデ調整，内面は粗い指ナデ調整を施す。石包丁 (23) は刃部は片刃で鋭く仕上げ，裏面は内湾する。二箇所の穿孔は両方向から行う。石材は片岩と考えられる。

1520-O D (第16・18図の21・22, 図版11・78)

丘陵縁辺部のK25 I J 付近に位置する。後世の削平により壁溝，柱穴等がわずかに残存していた。平面形は長方形を呈し，南北4.23m，東西5 mである。壁溝は現存で幅0.17~0.34m，深さ0.05mで，南側が広い。住居の南辺ほぼ中央には，壁に接して不定形な0.5×1.3m，深さ0.1mの土坑がある。この土坑の埋土には多量の焼土や炭化物が含まれており，出土した砥石 2点も二次焼成を受けていた。住居の



第17図 1830-O D出土遺物 (1/4)



第18図 1520・1830-O D出土遺物 (2/3)

第3節 遺構と遺物

ほぼ中央には炉と考えられる赤変した焼土が、直径0.55mの範囲で検出された。支柱穴は二箇所あり、直径は0.2m、深さ0.3～0.45mである。埋土は褐色系の砂礫混じり粘質土である。また住居の東側には、排水溝と考えられる小溝が住居の南東隅の壁溝から谷部に向かって派生している。

遺物は、住居内の土坑から砥石が2点（21・22）出土したのみである。21は非常に破砕が著しく全体は把握できないが、残存部分の観察によると最低四面の使用面が認められる。二次焼成のため残存状況はよくないが、22にも使用面と考えられる比較的平坦な面が五面認められる。

住居の時期は、出土遺物が砥石に限られるため詳細な時期は不明であるが、平面形が方形を呈し、土坑状の炉が認められないこと、床面中央に焼土が認められること、壁際に不定形な土坑が認められることなど、1830-ODとの共通点が多く認められ、当住居も古墳時代前期に属するものと考えられる。

2. 土坑

古墳時代前期に属すると考えられる土坑は3基検出した。いずれも、住居の周辺部に位置し、褐色系の埋土が認められる。

1525-OO（付図1）

住居1520-ODの南東、K25JLに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.45m、短径0.49m、深さ0.08mを測る。埋土は褐色粘質土である。

遺物は古墳時代前期に属し、口縁端部が肥厚する甕が1点出土している。

1734-OO（付図1）

住居1520-ODの東側、K25ILに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、直径0.6m、深さ0.05mを測る。埋土は褐色粘質土である。

出土遺物は認められないが、埋土が近接する1525-OOと近似しほぼ同時期のものと考えられる。

1735-OO（付図1）

住居1520-ODの東側、K25IKに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.55m、深さ0.1mを測る。埋土は褐色粘質土である。

出土遺物は認められないが、埋土が近接する1525-OOと近似しほぼ同時期のものと考えられる。

第3項 古墳時代中期

1. 掘立柱建物

掘立柱建物は計17棟検出した。検出状態は丘陵下段のものは後世の削平が著しく、柱穴は浅いものが多いが、上段西側で検出したものは比較的残存状況は良好であった。これらの建物は、平面形が長方形を呈し2間×1間あるいは3間×1間のもの、正方形を呈し2間×2間のもの、正方形を呈し1間×1間の小規模なもの、ほぼ正方形を呈し1間×1間の非常に大規模なもの大きく四形態に分けられた。時期は柱穴内の出土遺物や建物周辺の土坑や溝の出土遺物からほとんどのものは5世紀後半に属すると考えられる。

1861-O B (第19図, 図版14)

丘陵縁辺のK25LA付近に位置する。方位は桁行軸線方向でN-70°-Eを指す。規模は桁行3間(4.76m)×梁行1間(3.34m)で、桁行間の柱間は1.42~1.81mである。南西隅の柱穴は攪乱により検出できなかった。柱穴は直径0.3~0.4m、深さ0.15~0.18mで非常に浅く、後世の開墾によって削平されている。柱穴内埋土は明黄褐色粘質土、黄橙色粘質土等で、柱痕跡が認められる。また1868・1872-O Bと平面的には重複するが、柱穴の切り合いは認められず詳細な前後関係は不明である。遺物は出土しなかった。

1868-O B (第19図, 図版14)

K25MBに位置し、1861・1872-O Bと重複する。規模は1間(2.73m)×1間(2.6m)の小規模なものである。方位はN-56°-Eを指す。柱穴は直径0.25~0.3m、深さ0.2~0.3mで、1861-O Bと同様に削平が著しい。柱穴内埋土は黄褐色系の粘質土である。また1861・1872-O Bとの詳細な前後関係は不明である。遺物は出土しなかった。

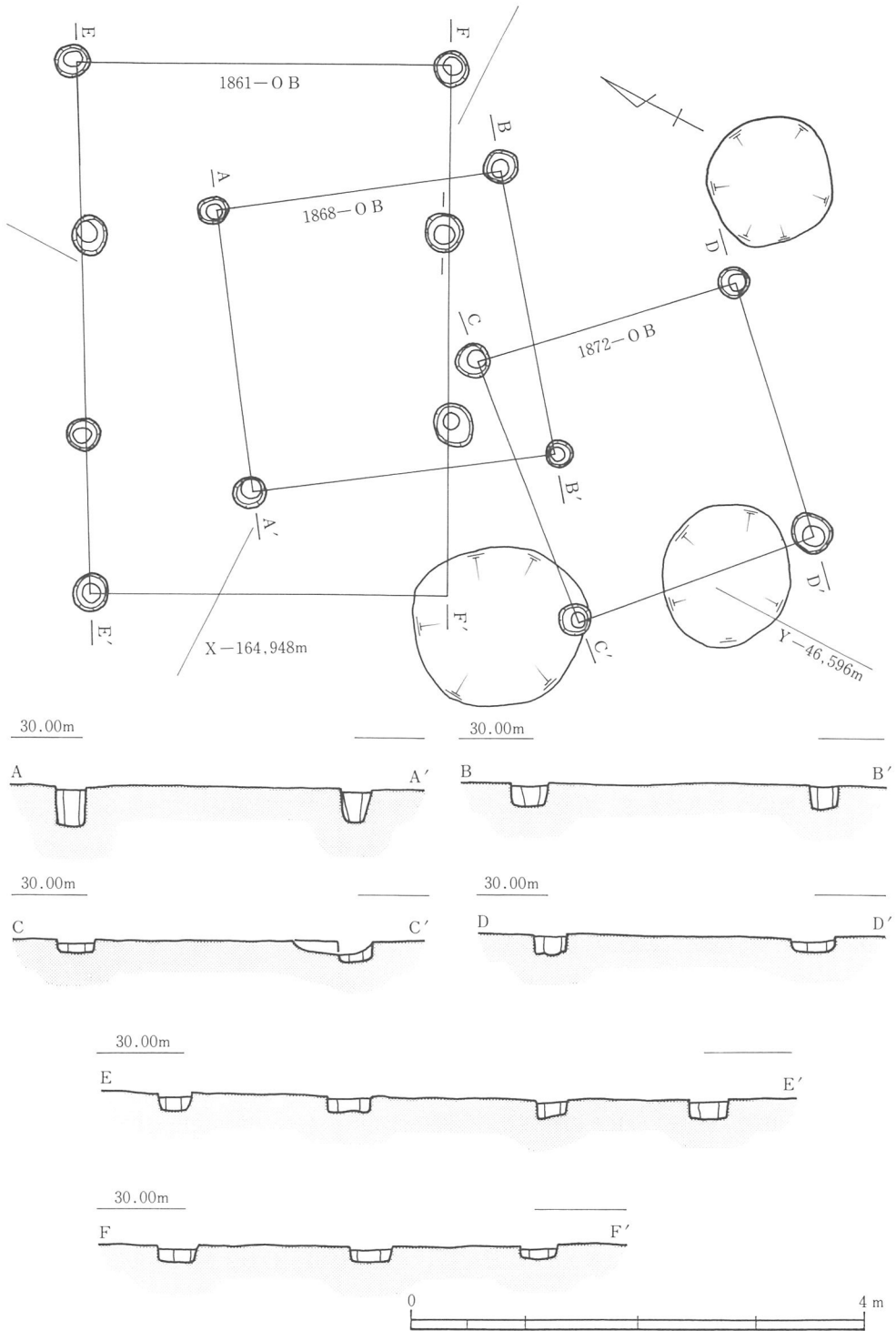
1872-O B (第19図, 図版14)

K25NBに位置し、1861・1868-O Bと重複する。規模は1間(2.5m)×1間(2.42m)で、小規模なものである。方位はN-42°-Eを指す。柱穴は直径0.3~0.4m、深さ0.12~0.2mで、後世の削平が著しい。柱穴内埋土は黄褐色系の粘質土あるいは砂質土である。また1861・1868-O Bとの詳細な前後関係は不明である。遺物は出土しなかった。

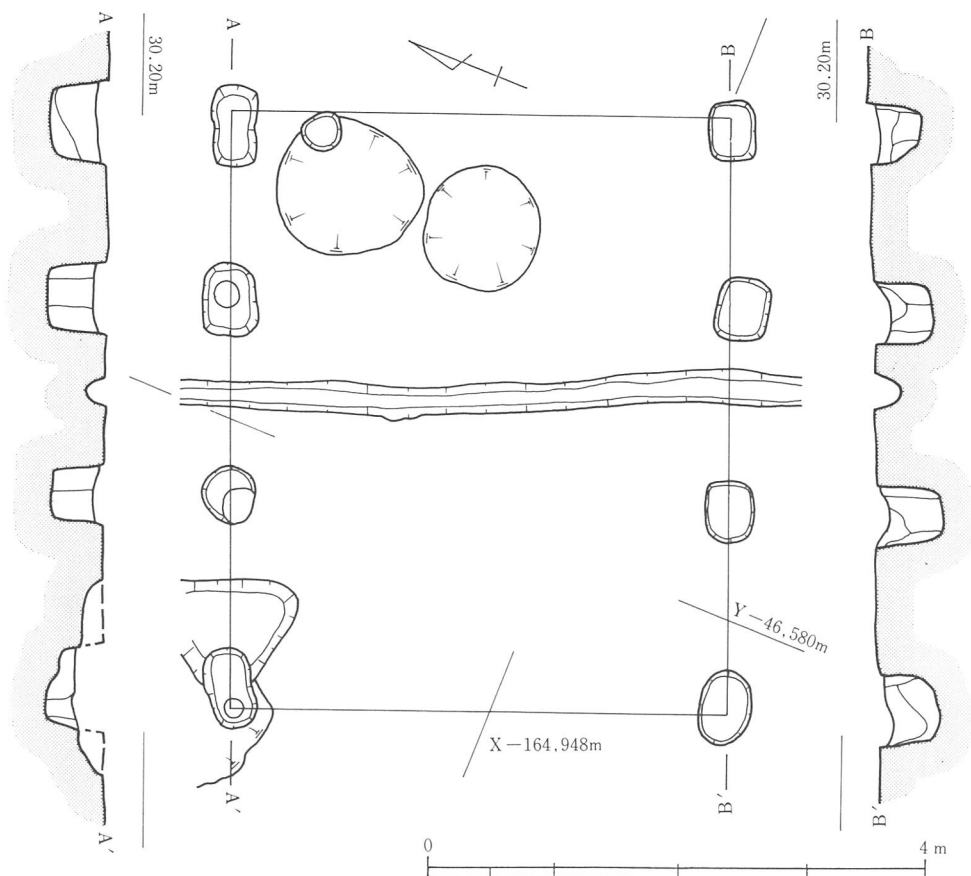
2125-O B (付図1)

1872-O Bの南側のK25NCに位置する。規模は1間(2.45m)×1間(2.4m)で、小規模なものである。方位はN-59°-Eを指し、ほぼ1861-O Bと同一である。柱穴は直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mで、後世の削平が著しい。柱穴内埋土は黄褐色粘質土、黄橙色粘質土等で柱痕跡が認められた。遺物は出土しなかった。

第3節 遺構と遺物



第19図 1861・1868・1872-O B平面・断面図 (1/60)



第20図 1846-OB平面・断面図 (1/60)

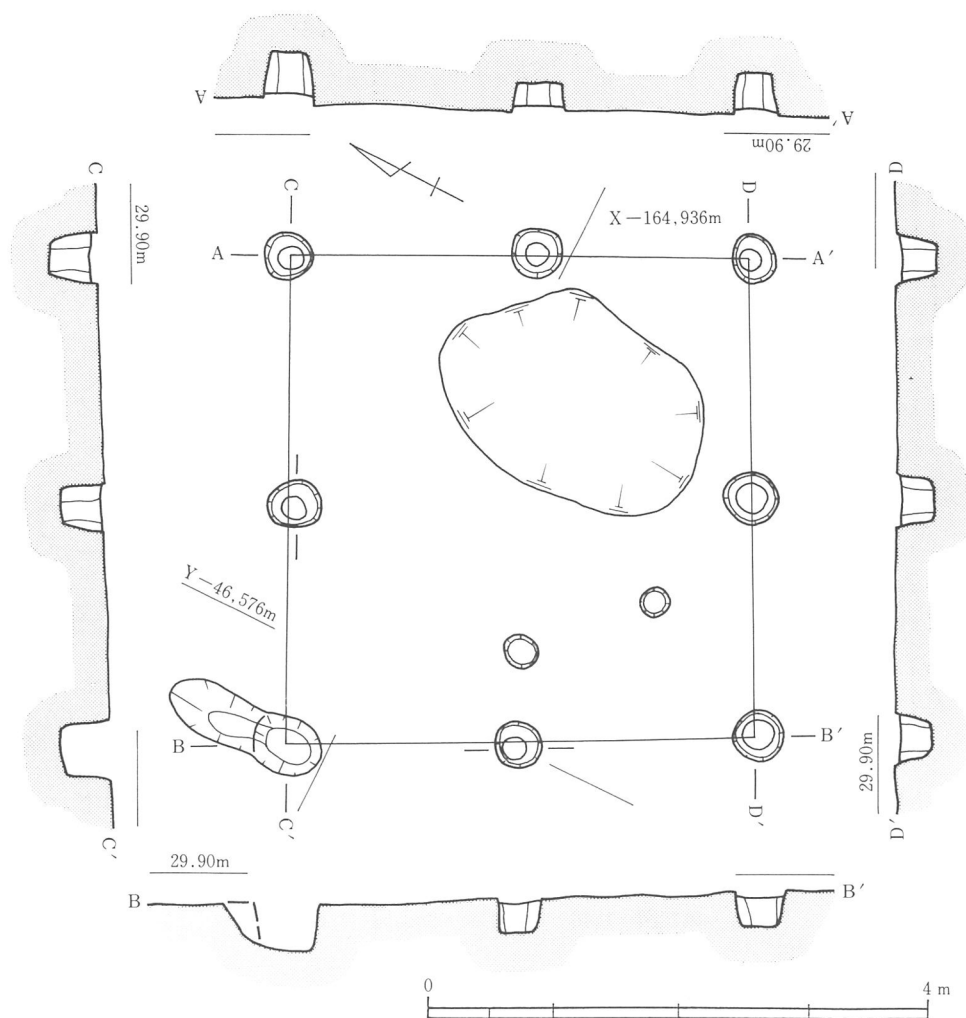
2192-OB (付図1)

丘陵縁辺部のK25LCに位置する。規模は桁行2間(5.0m)×梁行1間(3.65m)である。方位は桁行軸線方向でN-32°-Wを指し、1861-OBとほぼ直交する。柱穴規模は直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mで、非常に浅く後世の削平が著しい。柱穴内埋土は黄褐色系の粘質土である。遺物は出土しなかった。

1846-OB (第20図, 図版12)

K25MEに位置する。規模は桁行3間(4.75m)×梁行1間(4.02m)で、桁行の柱間は1.5~1.7mである。方位は桁行軸線でN-70°-Eを指し、1861-OBとほぼ同一方向である。柱穴は掘方の平面形が隅丸の長方形や楕円形を呈するものが混在する。規模は長軸長0.5~0.65m、深さ0.4~0.45mを測り、他のものと同様に削平されていることを考え合わせると大型のものと言える。また柱穴内埋土の観察により明らかに柱痕跡の

第3節 遺構と遺物

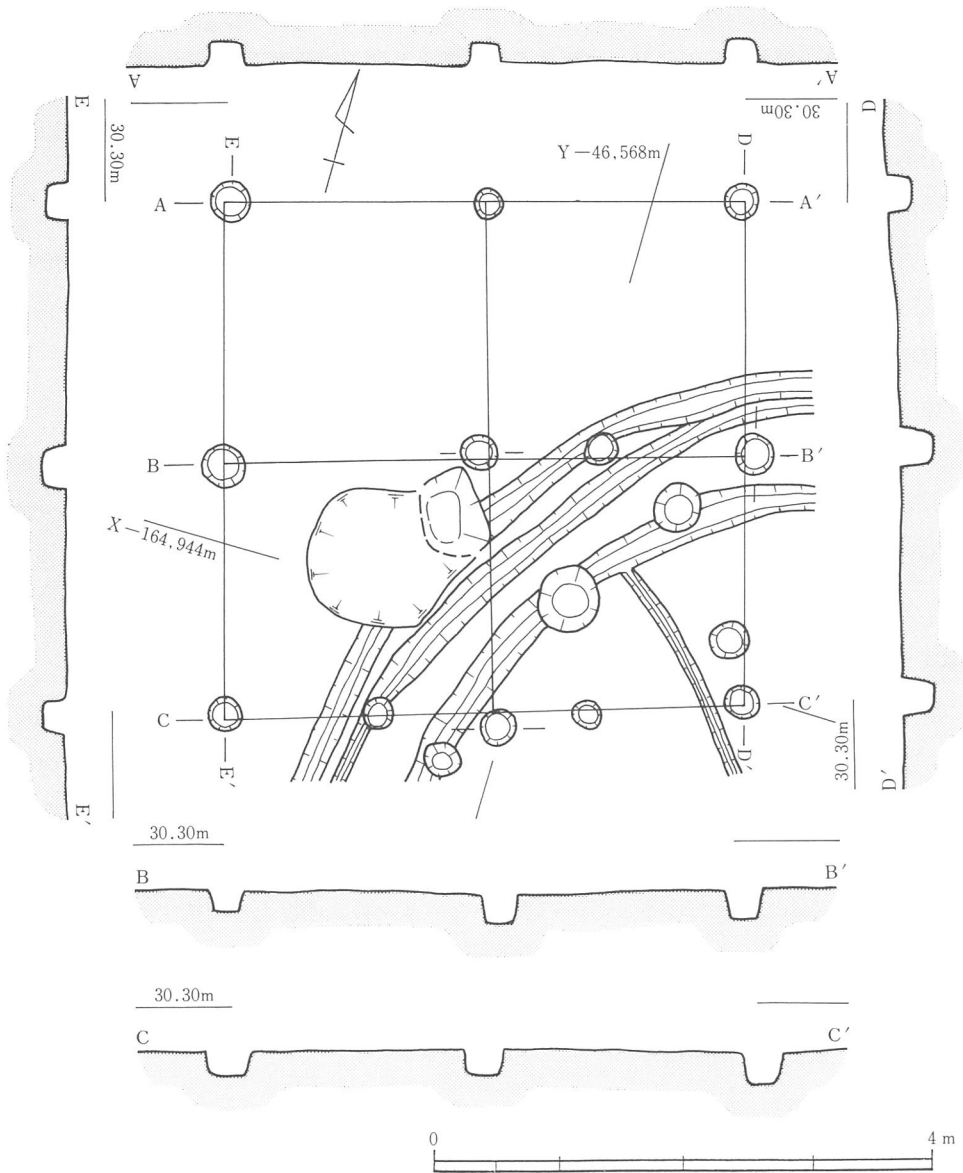


第21図 1826-O B平面・断面図 (1/60)

認められないものや、埋土に水平堆積の認められるものがあり、柱の抜き取りが行われた可能性も指摘できる。

重複関係を見てみると、北西隅の柱穴が古墳時代中期の土坑（1822-O O）と切り合い、平面的には古墳時代中期の溝（1812-O S）と切り合う。北西隅の柱穴と土坑の前後関係は後世の攪乱により明確にはできなかったが、柱の抜き取りの可能性が指摘できることより、ここでは当建物がこれらの遺構に先行すると考えたい。

遺物は柱穴内より、弥生時代の甕の体部片や土師器の細片が少数出土しているが、建物の時期を示すと考えられる遺物は出土しなかった。



第22図 1856-O B平面・断面図 (1/60)

1826-O B (第21図, 図版13)

丘陵縁辺部のK25 I Fに位置する, 2間×2間の建物である。規模は南北方向が3.8m, 東西方向が4.0mで, 平面形はほぼ正方形を呈する。柱穴間の距離は1.72~2.02mである。方向はN-64°-Eを指す。柱穴規模は直径0.4~0.45m, 深さ0.2~0.4mである。柱穴内埋土は黄褐色砂質土, 褐色粘質土等で柱痕跡が認められた。遺物は出土しなかった。

第3節 遺構と遺物

1856-O B (第22図, 図版13)

1846-O Bの東側のK25L Hに位置する、2間×2間の総柱構造の建物である。規模は東西方向が4.2m、南北方向が4.15mで、ほぼ正方形を呈する。柱穴間の距離は2.0~2.2mである。方位はN-72°-Eを指す。柱穴は直径0.25~0.35m、深さ0.15~0.3mで、後世の削平は著しい。柱穴内埋土は黄褐色粘質土、褐色粘質土等で柱痕跡の確認されたものもある。また、平面的に見ると弥生時代の住居(1820-O D)と重複するが、層位関係や建物の柱穴内出土遺物によって、建物が後出することは確認されている。前述の柱穴内出土遺物は、須恵器の細片が1点、弥生土器の細片1点がある。

1710-O B (付図1)

1856-O Bの東側のK25K Jに位置する。規模は桁行2間(4.1m)×梁行1間(2.95m)で、桁行の柱間は1.8~2.15mである。方位は桁行軸線でN-21°-Wを指す。柱穴は直径0.2~0.3m、深さ0.1m前後で、後世の削平が著しい。出土遺物は須恵器の甕の体部片2点、弥生土器の細片1点がある。

2100-O B (第23図, 図版14・15)

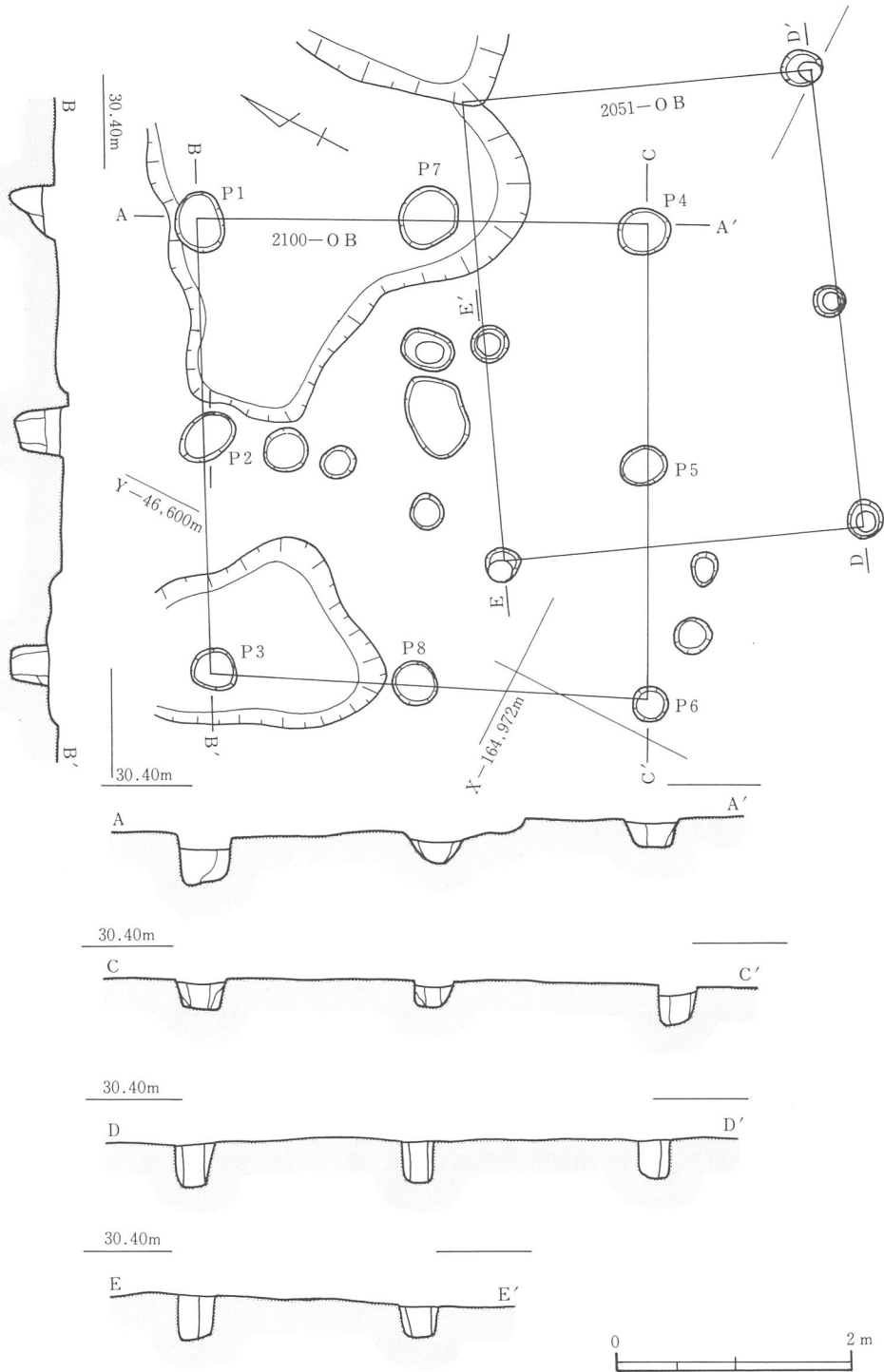
調査区南西部のK25S Aに位置する。規模は2間×2間で東西3.9m、南北3.8mを測り、ほぼ正方形を呈する。柱間は1.72~2.02mで、方位はN-64°-Eを指す。柱穴の平面形は円形あるいは楕円形を呈し、直径は0.32~0.55m、深さは0.25~0.45mを測る。柱穴の内P1・P3・P7は古墳時代中期の土坑(1800・1788-O O)の底面で検出でき、この建物がこれらのものに先行することが確認された。また柱穴内埋土の堆積状況から、柱の抜き取りが行われた可能性が指摘できるものもある。

遺物は土師器の細片、弥生土器の細片が少数出土した。

2051-O B (第23図, 図版14)

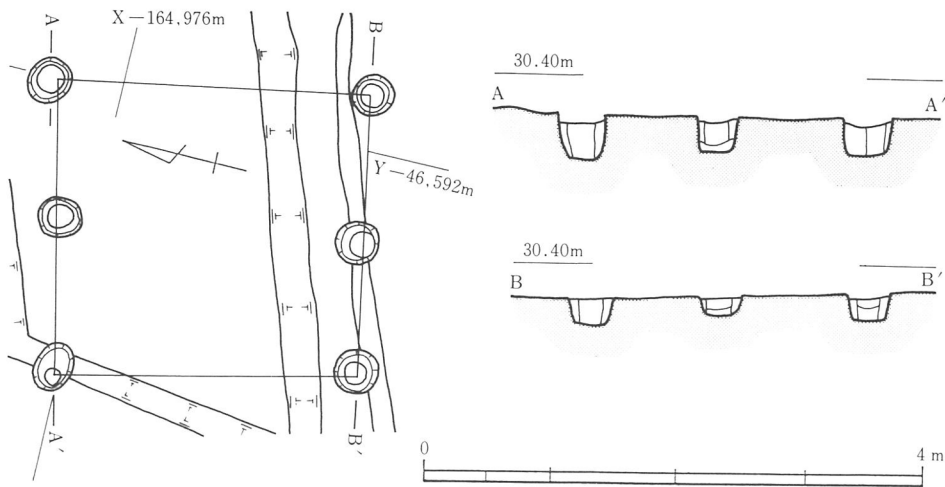
K25S Aに位置し、2100-O Bと重複する。規模は桁行2間(3.9m)×梁行1間(3.1m)で、桁行の柱間は1.92~1.95mである。方向は桁行軸線でN-57°-Eである。柱穴規模は直径0.28~0.35m、深さ0.25~0.4mを測る。柱穴内埋土は黄褐色系の砂質土、黄橙色粘質土等で柱痕跡が認められた。2100-O Bとの前後関係は当建物には柱痕跡が認められ、2100-O Bには柱の抜き取りの可能性が指摘できることより、当建物が後出するものと考えられる。

遺物は弥生土器の細片が数点出土したが、建物の時期を示すと考えられる遺物は出土しなかった。



第23図 2051・2100-O B平面・断面図 (1/60)

第3節 遺構と遺物



第24図 1883-OB平面・断面図 (1/60)

1883-OB (第24図, 図版16)

2100-OBの南東側, K25TBに位置する。規模は桁行2間(2.4m)×梁行1間(2.6m)で, 桁行の柱間は1.05~1.31mである。方向は桁行軸線でN-76°-Eである。柱穴規模は直径0.35~0.4m, 深さ0.15~0.4mで, 四隅の柱より中間の柱が浅い。柱穴内の埋土は黄褐色粘質土, 黄橙色粘質土等で柱痕跡が認められた。遺物は出土しなかった。

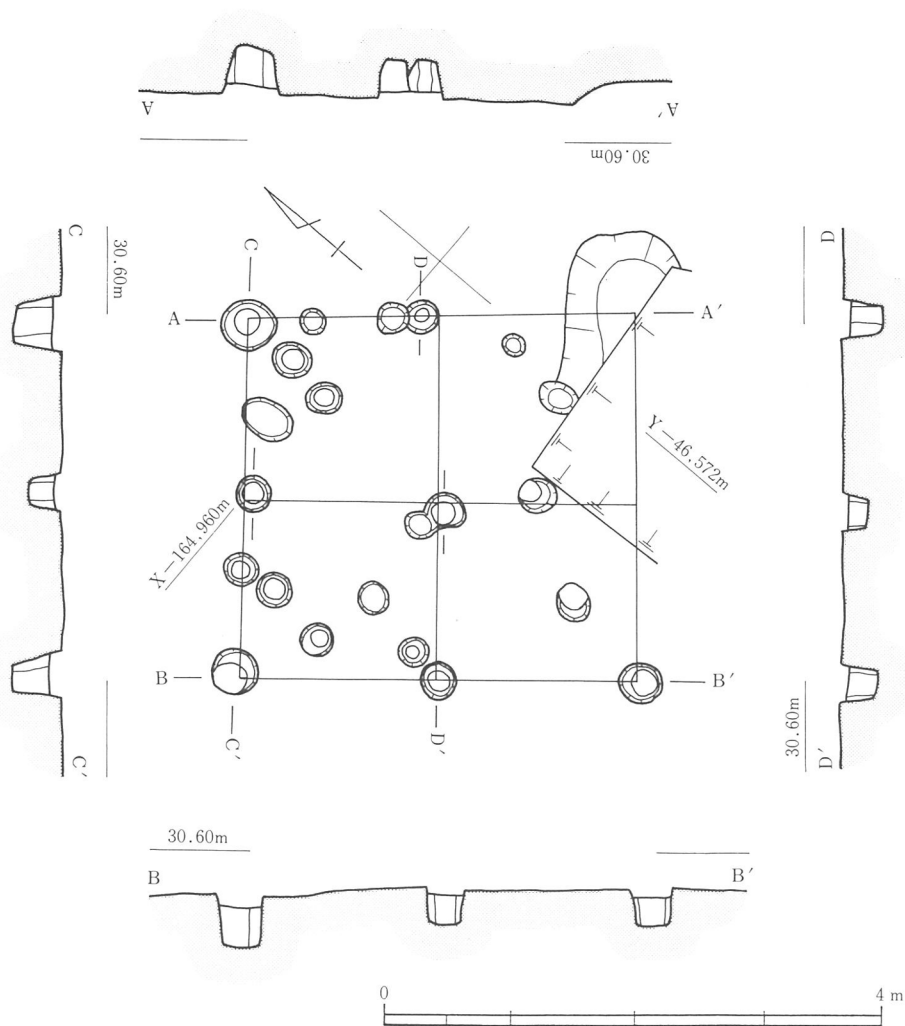
1943-OB (第25図, 図版17)

調査区のほぼ中央K25OGに位置する。北側は後世の開墾によって大きく削平されており建物は北側にさらに延びる可能性もあるが, ここでは2間×2間の総柱構造の建物として報告する。規模は南北2.9m, 東西3.35mで, 柱間は1.4~1.7mである。方位はN-52°-Eである。柱穴は直径0.3~0.45m, 深さ0.2~0.4mで, 四隅の柱より中間のものが小規模である。柱穴内埋土は明黄褐色粘質土, 褐色粘質土等で柱痕跡が認められる。また南東の一部は後世の攪乱によって検出されなかった。またこの建物の周辺には柱穴と考えられるピットが多数検出されており, 他にも建物が重複して存在した可能性が非常に高い。

柱穴内出土遺物としては, 須恵器の杯蓋, 杯身, 甕, 器台, 土師器の甕の体部片等がある。これらの遺物は, 周辺の土坑や溝などの遺構から出土したものとほぼ同時期に属するものである。

1557-OB (第26図)

調査区の西側, K25RJに位置する。規模は桁行2間(3.5m)×梁行1間(2.7m)で, 桁行の柱間は1.62~1.88mである。方位は桁行軸線でN-87°-Wである。柱穴の規模は



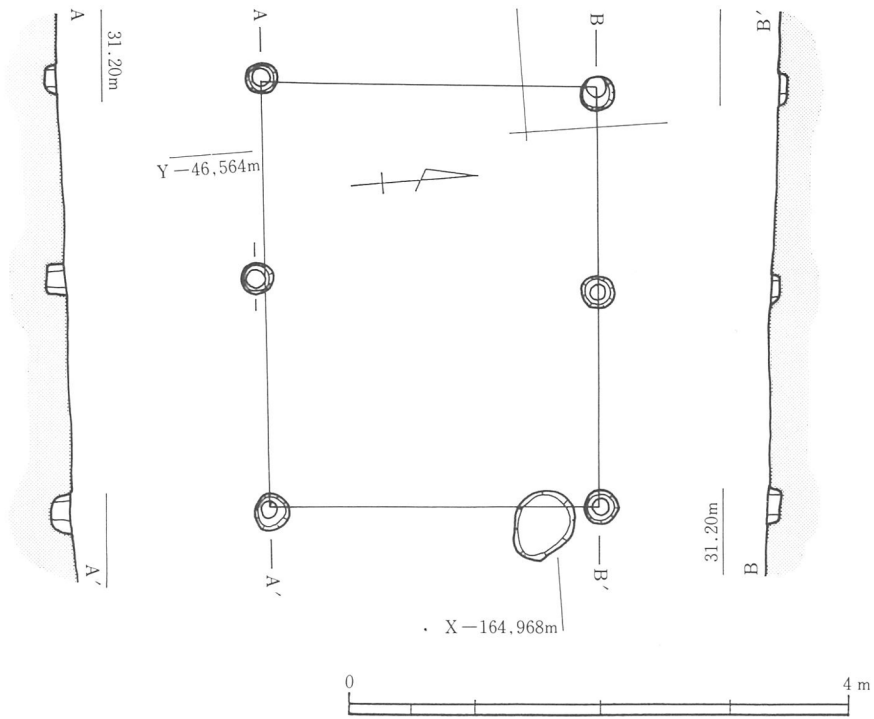
第25図 1943-O B平面・断面図 (1/60)

直径0.25~0.28m, 深さ0.08~0.17mである。柱穴内の埋土は黄褐色粘質土, 黄橙色粘質土等で柱痕跡が認められる。またこの建物は丘陵の上段に位置する他の建物(2100・1964-O B)と比較すると, 柱穴は非常に浅く, 削平が著しく時期的に他の古墳時代中期の建物群より大きく先行する可能性もある。遺物は出土しなかった。

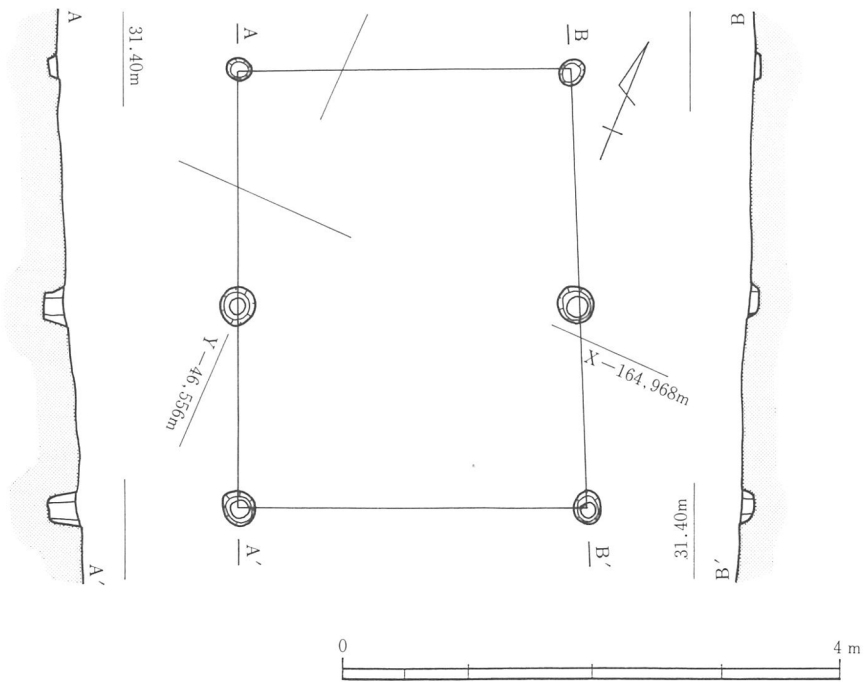
1558-O B (第27図, 図版18)

1557-O Bの南東, K25QLに位置する。規模は桁行2間(3.55m)×梁行1間(2.8m)で, 桁行の柱間は1.65~1.9mである。方位は桁行軸線でN-23°-Wである。柱穴の規模は直径0.2~0.3m, 深さ0.05~0.25mである。柱穴内埋土は黄褐色粘質土, 黄橙色粘

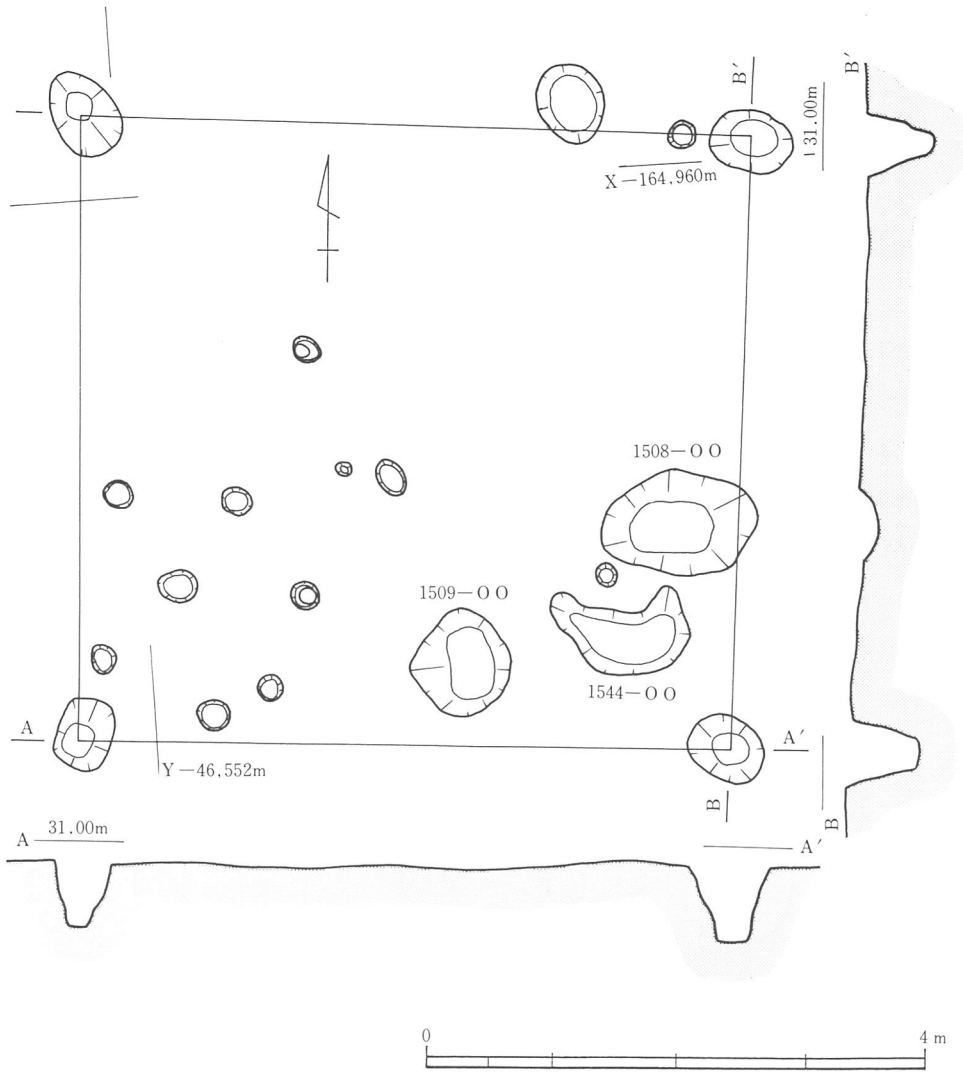
第3節 遺構と遺物



第26図 1557-O B平面・断面図 (1/60)



第27図 1558-O B平面・断面図 (1/60)



第28図 1510-OB平面・断面図 (1/60)

質土等で柱痕跡が認められるものもある。また、この建物も1557-OBと同様に他の建物群に大きく先行する可能性がある。遺物は出土しなかった。

1640-OB (付図1)

K25OKに位置する。規模は桁行2間(4.1m)×梁行1間(2.95m)で、桁行の柱間は1.8~2.15mで、方位は桁行軸線でN-5°-Wである。柱穴規模は直径0.2~0.35m、深さ0.2~0.35mで、後世の削平が著しい。柱穴内の埋土は黄褐色粘質土等である。また当建物も1557-OBと同様に他の建物に先行する可能性がある。遺物は出土しなかった。

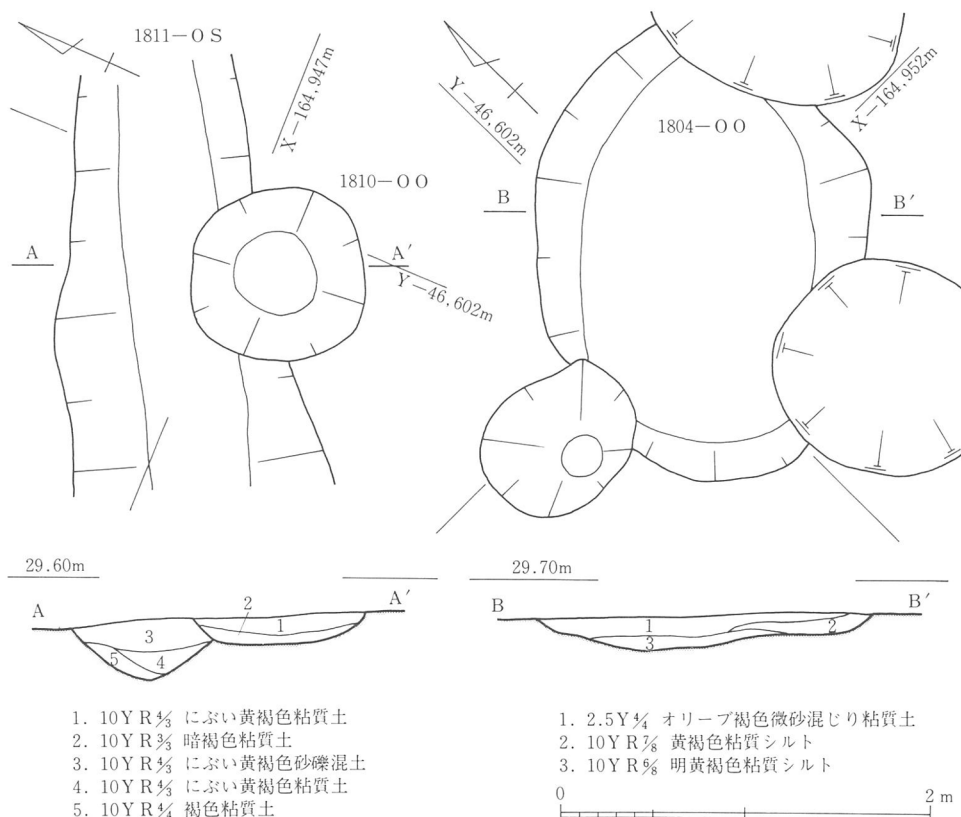
第3節 遺構と遺物

1510-O B (第28図, 図版18)

調査区南東側K25QLに位置する。規模は東西5.15m, 南北5.45mの1間×1間である。柱間が非常に長く側柱は削平されている可能性が高い。方位はN-85°-Wである。柱穴の平面形は円形あるいは楕円形を呈し, 規模は長径0.55~0.7m, 深さ0.5~0.6mで, 他のもものと比較して大型の掘方といえる。柱穴内の埋土は黄褐色粘質土, 褐色粘質土等で, 柱痕跡は確認されなかった。遺物は土師器の細片が1点出土した。

2. 土坑

古墳時代中期に属すると考えられる土坑は約60基検出した。分布の特徴としては建物群の周辺部に位置し建物との関連性が窺える。それぞれの土坑はいずれも特徴的で, 丘陵上段の1943-O Bの周辺の土坑のように大型で重複が著しいもの, 遺物の出土状況が焼土や炭化物と共に土器が投棄された状況を示すもの, 意識的に土器を納めたと考えられる状況



第29図 1804・1810-O O平面・断面図 (1/40)

を示すもの、土器の破片が数点出土するものなどがある。出土遺物の時期は陶邑編年のⅠ型式の２段階から３段階の時期と考えられる。

1810-〇〇（第29・30図の31・32）

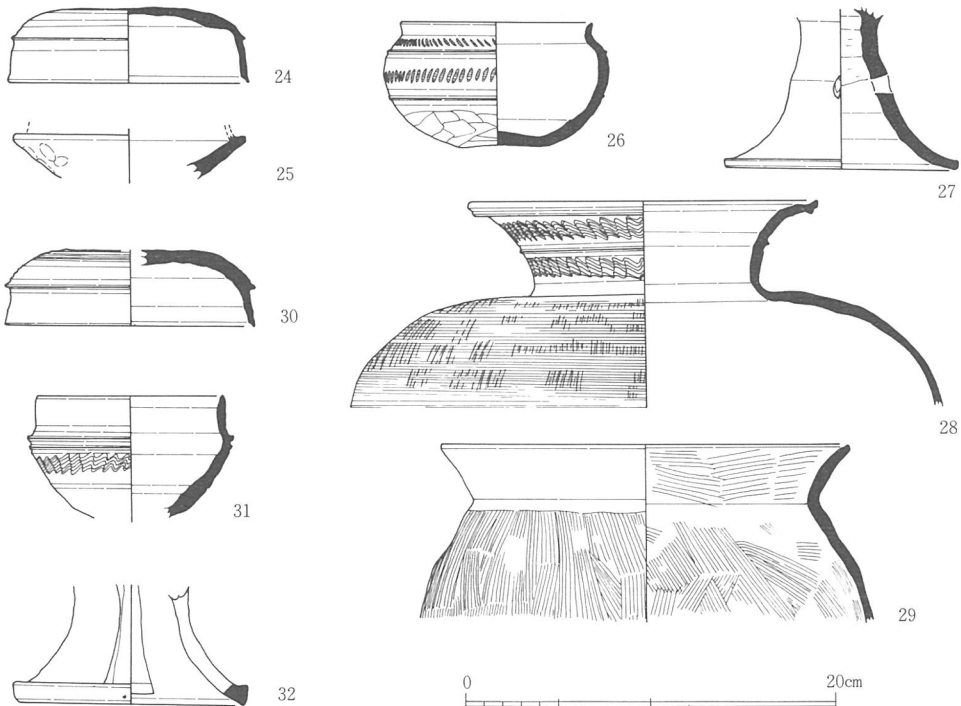
丘陵縁辺部のK24LYに位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径0.94m、深さ0.15mである。埋土は下層が暗褐色粘質土、上層が炭を含む黄褐色細砂混じり粘質土である。

出土遺物は須恵器の杯身、高杯（32）、甕、甕、把手付碗（31）、土師器の甕の体部片等がある。32は無蓋高杯の脚部と考えられ、脚端部は若干肥厚し面をもっておさめる。透かしは長方形のものを四方に配する。

1804-〇〇（第29・30図の24～29、図版80）

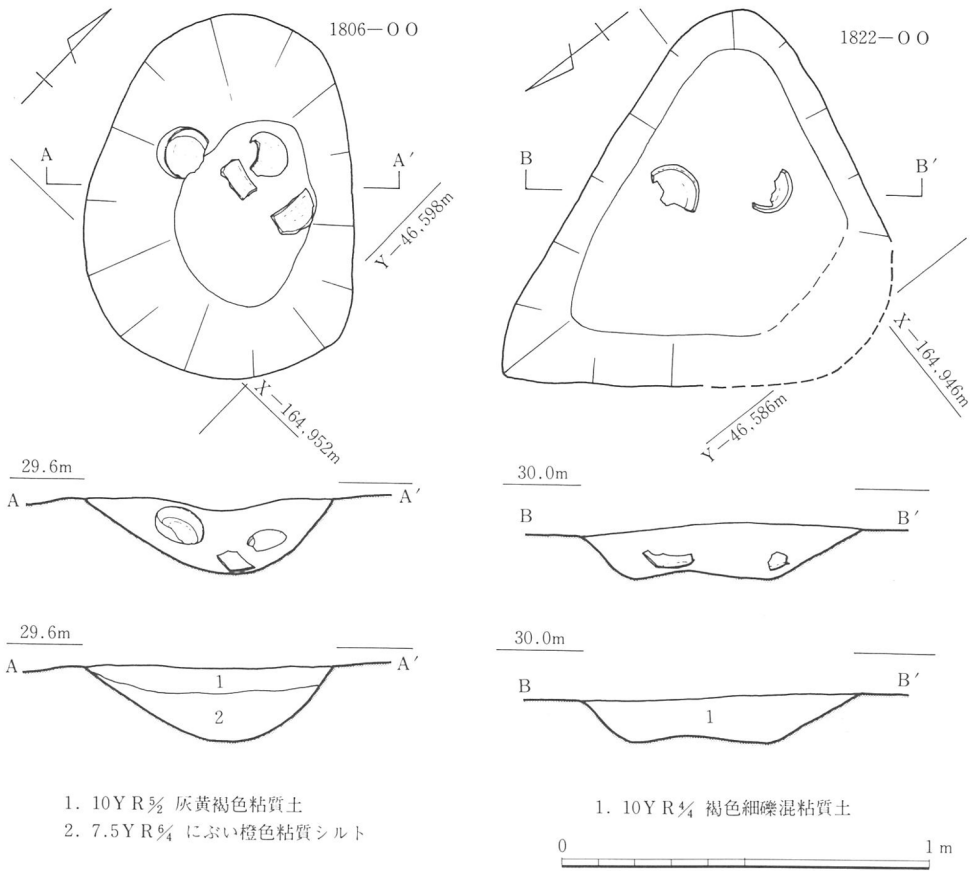
1861-〇Bの東側K24NYに位置する。平面形は楕円形を呈すると考えられ、規模は長径2.5m、短径1.82m、深さ1.8mである。断面形は非常に緩かなU字状を呈する。埋土は下層が黄色系の粘質シルト、上層が褐色系の粘質土である。

出土遺物は須恵器の杯蓋（24）、杯身（25）、高杯（27）、碗（26）、甕（28）、土師器の甕（29）等がある。25は杯身と考えられるが、ロクロによる調整は認められず、全体に器



第30図 1804・1807・1810-〇〇出土遺物（1/4）

第3節 遺構と遺物



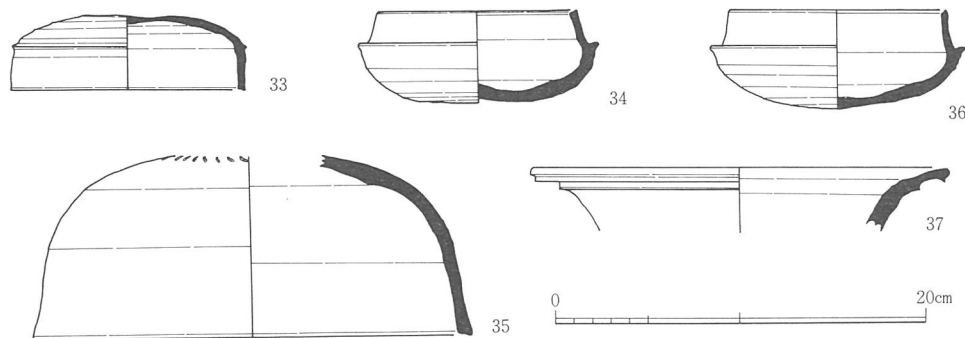
第31図 1806・1822-00遺物出土状況 (1/20)

厚は厚く、低部はナデ調整やオサエ調整によって仕上げる。たちあがりは欠損しているが、比較的短いものと考えられる。26の腕はやや外湾する短い口縁部をもち、体部は肩が張り、肩と中央には櫛状工具による列点文が巡る。低部は静止ヘラケズリ調整を施す。27の透かしはヘラ状工具によって刺突されたもので、四方向に認められる。胎土には他のものに比べ砂粒を多く含む。

1807-00 (第30図, 図版80の30)

1804-00の東側, K25MAに位置する。南側は後世の攪乱のため検出できなかったが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。規模は残存幅0.5m, 深さ0.1mを測り, 非常に浅い。埋土はにぶい黄橙色粘質土である。

出土遺物は杯蓋1点 (30) がある。



第32図 1806・1822-〇〇出土遺物 (1/4)

1806-〇〇 (第31・32図の33~35, 図版20・80)

1861-〇〇の東側K25MAに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.98m, 短径0.73m, 深さ0.2mである。断面形は緩やかなU字状を呈する。埋土は二層に大別でき下層がにぶい橙色粘質シルト, 上層が灰黄褐色粘質土である。

遺物は須恵器のほぼ完形の杯蓋 (33), 杯身 (34), 大型の蓋 (35) の口縁部が出土した。杯身は底面より浮いた状態で出土したが, 杯蓋, 大型の蓋の口縁部は土坑の壁面および底面の直上で出土した。

34は焼き歪みが著しく受け部には杯蓋の口縁部が付着していた。35は口径23.8cm, 残存高9.8cmを測り, 天井部には櫛状工具による列点文が巡る。色調は灰褐色を呈し, 胎土には白色の砂粒を多く含む。

1818-〇〇 (付図1)

2192-〇Bの東側K25KEに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.0m, 深さ0.15mである。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。

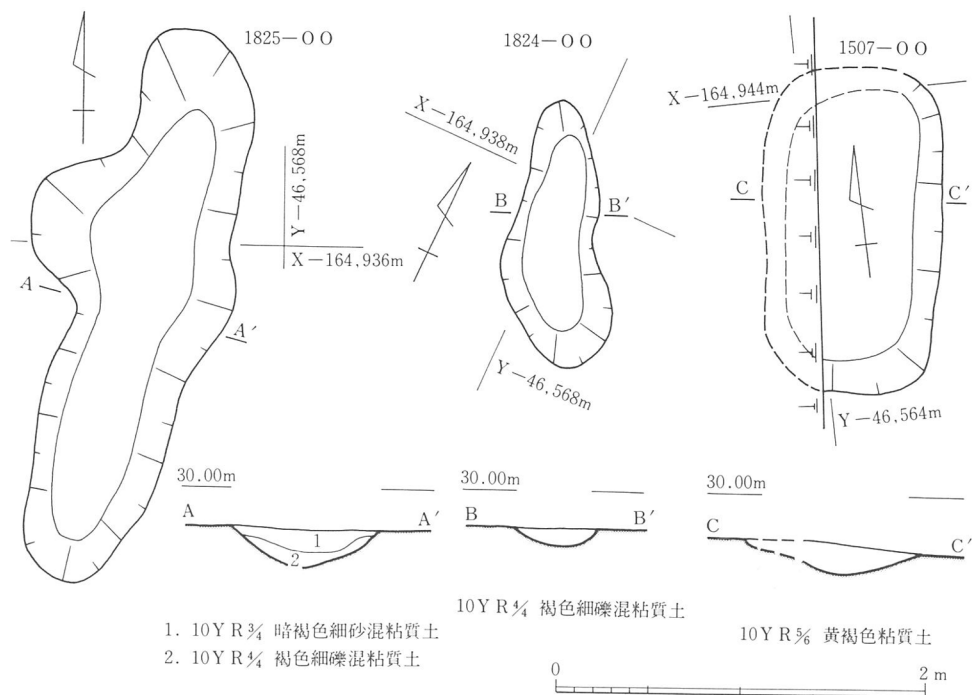
遺物は出土しなかった。

1822-〇〇 (第31・32図の36・37, 図版80)

K25LEに位置し, 1846-〇Bの北西隅柱穴と重複する。平面形は三角形を呈し、規模は一辺1.16m, 深さ0.11mである。埋土は褐色細礫混じり粘質土である。

遺物は図面で復元するとほぼ完形になる須恵器の杯身 (36) と甕の口縁部 (37) が出土した。36は, 体部上面から回転ヘラケズリを施すものである。37は復元口径22.7cmを測り, 口縁部直下に二条の断面三角形の削り出し凸帯が巡る。断面の色調はいわゆるセピア色を呈する。

第3節 遺構と遺物



第33図 1507・1824・1825-〇〇平面・断面図 (1/40)

1839-〇〇 (付図1)

丘陵縁辺のK25KEに位置し、1812-〇Sに切られる。平面形は不整形な隅丸方形を呈し、規模は一辺0.9m、深さ0.24mである。埋土は下層が褐色砂礫混じり土、上層が褐色砂礫混じり粘質土である。出土遺物は土師器の甕の体部片がある。

1832-〇〇 (付図1)

1826-〇Bの北西側K25KGに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.1m、深さ0.08mである。埋土はにぶい黄橙色粘質土で、遺物は出土しなかった。

1831-〇〇 (付図1)

1846-〇Bの東側K25KFに位置する。平面形は不定形、規模は全長1.47m、深さ0.18mである。埋土は黄褐色系の粘質土である。

遺物は土師器の細片が少数出土した。

1825-〇〇 (第33図)

1856-〇Bの北側K25JHに位置する。平面形は不整形な長楕円形を呈し、規模は全長3.08m、幅0.7~1.1m、深さ0.21mである。埋土は褐色系の粘質土である。遺物は土師器の甕の細片が少数出土した。

1824-〇〇 (第33図)

1856-〇Bの北側K25JHに位置する。平面形は長楕円形を呈し、規模は全長1.45m、幅0.52m、深さ0.1mである。埋土は褐色混じり粘質土で、遺物は出土しなかった。

1522-〇〇 (付図1)

1710-〇Bの西側K25KJに位置する。平面形は楕円形を呈すると考えられ、規模は、推定長径0.95m、深さ0.1mである。埋土は黄褐色系の粘質土である。

遺物は須恵器の筒形器台の細片が1点出土した。

1507-〇〇 (第33・34図の39~41)

1710-〇Bの南西側K25LJに位置する。平面形は長方形を呈すると考えられ、長軸長1.75m、深さ0.17mである。埋土は黄褐色粘質土である。

遺物は須恵器の杯蓋(39)、杯身(40)、甕(41)等が出土した。杯身(40)のたちあがりはやや内傾し、受部は内湾する。体部上半部にはカキ目調整を施す。杯蓋(39)も天井部のほぼ全体にカキ目調整を施す。

1795-〇〇 (付図1)

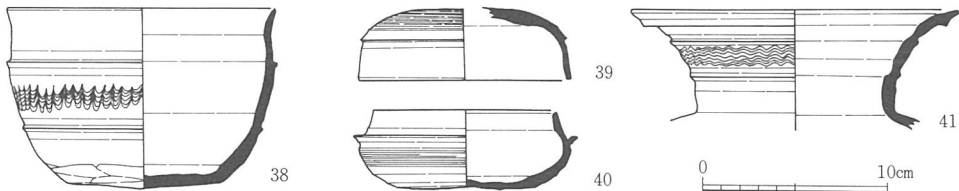
2100-〇Bの西側K24TYに位置する。西側は調査区外に延びるため全容は検出されなかったが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。規模は幅2.65m、深さ0.35mで、埋土は褐色粘質シルトである。

遺物は出土しなかった。

1802-〇〇 (第34図の38)

調査区の南西端K24TXに位置する。西側は調査区外に延びるため全容は把握できなかったが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。規模は検出全長2.8m、深さ0.19mで、埋土は明黄褐色粘質土である。

遺物は須恵器の椀が1点(38)出土した。38は大型品で口縁部は直立し、体部中央には波状文を施す。低部は静止ヘラケズリ調整によりていねいに仕上げる。



第34図 1507・1802-〇〇出土遺物 (1/4)

第3節 遺構と遺物

1834-〇〇（付図1）

2100-〇Bの西側K24SYに位置する。平面形は円形を呈し、南側一部は1791-〇〇に、西側の一部は1795-〇〇に切られる。規模は直径0.95m、深さ0.13mで、埋土はにぶい黄橙色砂質土である。

遺物は出土しなかった。

1791-〇〇（付図1）

2100-〇Bの西側K24TYに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.31m、深さ0.16mである。埋土は黄褐色系の粘質土である。

遺物は出土しなかった。

1790-〇〇（付図1）

2100-〇Bの西側K24TYに位置し、北側一部は、1791-〇〇に切られる。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.1m、深さ0.08mである。埋土は明黄褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

1792-〇〇（付図1）

調査区の南西端K24TYに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.94m、深さ0.28mである。埋土は明黄褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

1788-〇〇（付図1）

2051-〇Bの北西側K24RYに位置する。平面形は不定形で、規模は全長2.24m、幅1.28m、深さ0.09mである。埋土は明黄褐色粘質土である。

遺物は土師器の細片が出土している。

1797-〇〇（第35図，図版19）

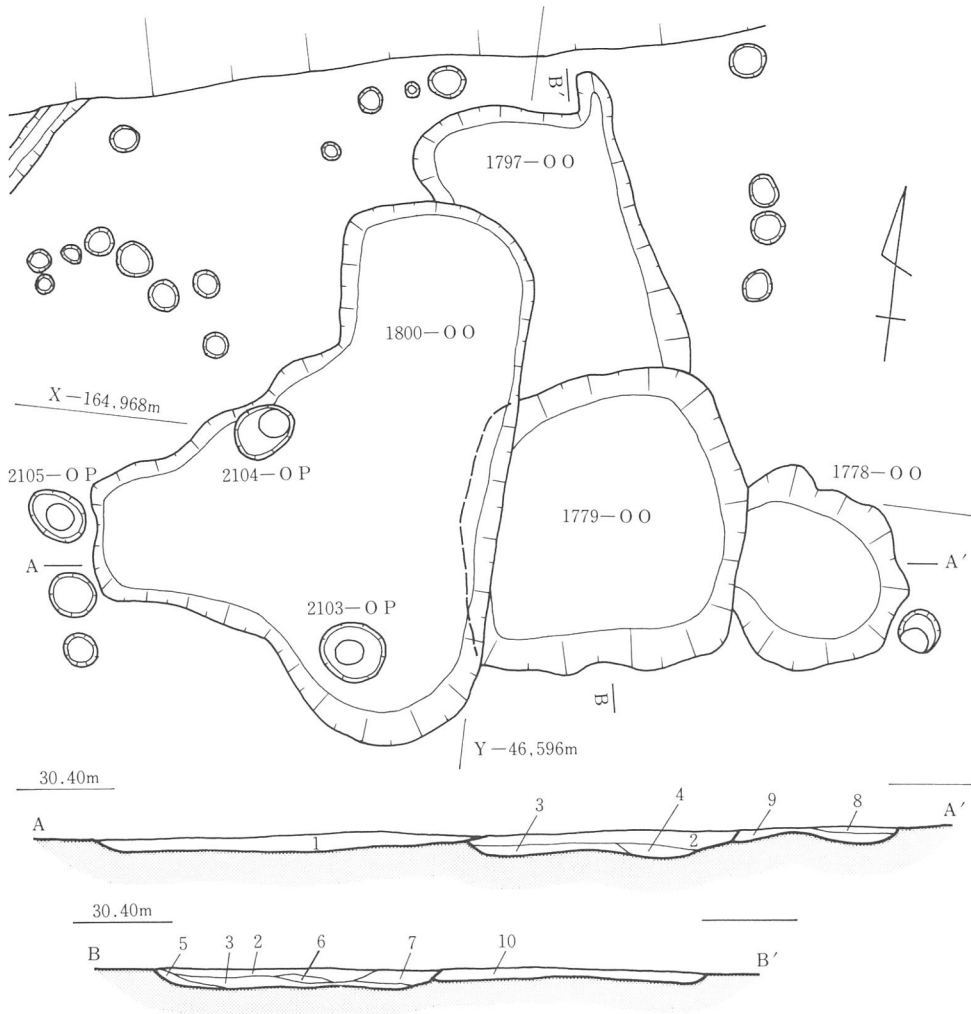
2051-〇Bの北東側K25QBに位置する。平面形は1779・1800-〇〇に切られているため不明である。規模は検出全長2.35m、深さ0.07mである。埋土は黄橙色粘質土である。

遺物には須恵器の杯身、甕、甗、器台等があるが、いずれも細片で図示できなかった。

1800-〇〇（第35・36図の44，図版19）

K25RAに位置する。平面形は不定形である。規模は検出全長4.35m、深さ0.15mで、埋土は黄橙色粘質土である。

遺物は須恵器の杯蓋、甕、有蓋高杯、把手付椀（44）、甗、器台の他、土師器の甕等が出土した。



- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 10Y R ₈ 明黄褐色粘土 | 6. 10Y R ₅ 黄褐色粘質土(炭混) |
| 2. 10Y R ₄ にぶい黄褐色粘質土 | 7. 10Y R ₅ にぶい黄褐色粘土 |
| 3. 10Y R ₅ 黄褐色粘質土 | 8. 10Y R ₄ にぶい黄褐色砂混粘質土 |
| 4. 10Y R ₅ 黄褐色粘質土 | 9. 10Y R ₅ 黄褐色砂混粘質土 |
| 5. 10Y R ₈ 明黄褐色粘質土 | 10. 10Y R ₈ 明黄褐色粘質土 |



第35図 1778・1779・1797・1800-OO平面・断面図 (1/60)

第3節 遺構と遺物

1778-〇〇（第35・36図の45～47，図版19・81）

2051-〇Bの東側K25RBに位置する。平面形は不整形な円形を呈し，西側一部は1779-〇〇に切られる。規模は直径1.65m，深さ0.14mで，埋土は黄褐色粘質土である。

遺物は須恵器の杯蓋，無蓋高杯（45），甕の他，平底鉢（46），軟質土器の平底鉢（47）等が出土した。46の口縁部は短く外反し，端部は面をもつ。外・内面の調整はナデ調整を施すが，外面は平行タタキ調整後にナデ調整で仕上げている可能性もある。色調は灰白色を呈し，胎土には白色の砂粒を多く含む。47の口縁部は短く外反し，端部は丸くおさめる。外面には平行タタキ調整が認められる。

1779-〇〇（第35・36図の42・43，図版19・81）

2051-〇Bの東側K25RBに位置し，1778・1800-〇〇に切られる。平面形は方形を呈し，規模は一辺1.2～2.45m，深さ0.15mである。埋土には黄褐色系の粘質土によるレンズ状堆積が認められた。

出土遺物は杯蓋，杯身，高杯，把手付椀（42），甌，器台，甕（43）の他，土師器の甕の細片等がある。43は小型品で，口縁部は短く外反し，端部はナデ調整により上方につまみあげる。体部外面には板状工具による調整が認められる。

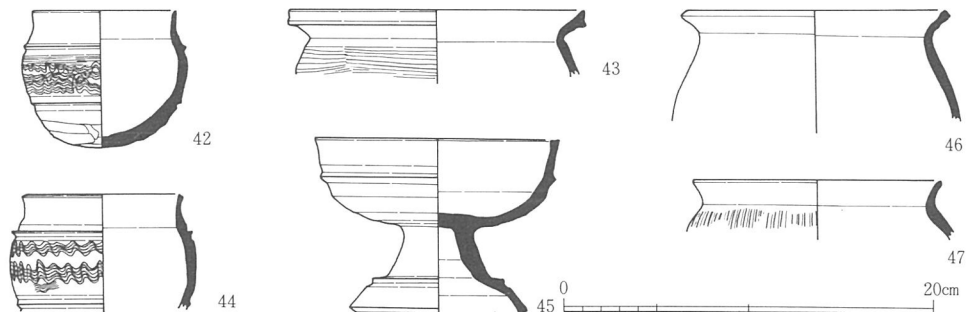
1756-〇〇（付図1，図版19）

2051-〇Bの東側K25RBに位置する。平面形は楕円形を呈し，規模は長径1.55m，深さ0.15mである。埋土は黄褐色系の粘質土である。

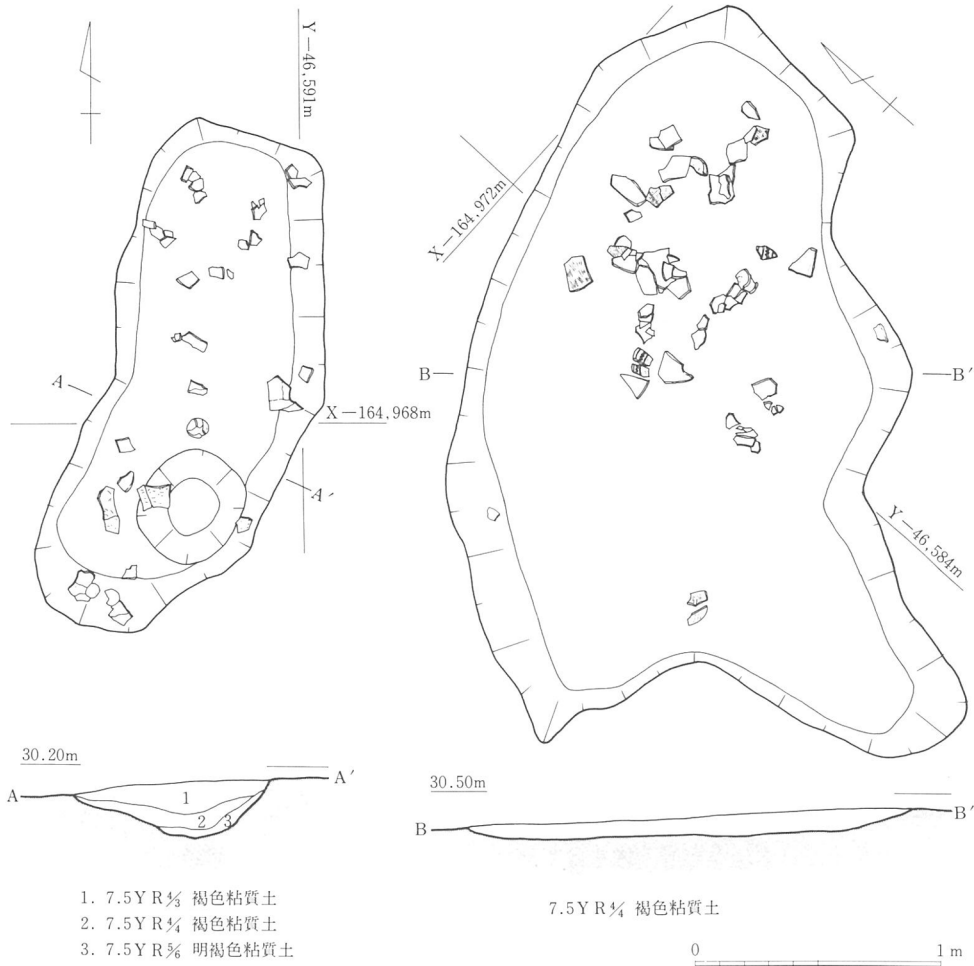
遺物は須恵器の筒型器台，甌の破片が少数出土した。

1764-〇〇（第37・38図，図版19・81）

2051-〇Bの東側K25RCに位置する。平面形は不整形な長楕円形を呈し，規模は全長



第36図 1778・1779・1800-〇〇出土遺物（1/4）



第37図 1764・1767-OO遺物出土状況・断面図 (1/30)

2.11m、幅0.9m、深さ0.22mである。南側の一部はピット状に一段深い。埋土は下層が褐色粘質土、上層が明褐色粘質土で、上層には焼土や炭が含まれていた。

遺物は須恵器の杯蓋(48)、杯身(49)、高杯(50)、甕(51)、軟質土器の平底鉢(52)、土師器の甕の細片等がある。48は天井部に櫛状工具による羽状文が巡り、その下部には沈線が巡る。49のちがりは短く内傾する。51は長胴甕である。口縁部を欠損するが、体部外面にはタタキ調整の後、細かいハケ調整を施す。内面には無文のあて具の痕跡が認められる。胎土には白色の砂粒を多く含む。52は短く外反する口縁を持ち、端部には強い横ナデ調整を施す。体部は摩耗のため不明であるが、底部にはヘラケズリ調整が認められる。胎土には白色の砂粒を多く含む。

第3節 遺構と遺物

1765-〇〇 (付図1, 図版19)

2051-〇Bの東側K25QDに位置する。東側は1764-〇〇に切られているが、平面形はほぼ円形を呈すると考えられる。規模は直径0.9m、深さ0.2mで、埋土は明褐色粘質土である。遺物は須恵器の高杯が1点出土している。

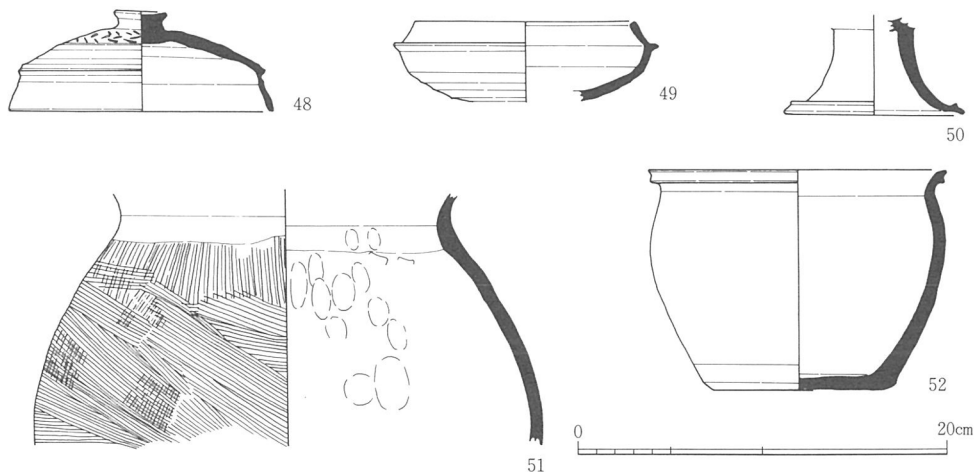
1767-〇〇 (第37・39図, 図版21・82・83)

1883-〇Bの東側K25SEに位置する、不定形な土坑である。規模は長軸長3.12m、短軸長1.82m、深さ0.09mである。底面は凹凸が著しい。埋土は褐色粘質土である。

出土遺物は須恵器の杯蓋、杯身(53~55)、高杯(56~59)、把手付碗(60)、甌(63)、甕、器台、大型の蓋(62)、須恵質の筒状土製品(61)の他、土師器の甕、高杯等がある。杯身は、たちあがりの短いもの(54)、内傾するもの(55)がある。53の内面には朱の付着した痕跡が認められる。57にはヘラ記号が認められる。58は長方形透かしを四方向に配し、透かしの側面には狭い範囲で面取りが施される。62は大型品で天井部には静止ヘラケズリを施す。63は把手部を欠損しているが、甌と考えられる。口縁部は緩やかに外反し、体部にはヘラ描き沈線が巡る。61の筒状土製品は最大径13.0cmを測り、内外面にはナデ調整を施す。用途は不明である。

1773-〇〇 (第40図)

K25REに位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径0.63m、深さ0.15mである。断面形は緩やかなU字状を呈し、埋土は下層ににぶい褐色粘質土が厚く堆積し、上層には明黄褐色の焼土が薄く堆積していた。壁の焼けた痕跡は明確には認められなかった。

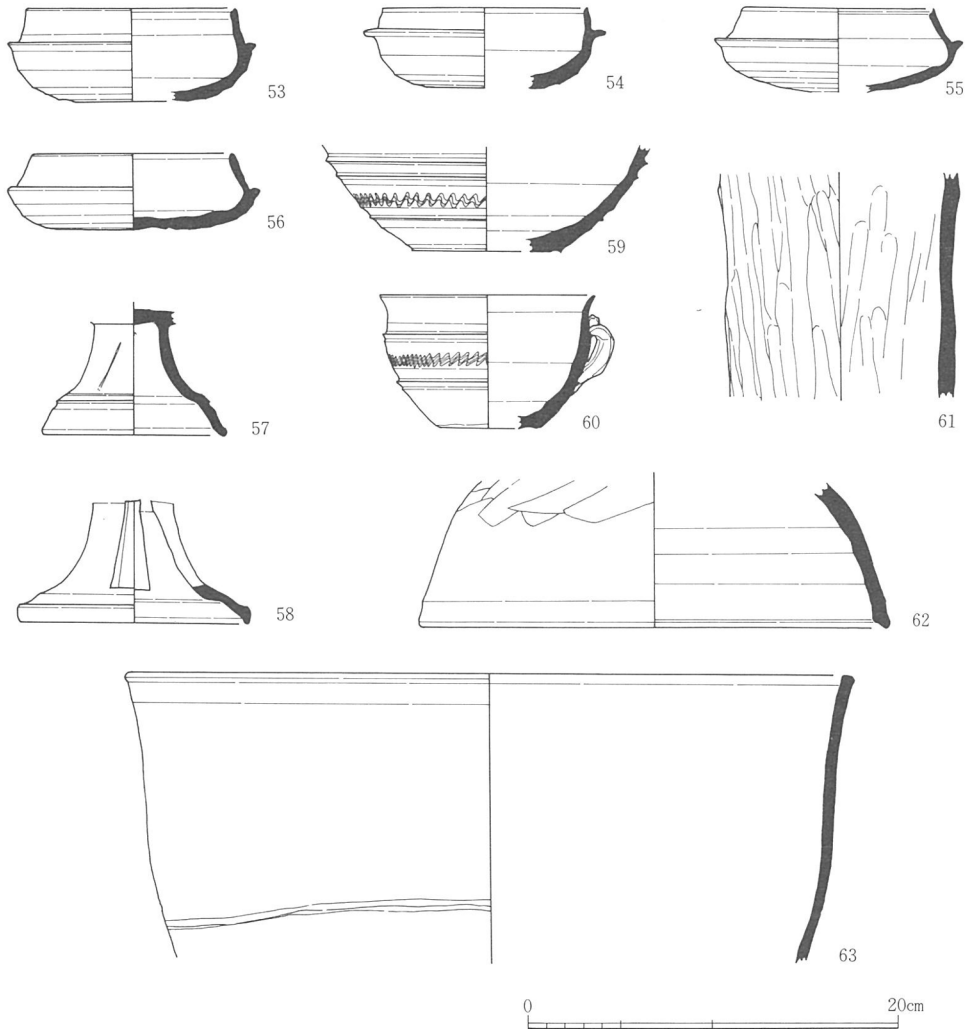


第38図 1764-〇〇出土遺物 (1/4)

遺物は下層より須恵器の杯蓋の破片が1点出土している。

1759-〇〇（第40・41図の64～68，図版83）

K25RDに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸長2.45m，短軸長1.58m，深さ0.1mで，埋土は明黄褐色砂礫混じり粘質土である。遺物は須恵器の有蓋高杯（65），把手付碗（64），甕（66），甗のほか土師器の甗（67），壺（68）等がある。64の把手付碗は焼歪みが著しい。65の脚部の透かしの配置は三方である。67は須恵器の甗の形態をなすが焼成はあまく，土師質を呈する。



第39図 1767-〇〇出土遺物（1/4）

第3節 遺構と遺物

1762-〇〇 (第40図)

1759-〇〇の北西側K25RDに位置し、南側の一部は1761-〇〇に切られる。平面形はほぼ円形を呈すると考えられ、規模は直径0.75m、深さ0.2mである。埋土は黄褐色系の粘質土である。遺物は土師器の細片が出土している。

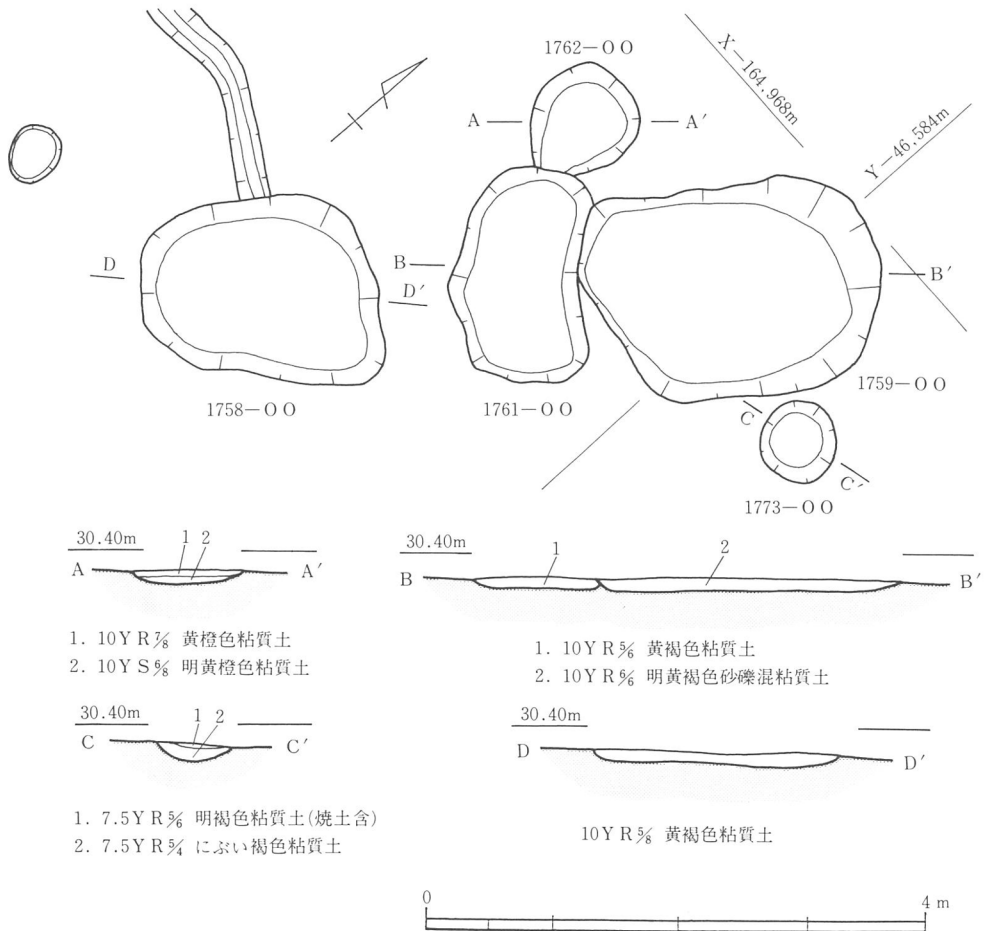
1761-〇〇 (第40図)

K25RDに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長1.74m、短軸長0.98m、深さ0.1mである。埋土は黄褐色粘質土である。

遺物は須恵器の甕、土師器の細片が少数出土した。

1758-〇〇 (第40・41図の69)

1761-〇〇の南西側K25RDに位置する不定形な土坑である。規模は長軸長1.91m、短



第40図 1758・1759・1761・1762・1773-〇〇平面・断面図 (1/60)

軸長1.51m, 深さ0.12mで, 埋土は黄褐色粘質土である。

出土遺物には須恵器の杯蓋, 甕, 器台 (69) 等がある。

1771-〇〇 (付図1)

1766-〇〇を中心とした土坑群の西側K25Q Dに位置する。東側は1772-〇〇, 西側は1770-〇〇に切られる。平面形は楕円形を呈すると考えられる。規模は長径0.92m, 短径0.58m, 深さ0.04mで, 埋土は明黄褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

1772-〇〇 (付図1)

K25Q Dに位置する。平面形は楕円形を呈し, 規模は長径1.05m, 短径0.5m, 深さ0.2mである。埋土は黄褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

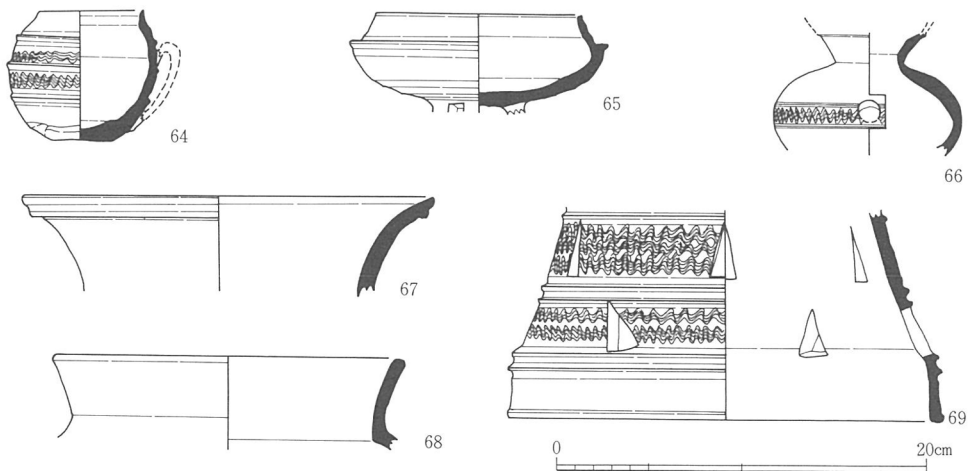
1770-〇〇 (付図1)

K25Q Dに位置する。平面形は円形を呈し, 規模は直径0.45m, 深さ0.14mである。断面形は緩やかなU字状を呈し, 埋土は黄褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

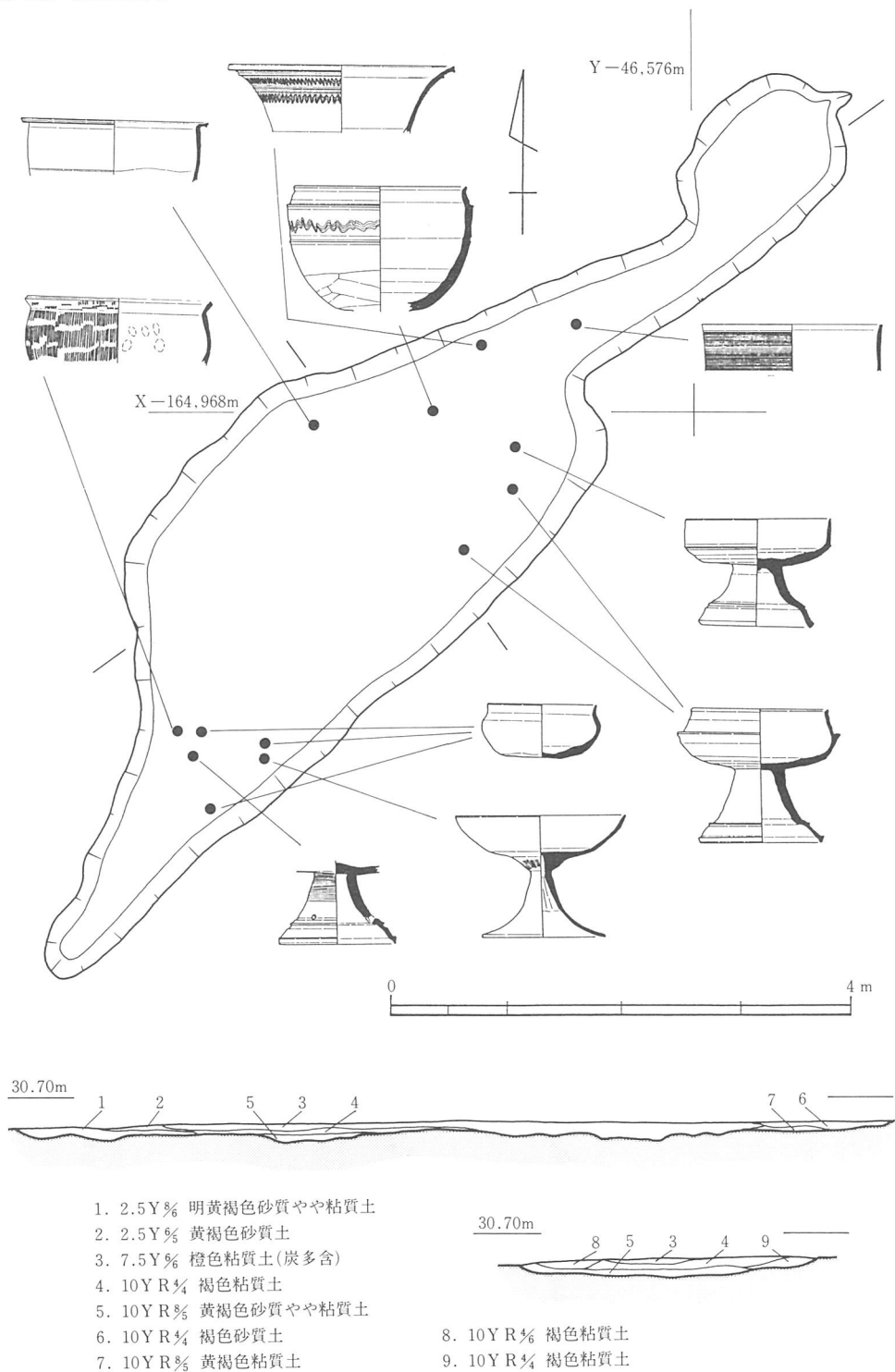
1777-〇〇 (第42・43・44図, 図版22・83・84)

1750-〇 Sの北西側K25R F付近に位置する大型の不定形土坑である。規模は全長10.45m, 最大幅2.68m, 深さ0.15mである。平面的に見ると東側は隅丸方形に広がり, 西側は溝状に狭くなり, 複数の土坑が重複している可能性もある。埋土は南西部に黄褐色



第41図 1758・1759-〇〇出土遺物 (1/4)

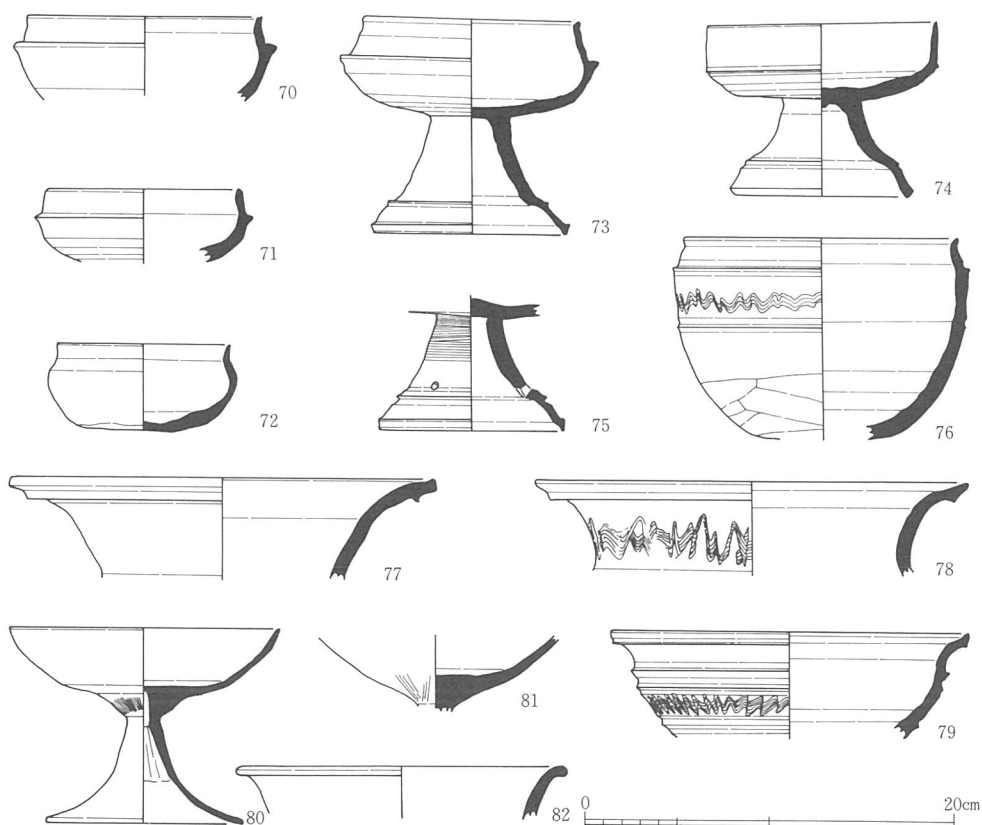
第3節 遺構と遺物



第42図 1777-〇〇平面・断面図 (1/60)

粘質土、北東部に褐色砂質土の堆積が認められ、中央部には下層に黄褐色系の粘質土、上層には炭を多く含む橙色粘質土の堆積が認められる。

出土遺物には須恵器の杯蓋、杯身(70・71)、高杯(73・74)、甗(72・76)、甗(77・78・86)、甗(84・85)、鍋(83)器台(79)の他、土師器の高杯(80・81)、甗(82)等がある。70・71のちあがりはいずれも比較的短く、端部は70が水平な面を持ち、71は丸くおさめる。高杯は杯身を杯部にもちいるもの(73)、杯蓋を杯部にもちいるもの(74)がある。73・74いずれの脚部にも透かしは認められない。75は円形の透かしを三方に配す。76は大型の甗で、体部に施文された波状文は粗雑である。底部は静止ヘラケズリ調整を施す。72は小型の甗で口縁部は短くやや外反し端部は丸くおさめる。体部全体は内外面とも回転ナデ調整を施し、底部は不定方向のナデ調整を施す。甗は口縁部を短く外に折り曲げるもの(84)と、直口のもの(85)がある。鍋(83)は口縁部をくの字状に外反させ体部には平行タキ調整を施す。



第43図 1777-〇〇出土遺物1 (1/4)

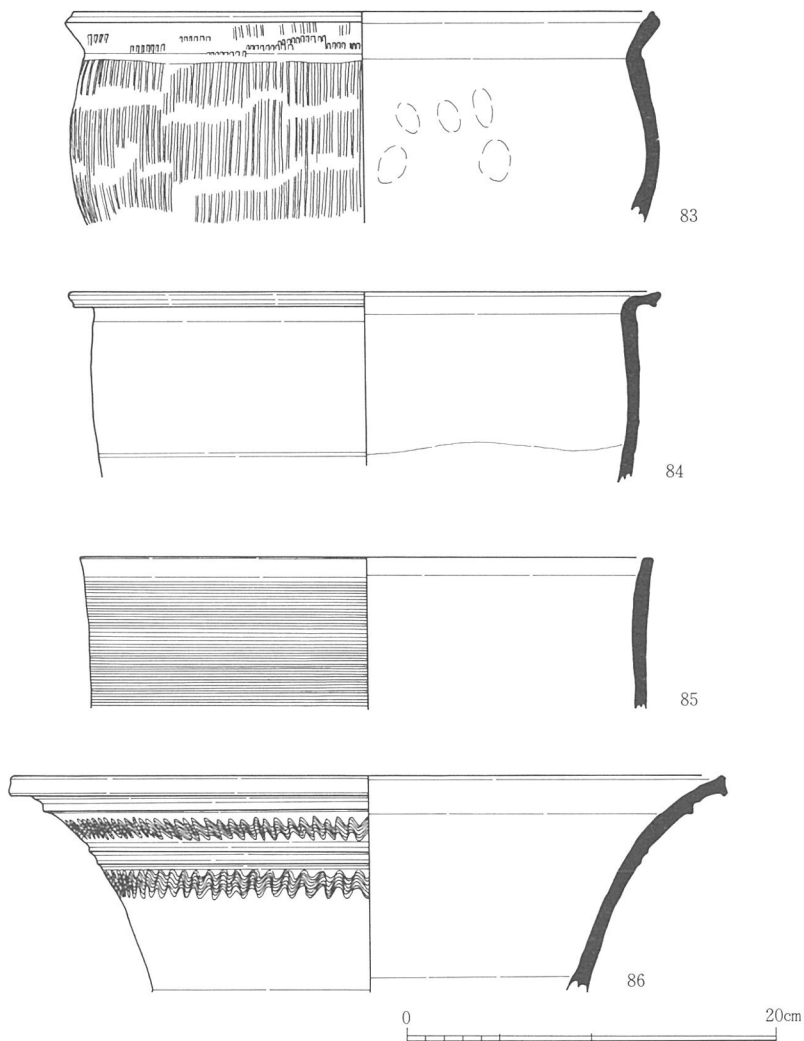
第3節 遺構と遺物

土師器の高杯(80・81)はいずれも椀状の杯をもち脚部は柱部から裾部にかけて大きく広がるものである。調整は杯部の一部にハケ調整が認められる。

1785-〇〇(第46図, 図版19)

1766-〇〇周辺の土坑群の北側K25PFに位置する。北側は後世の削平, 南側は1766・1787-〇〇に切られているため平面形は不明である。規模は検出幅2.25m, 深さ0.15mで, 埋土は黄褐色粘質土である。

出土遺物には須恵器の杯蓋1点, 甕の体部片1点等がある。



第44図 1777-〇〇出土遺物2 (1/4)

1787-〇〇（第45・46図，図版19）

1766-〇〇周辺の土坑群の東K25PFに位置する。南側は溝状に突出し，平面形は不定形である。規模は東西幅2.04m，深さ0.18mである。埋土は二層に大別でき，いずれも黄褐色系の粘質土である。

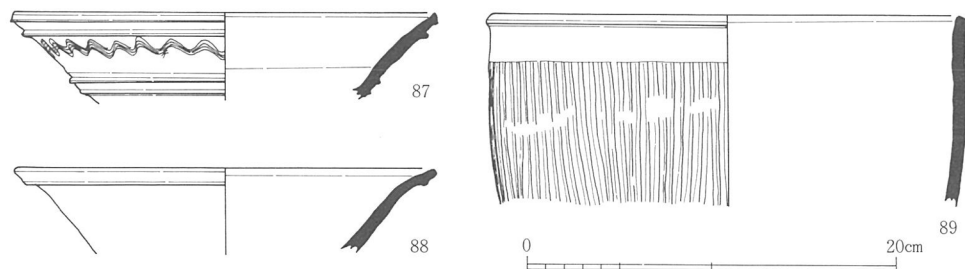
出土遺物には須恵器の杯蓋，杯身，甕（88），甗（89），器台（87），土師器の甕5点等がある。88は口縁端部を比較的丸くおさめ，文様は施さない。89は口縁部を短く外反させないタイプである。

1766-〇〇（第46～50図，図版19・23・24・85～87）

1943-〇Bの西側K25PEに位置する，大型の土坑である。平面形は北側では隅丸長方形を呈するが，南側は不定形である。規模は北側部分の長軸長3.45m，短軸長1.63m，南側部分の長軸長3.35m，短軸長2.35mで，全体の南北幅は3.45mである。壁は北側部が直立気味にたちあがり，南側は緩やかにたちあがる。埋土は褐色系の粘質土や黄褐色系の粘土等が，ほぼ水平に堆積している。また下層13層の上面には，約1cm厚で炭化物の堆積が認められ，全体的に見ても焼土や炭の包含量は他の土坑と比較しても非常に多いと言える。また平面形が複雑で，壁のたちあがりの状況が北側部と南側部で異なり，複数の土坑が重複している可能性もあるが，土層の観察では重複を認められなかった。

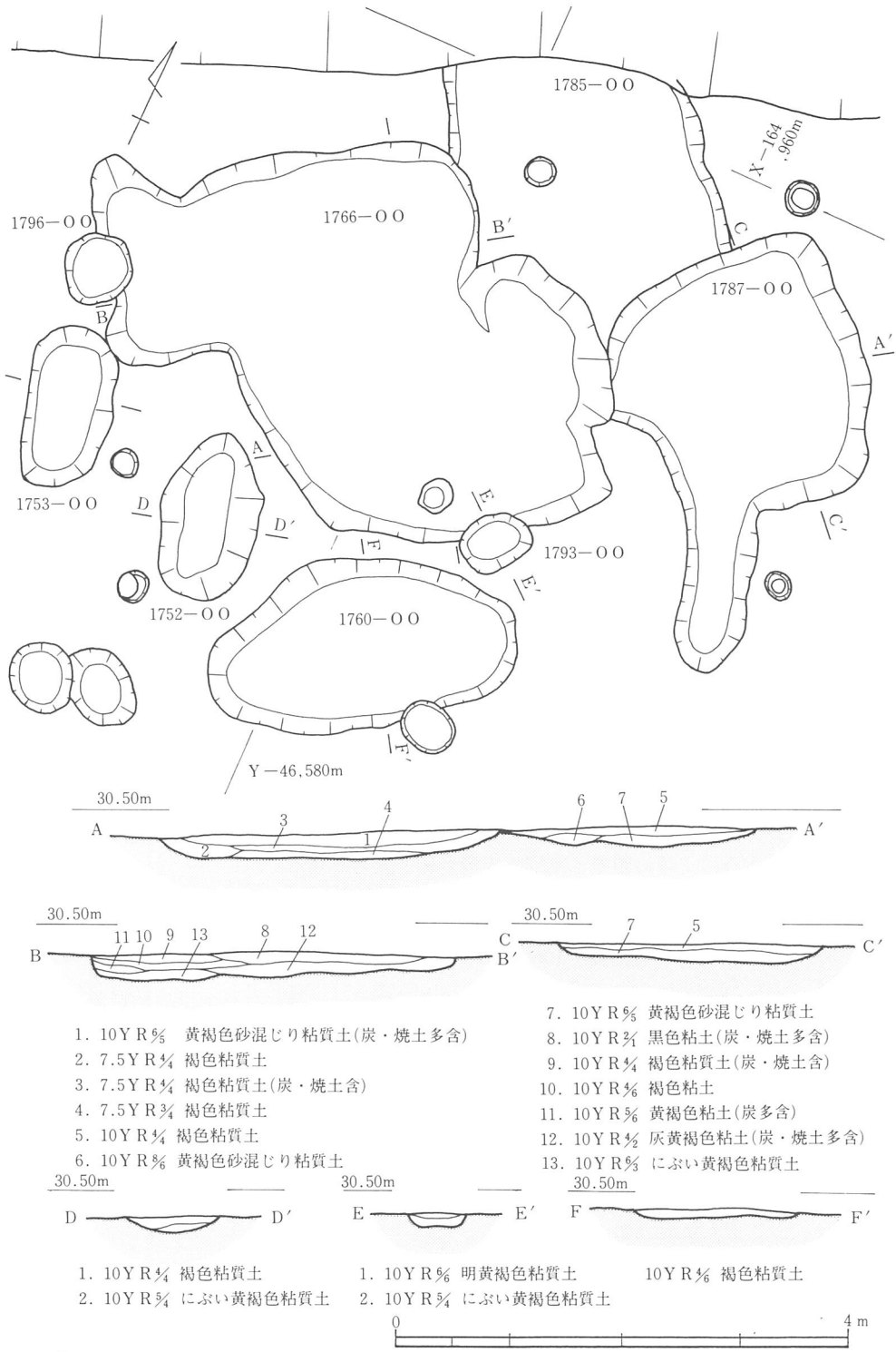
遺物は比較的多く出土した。出土状況は底面から上層にかけて出土し，土坑の中央に比較的集中する傾向にあり，投棄された状況を示すと考えられる。また接合関係を見ても112の鉢のように土坑の西端と東端での接合例も認められる。

主な出土遺物は図示した須恵器の杯蓋（90・91），高杯（92～95），把手付碗（96～98），甕（100～102），甕（105），壺（106），器台（107），蓋（103・104），鉢（112）の他，土師器の高杯（116），甕（108～111），瓦質焼成の長胴甕（117），軟質土器の長胴甕（114）等があり，他の遺構出土土器群と比べると杯類が少なく，煮沸形態の器種や焼成不良の製



第45図 1787-〇〇出土遺物（1/4）

第3節 遺構と遺物



1. 10Y R 5/6 黄褐色砂混じり粘質土(炭・焼土多含)
2. 7.5Y R 3/4 褐色粘質土
3. 7.5Y R 3/4 褐色粘質土(炭・焼土含)
4. 7.5Y R 3/4 褐色粘質土
5. 10Y R 3/4 褐色粘質土
6. 10Y R 5/6 黄褐色砂混じり粘質土

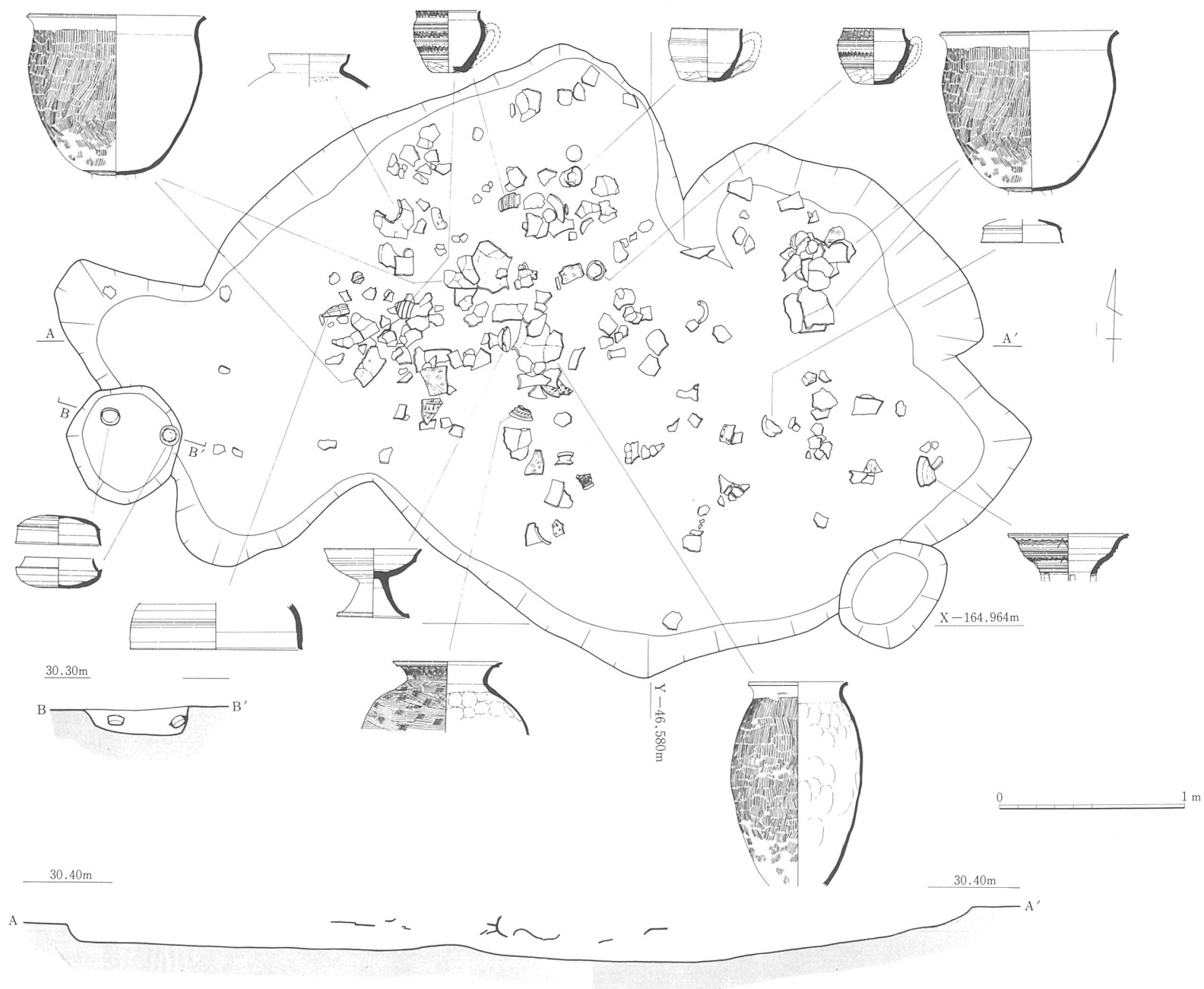
7. 10Y R 5/6 黄褐色砂混じり粘質土
8. 10Y R 2/3 黒色粘土(炭・焼土多含)
9. 10Y R 3/4 褐色粘質土(炭・焼土含)
10. 10Y R 3/4 褐色粘土
11. 10Y R 5/6 黄褐色粘土(炭多含)
12. 10Y R 5/6 灰黄褐色粘土(炭・焼土多含)
13. 10Y R 5/6 におい黄褐色粘質土

1. 10Y R 3/4 褐色粘質土
2. 10Y R 3/4 におい黄褐色粘質土

1. 10Y R 5/6 明黄褐色粘質土
2. 10Y R 3/4 におい黄褐色粘質土

10Y R 3/4 褐色粘質土

第46図 1752・1753・1760・1766・1785・1787・1793・1796-OO平面・断面図 (1/60)

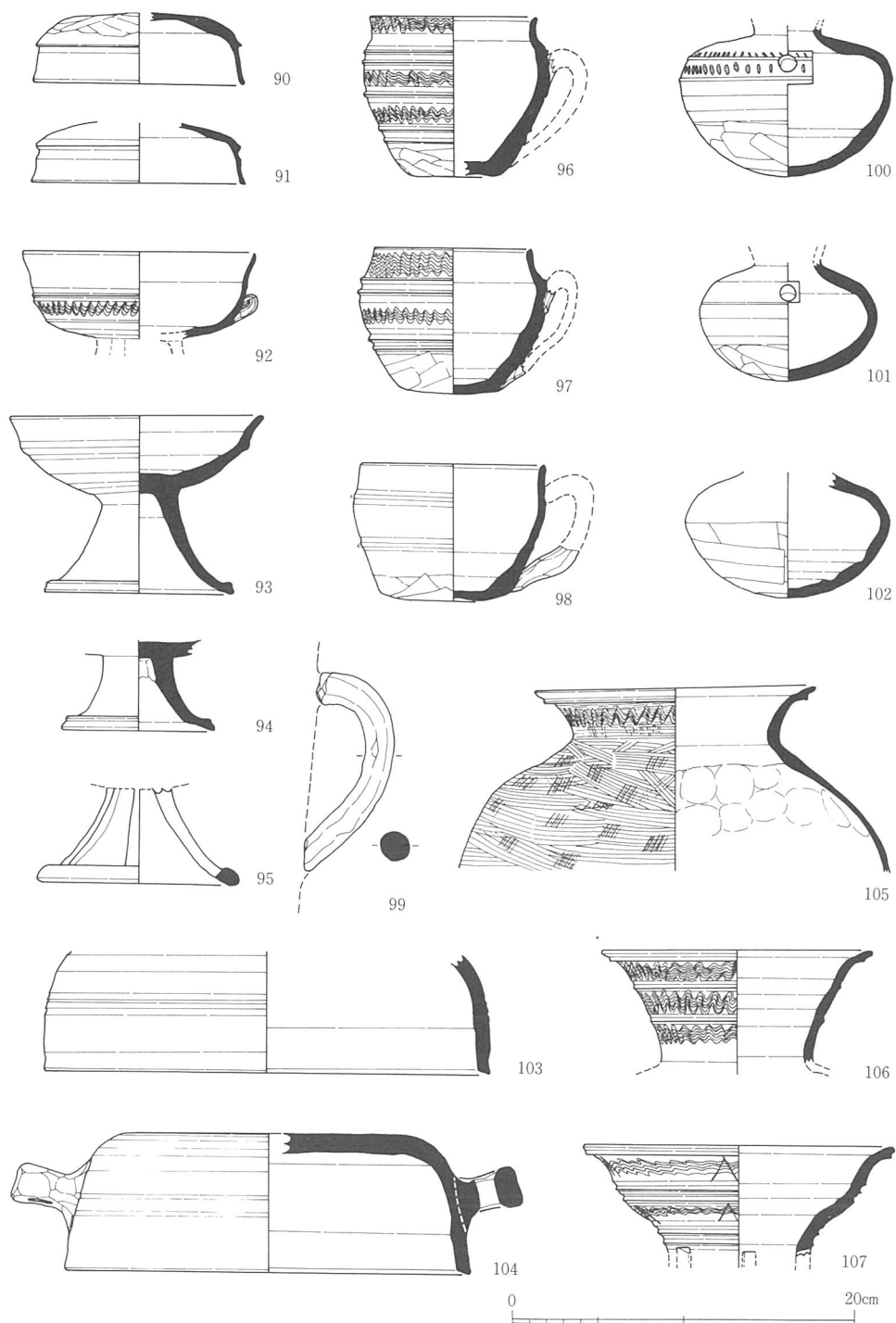


第47図 1766・1796-O O遺物出土状況図 (1/30)

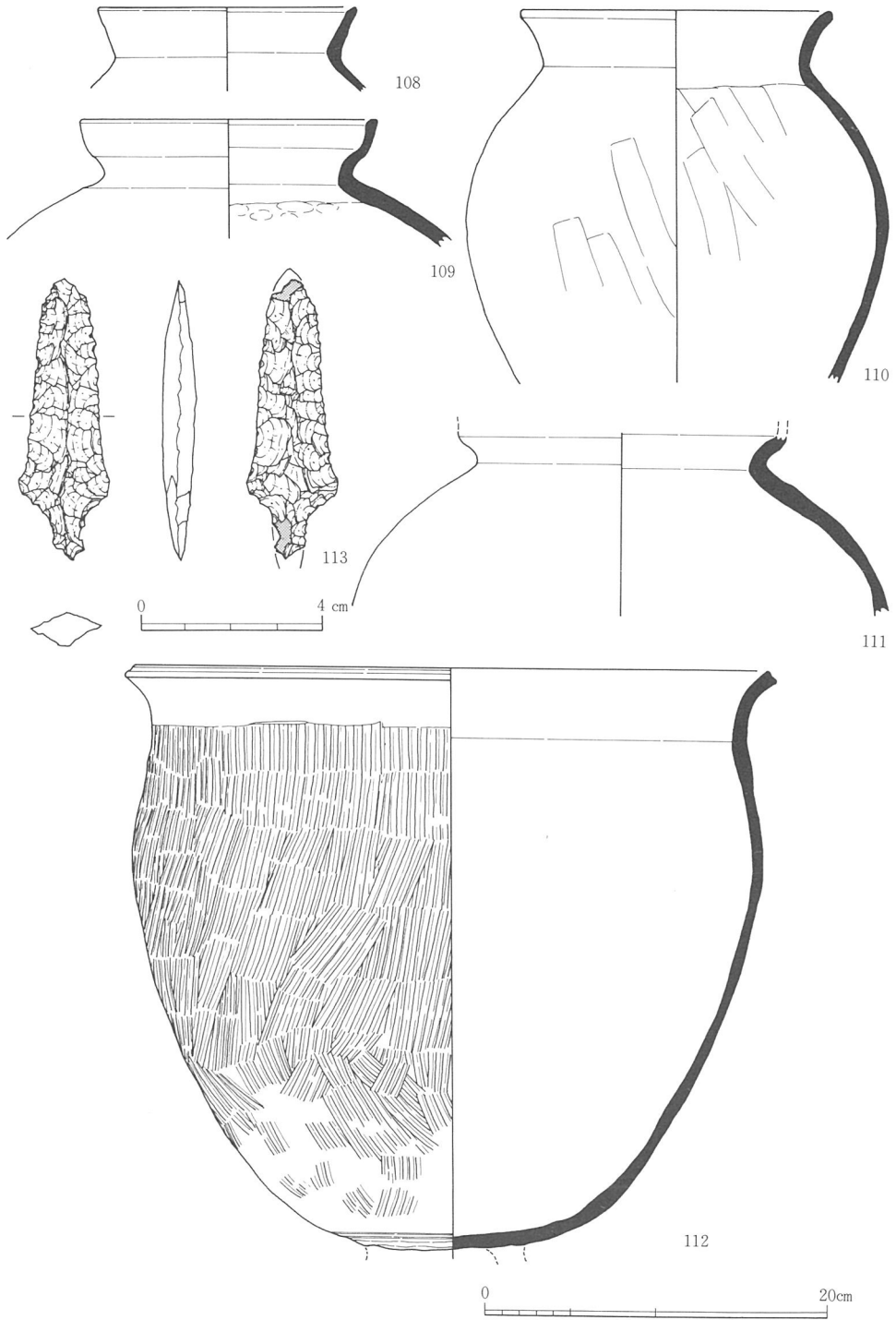
品が認められる。杯蓋は2点出土したが、91は焼成不良の製品である。90は天井部を静止ヘラケズリ調整で仕上げる。92は鉢状の杯部を持つものであるが、比較的小型である。93はほぼ完形品で、杯部の口縁部は短く外反し体部は丸みをおびる。脚部には透かしは認められない。94・95は高杯の脚部で95は四方に長方形透かしを配する。把手付碗は他の土坑（1767-00）のもの比べると、いずれも大型で文様帯を区画する凸線の稜は鋭く、把手も大型である。また口縁部にまで文様を施し、底部は静止ヘラケズリ調整で仕上げるなど非常にいい作りである。98は焼成不良のため、図示できなかったが、96・97と同様に櫛状工具による波状文は施されていると考えられる。甗はいずれも比較的肩が張り、底部を静止ヘラケズリで仕上げる。100は体部に櫛状工具による列点文が施される。105は口縁端部を丸くおさめ、体部は平行タタキ調整後不定方向のカキ目調整で仕上げる。内面には無文のあて具の痕跡が認められる。103は大型の蓋で天井部は回転ヘラケズリ調整で仕上げる。104は把手付の短頸壺の蓋である。天井部の調整は粗く、体部は回転ヘラケズリ調整、回転ナデ調整で仕上げる。把手には円孔が認められ、下面を上面に比べていいに仕上げる。107は器台の杯部でヘラ状工具による逆V字形の文様が二段に施される。文様の配置は五方向と推定される。筒部の透かしの配置は、現存部分で五方向である。112は口径38.0cm、器高33.9cmを測る大型の深鉢である。口縁部は緩やかに短く外反し、端部はナデ調整により凹線状に窪む。最大胴径は体部上半部にある。体部外面はタタキ調整で仕上げ、内面はナデ調整で仕上げる。底部には二～三条の沈線が巡り、脚部を接合した痕跡が認められる。全体の色調は褐色を呈し、還元焼成が充分行われていない。胎土には白色の砂粒を多く含む。117は瓦質の長胴甕である。口縁部は短く外反し、端部はナデ調整により凹線状に窪む。体部外面は平行タタキ調整を施し、器壁を薄く仕上げる。内面には無文のあて具の痕跡が認められる。胎土には白色の砂粒を多く含む。118は平底鉢である。114は軟質の長胴甕である。口縁端部は丸くおさめ体部の外面には平行タタキ調整が認められる。内面は不明である。119の甗は焼成不良の製品である。底部は静止ヘラケズリで仕上げ、体部にはタタキ調整が認められる。土師器の甕は、口縁部を外反させ端部を丸くおさめるもの（108・110）と二重口縁をもつもの（109・111）がある。110の内面にはヘラケズリ調整が認められる。116の高杯の脚柱部の外面はヘラミガキ調整でいいに仕上げる。115は土師器の壺の底体部である。

113は弥生時代の有茎石鏝である。先端部と茎部の一部を欠損するがほぼ完形品で、両面にいいな並列剝離調整が施される。

第3節 遺構と遺物

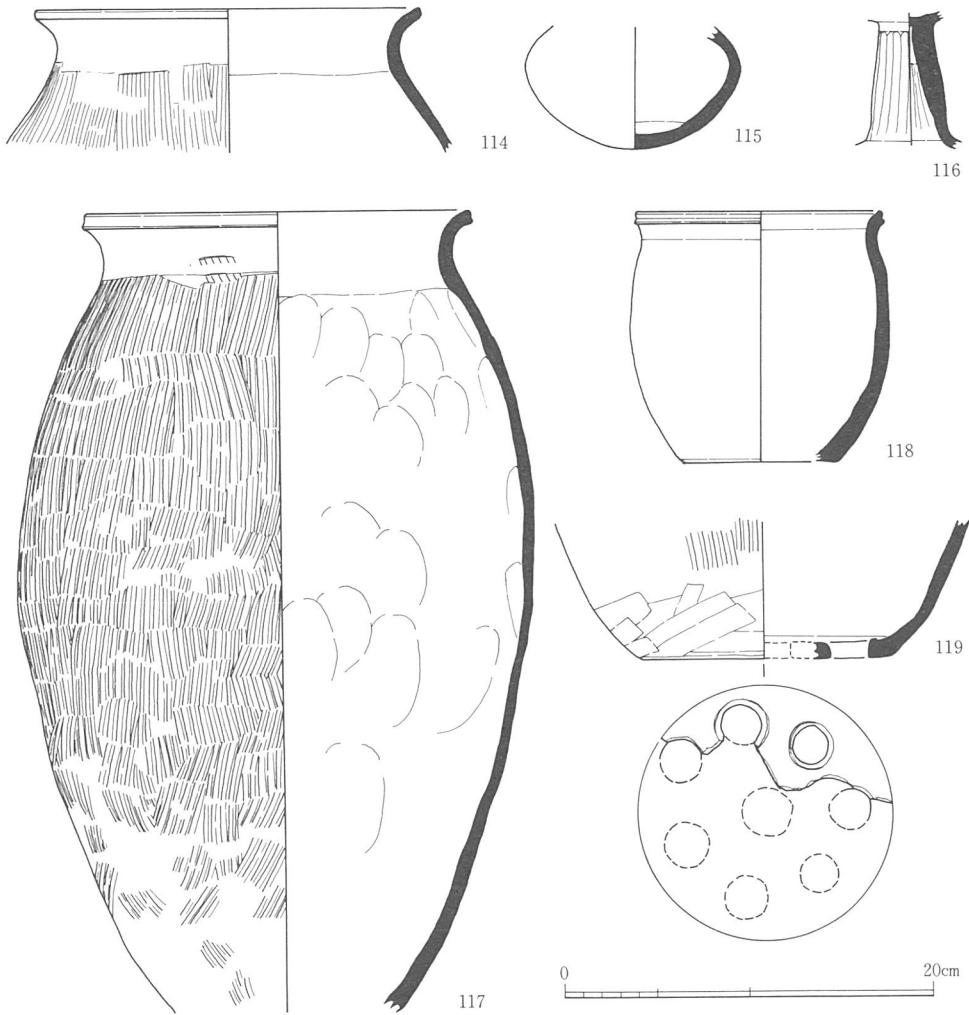


第48図 1766-〇〇出土遺物1 (1/4)



第49図 1766-〇〇出土遺物2 (1/4, 2/3)

第3節 遺構と遺物



第50図 1766-〇〇出土遺物3 (1/4)

1796-〇〇 (第46・47・51図の123・124, 図版19・24・87)

1766-〇〇周辺の土坑群の西K25PEに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径0.62m、深さ0.14mである。埋土は二層に大別でき下層に黄褐色粘質土、上層ににぶい黄褐色粘質土がほぼ水平に堆積していた。1766-〇〇との重複関係は、断面観察の結果1796-〇〇が後出することが確認された。

遺物は完形の須恵器の杯蓋(123)、杯身(124)が出土した。この杯類には焼成時におけるセット関係が認められる。

1793-〇〇（第46図，図版19）

1766-〇〇周辺の土坑群の南側K25PFに位置する。平面形は楕円形を呈し，規模は長径0.64m，短径0.41m，深さ0.13mである。埋土は二層に大別でき，いずれも黄褐色系の粘質土である。

遺物は須恵器の甕の体部片，土師器片が出土した。

1753-〇〇（第46図，図版19）

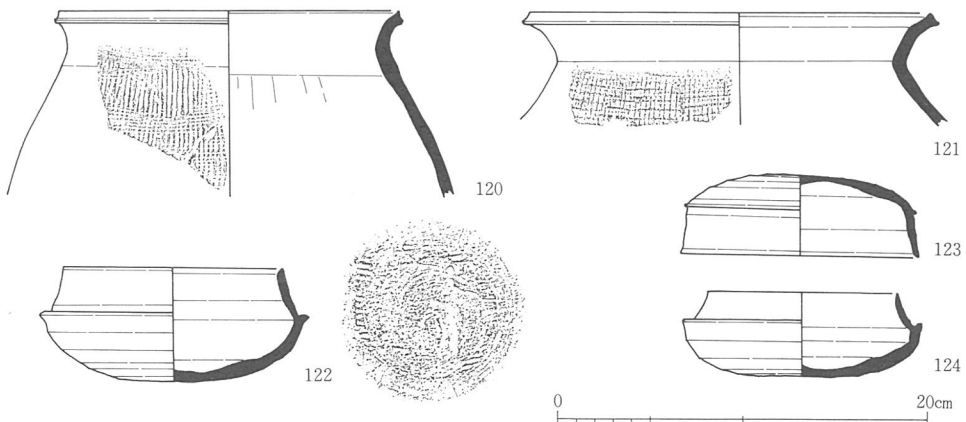
1766-〇〇周辺の土坑群の西K25QEに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，規模は長軸長1.45m，幅0.74m，深さ0.2mである。埋土は下層に黄褐色粘土がレンズ状に薄く堆積し，上層には炭を含むにぶい黄褐色粘質土が堆積している。

出土遺物は須恵器の甕の体部片や，土師器の高杯等がある。須恵器の甕の内面はスリ消し調整を施す。

1752-〇〇（第46・51図の120・121，図版19・21）

1766-〇〇周辺の土坑群の南西K25QEに位置する。平面形は楕円形を呈し，規模は長径1.48m，短径0.88m，深さ0.15mである。埋土は下層ににぶい黄褐色粘質土が薄く堆積し，上層には褐色粘質土が堆積している。

遺物は須恵器の甕（120・121）等がある。120・121はいずれも長胴甕で，口縁部は短く外反し，胎土には砂粒を多く含む。120の外面は平行タタキ調整後に一部カキメ調整を施す。121の外面は格子目タタキを施す。格子目タタキを施すものは，第I区出土土器中で1点のみである。また1766-〇〇の出土例を参考にすれば，器形はかなり長胴のものと推定できる。



第51図 1530・1752・1796-〇〇出土遺物（1/4）

第3節 遺構と遺物

1760-〇〇（第46図，図版19）

1766-〇〇周辺の土坑群の南K25QEに位置する。南側の一部は1969-〇〇に切られる。平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長径2.75m，短径1.52m，深さ0.07mで，底面東側は約0.1mピット状に落ち込む。埋土はピット状に落ち込んだ部分に黄褐色系の粘質土が堆積し，全体には褐色粘質土が堆積する。

出土遺物には須恵器の甕，甌，土師器の甕の体部片等がある。

1969-〇〇（付図1）

K25RCに位置する。平面形はほぼ円形を呈し，規模は直径0.37m，深さ0.2mである。埋土は二層に大別できいずれも黄褐色系の粘質土である。遺物は出土しなかった。

1784-〇〇（付図1）

1766-〇〇周辺の土坑群の南K25QEに位置し，西側の一部を1783-〇〇に切られる。平面形は楕円形を呈し，長径0.76m，深さ0.05mである。埋土は明黄褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

1783-〇〇（付図1）

1766-〇〇周辺の土坑群の南K25QEに位置する。平面形はほぼ円形を呈する。規模は直径0.62m，深さ0.15mで，埋土は黄褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

1763-〇〇（第52図）

1964-〇Bの東側K25PHに位置し，南側の一部は1757-〇〇に切られる。平面形は長楕円形を呈し，断面形は緩やかなU字状を呈する。規模は全長1.83m，幅0.5m，深さ0.2mである。埋土は二層に大別できいずれも黄褐色系の粘質土である。

遺物は出土しなかった。

1757-〇〇（第52図）

1964-〇Bの東側K25PHに位置する。南側は後世の攪乱により検出できなかったが，平面形は楕円形を呈すると考えられる。深さは0.26mである。埋土は三層に大別でき，黄褐色系の粘質土がレンズ状に堆積し，上層で土器の出土が認められた。

出土した遺物には須恵器の甌，土師器の甕の体部片等がある。

1751-〇〇（第52図）

1964-〇Bの南側K25PGに位置する。平面形は長楕円形を呈し，規模は長径1.71m，幅0.78m，深さ0.18mである。埋土は二層に大別でき下層に褐色粘質土，上層に炭を含む

にぶい黄褐色粘質土がレンズ状に堆積する。

出土遺物には須恵器の甕, 甌, 土師器の甕等がある。

1508-〇〇 (第53図)

K25PNに位置し, 1510-〇Bと重複する。平面形は不整形な楕円形を呈し, 規模は長径1.25m, 短径0.84m, 深さ0.19mである。埋土は三層に大別でき, いずれも黄褐色の粘質土である。

遺物は須恵器の細片1点が出土した。

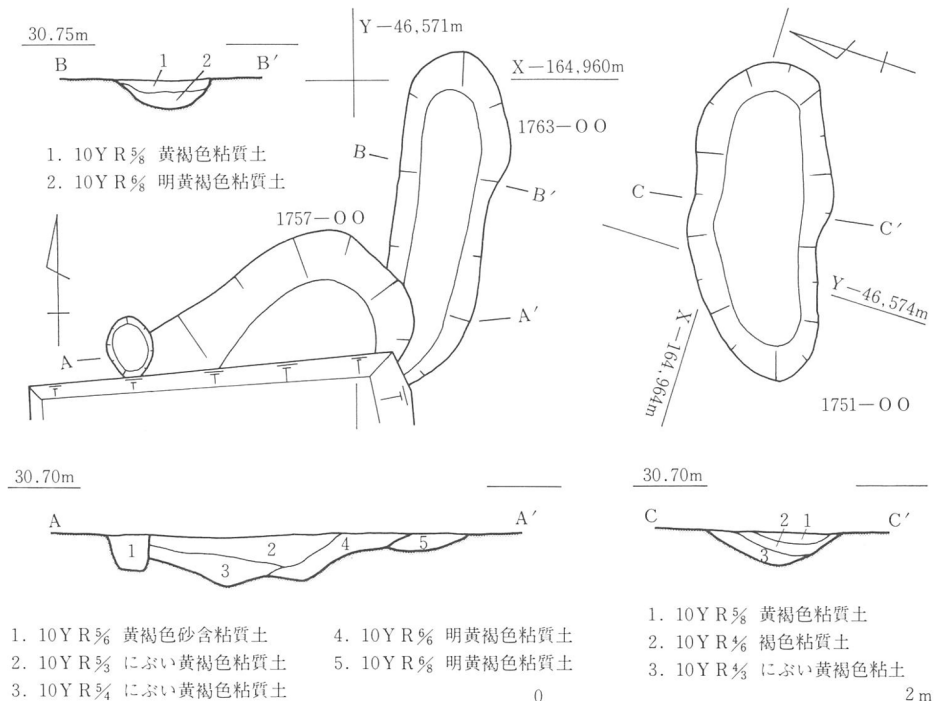
1544-〇〇 (第53図)

K25PNに位置し, 1510-〇Bと重複する。平面形は不定形で, 規模は全長1.14m, 深さ0.09mである。埋土は黄褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

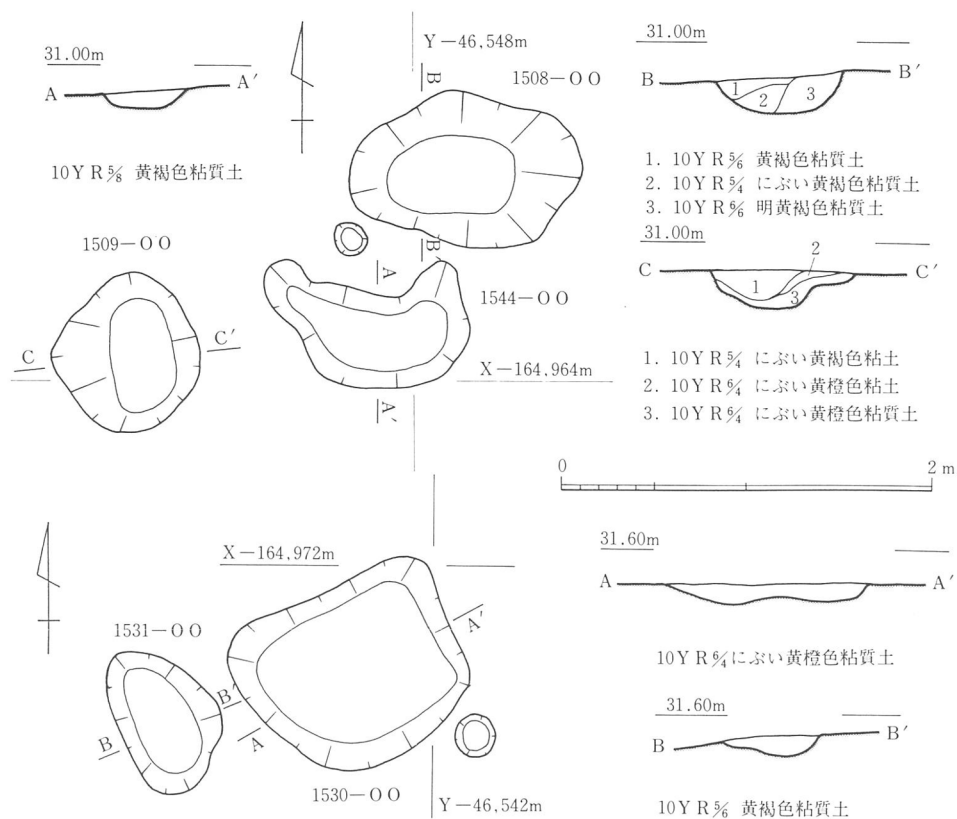
1509-〇〇 (第53図)

K25KKに位置し, 1510-〇Bと重複する。平面形は隅丸方形を呈し, 規模は一辺0.7m, 深さ0.2mである。埋土は三層に大別でき下層は黄橙色系の粘質土, 上層はにぶい黄



第52図 1751・1757・1763-〇〇平面・断面図 (1/40)

第3節 遺構と遺物



第53図 1508・1509・1530・1531・1544-〇〇平面・断面図 (1/40)

褐色粘質土の堆積が認められた。

出土遺物には須恵器の甕，甌，土師器の細片等がある。

1530-〇〇 (第51図の122・53図，図版20・87)

調査区の南東端のK25S〇に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，規模は南北0.8~0.9m，東西0.85~1.15m，深さ0.1mである。埋土はにぶい黄橙色粘質土である。

遺物は底面北東隅で，完形の須恵器の杯身(122)が出土した。この杯身の底部は平行タタキ調整後に回転ヘラケズリ調整で仕上げる。

1531-〇〇 (第53図)

1530-〇〇の西側，K25S〇に位置する。平面形は楕円形を呈し，規模は長径0.83m，短径0.52m，深さ0.1mである。埋土は黄褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

3. 溝

古墳時代中期に属する溝は、幅や深さにより、大型のものと小型のものに分類できる。大型のものは6条、小型のものは4条検出された。遺物は大型のものに属する1750・1821-O Sから多く出土した。また小型のものに属する1812-O Sからも少数であるが、須恵器の完形品が出土している。出土遺物の時期は、陶邑編年のⅠ型式の2～3段階に属するものと考えられる。

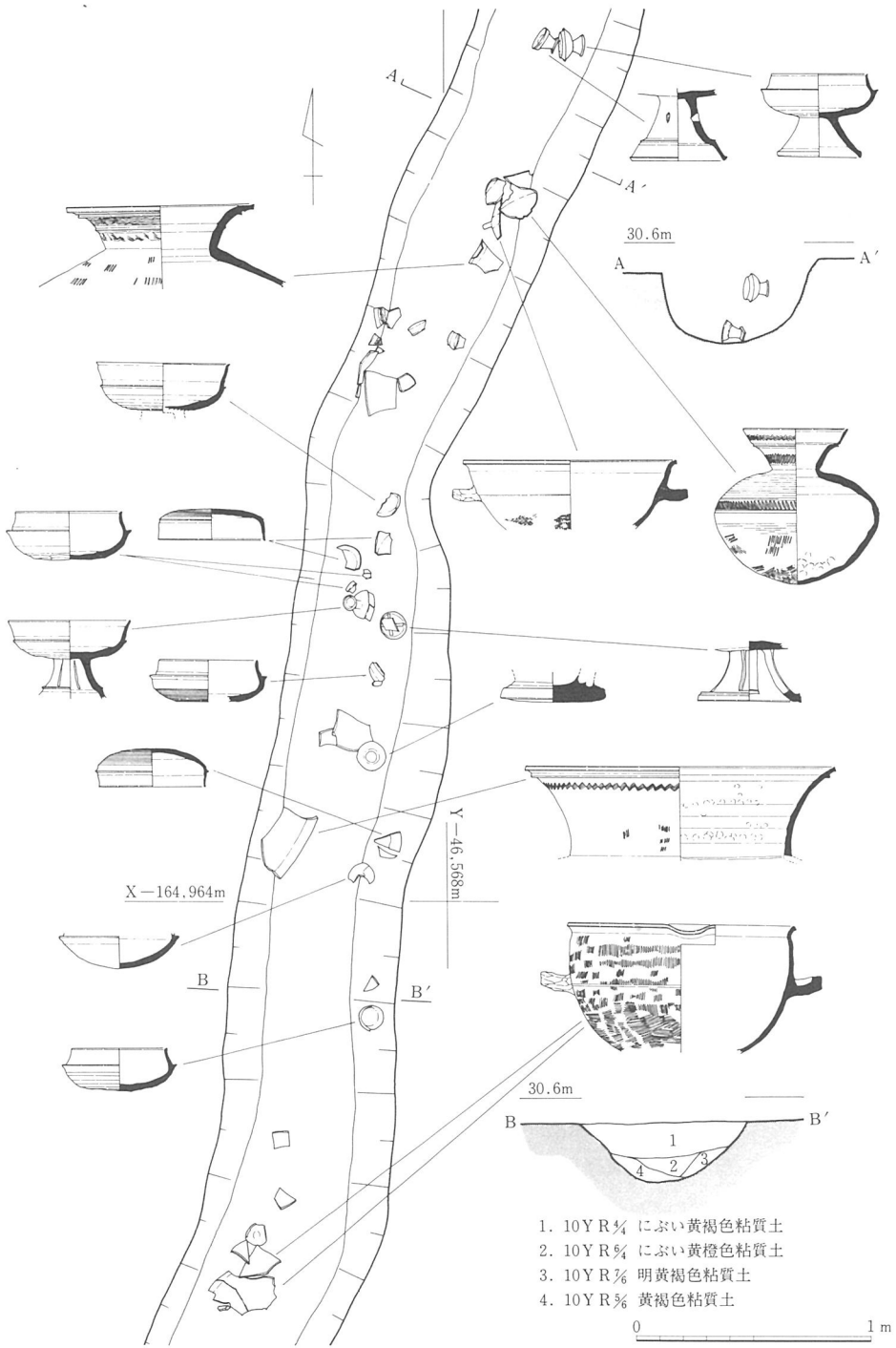
1750-O S (第54～57図, 図版25・26・88～90)

丘陵上段, K25RGからK25NIにかけて位置する北東方向に走る溝である。検出全長は約17.5m, 幅は0.58～0.72mである。断面形はU字形を呈し, 深さは南西側約0.1m, 北東側約0.3mで, 削平の状態を考慮しても北東方向に徐々に深くなると考えられる。底面には凹凸が認められ, 底面の標高も丘陵の地形に沿って北東方向に低くなる。南西側埋土は二層に大別でき下層に黄褐色粘質土が薄く堆積し, 上層に褐色砂礫混じり土が厚く堆積する。北東側も二層に大別でき下層には黄褐色系の粘質土がレンズ状に堆積し, 上層には炭を含むにぶい黄褐色粘質土が厚く堆積している。

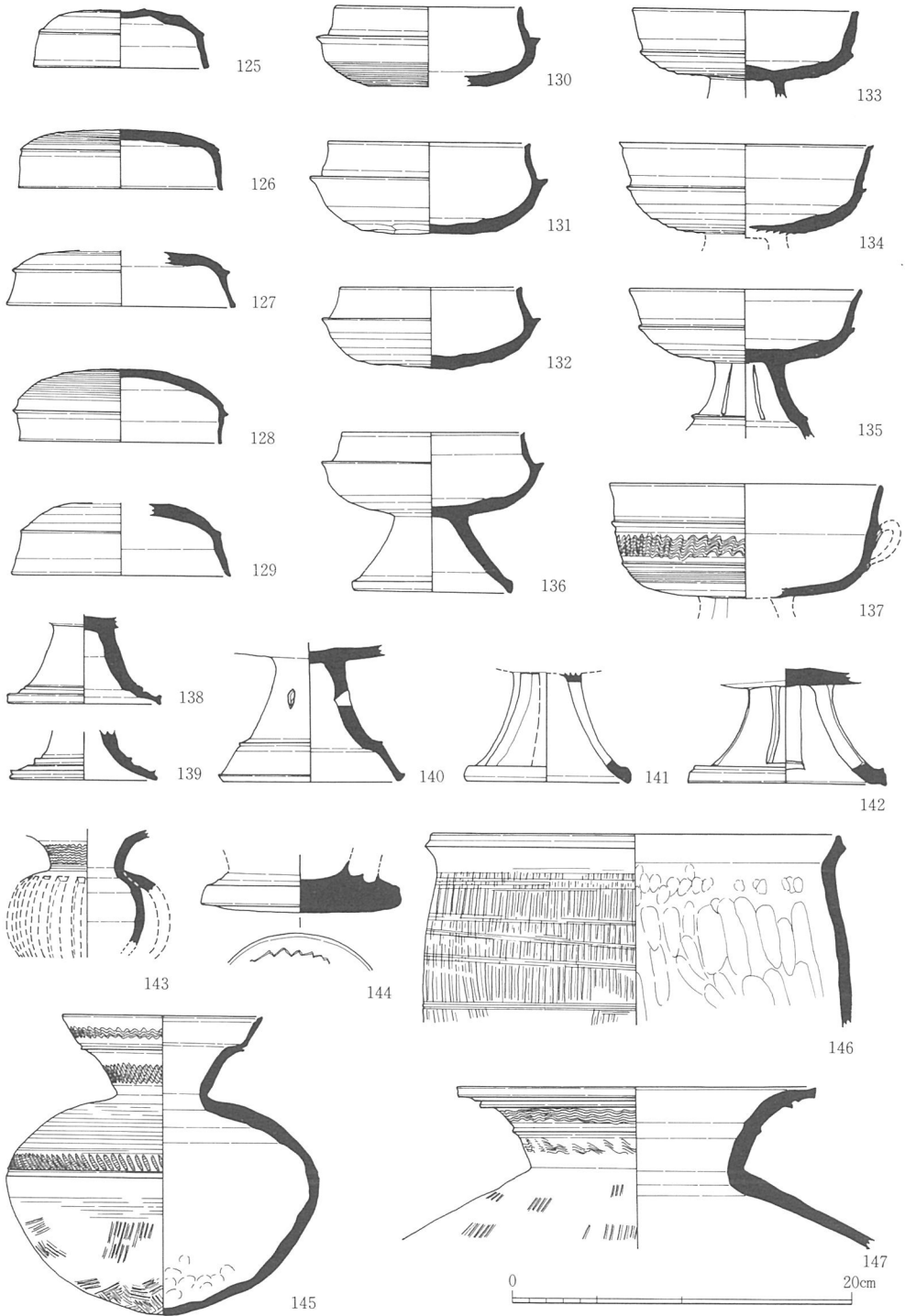
この溝からは多数の土器が出土した。出土した土器のうち完形品は136の高杯1点のみであるが, 他の破片も比較的大型のものが多く, 土器の比較集中する場所は溝が深くなる中央付近から南東部にかけてである。出土状況は壁面や底面に認められるものもあるが, ほとんどのものは, 上層(1層)で認められた。

出土遺物には杯蓋(125～129), 杯身(130～132), 高杯(133～142), 甕(143・145), 甌(146), 甕(147・150・151), 鍋(148・149), 器台(152), 土師器の甕(156・157)等があり, 土坑内出土遺物と比較すると杯蓋, 杯身の占める割合が高い。杯蓋は天井部が平坦なものや, 丸みを持つものがあり, 口縁部も外反あるいは直立するものなどがある。125は比較的小型の製品で, 天井部には粘土ひものまきあげ痕跡が認められる。杯身は底部の調整に静止ヘラケズリを施すもの(131), カキ目を施すもの(130), 回転ヘラケズリを施すもの(132)がある。高杯の杯部は杯蓋をもちいるもの(133～135), 杯身をもちいるもの(136), 鉢形をなし体部に装飾の施されているもの(137)がある。脚部の透かしは種類も豊富であるが, 円形のもののみられない。142は長方形透かしを四方に配し, 側面には面取りを施す。143は二重甕, 145は大型甕である。144はすり鉢の底部である。149は片口の鍋で, 口縁部は短く, く字状に外反させる。体部全体は平行タタキ調整を施し, 内面はナデ調整で仕上げる。筒型器台152の透かしは, 筒部に長方形のものを五箇

第3節 遺構と遺物

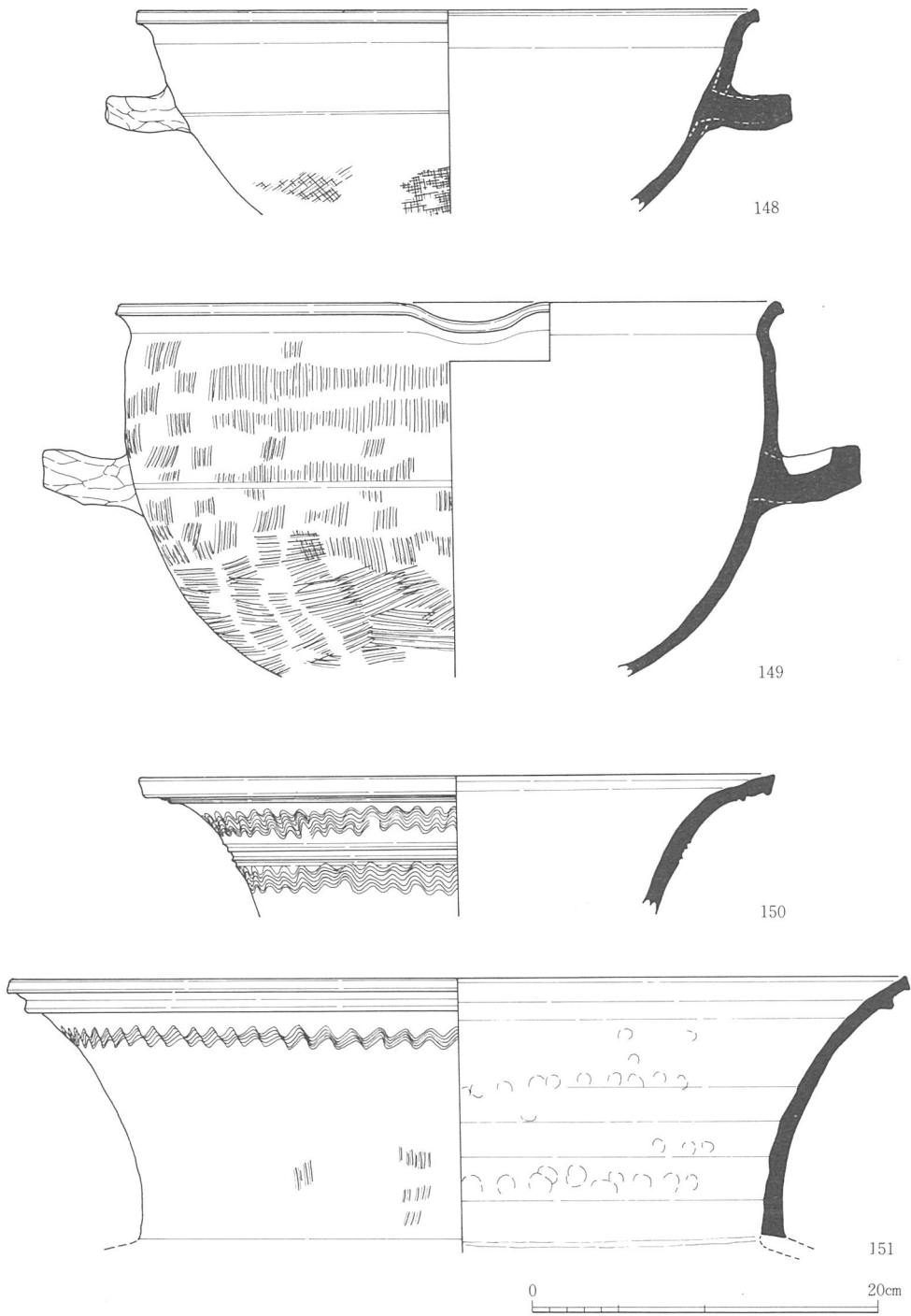


第54図 1750-O S 遺物出土状況・断面図 (1/30)

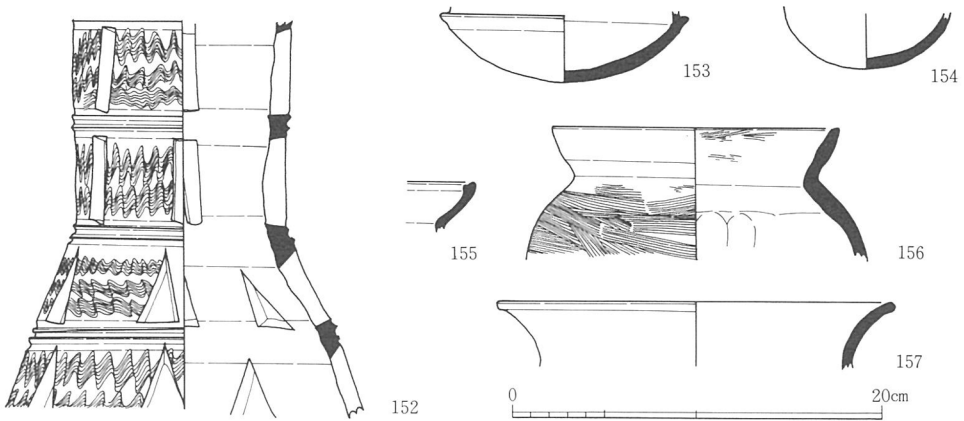


第55図 1750-O出土遺物1 (1/4)

第3節 遺構と遺物



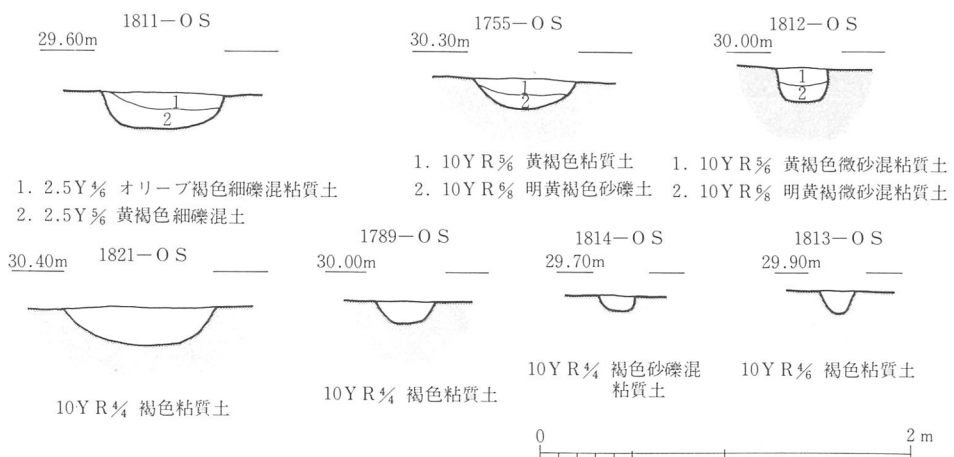
第56図 1750-O S 出土遺物 2 (1/4)



第57図 1750-O S出土遺物3 (1/4)

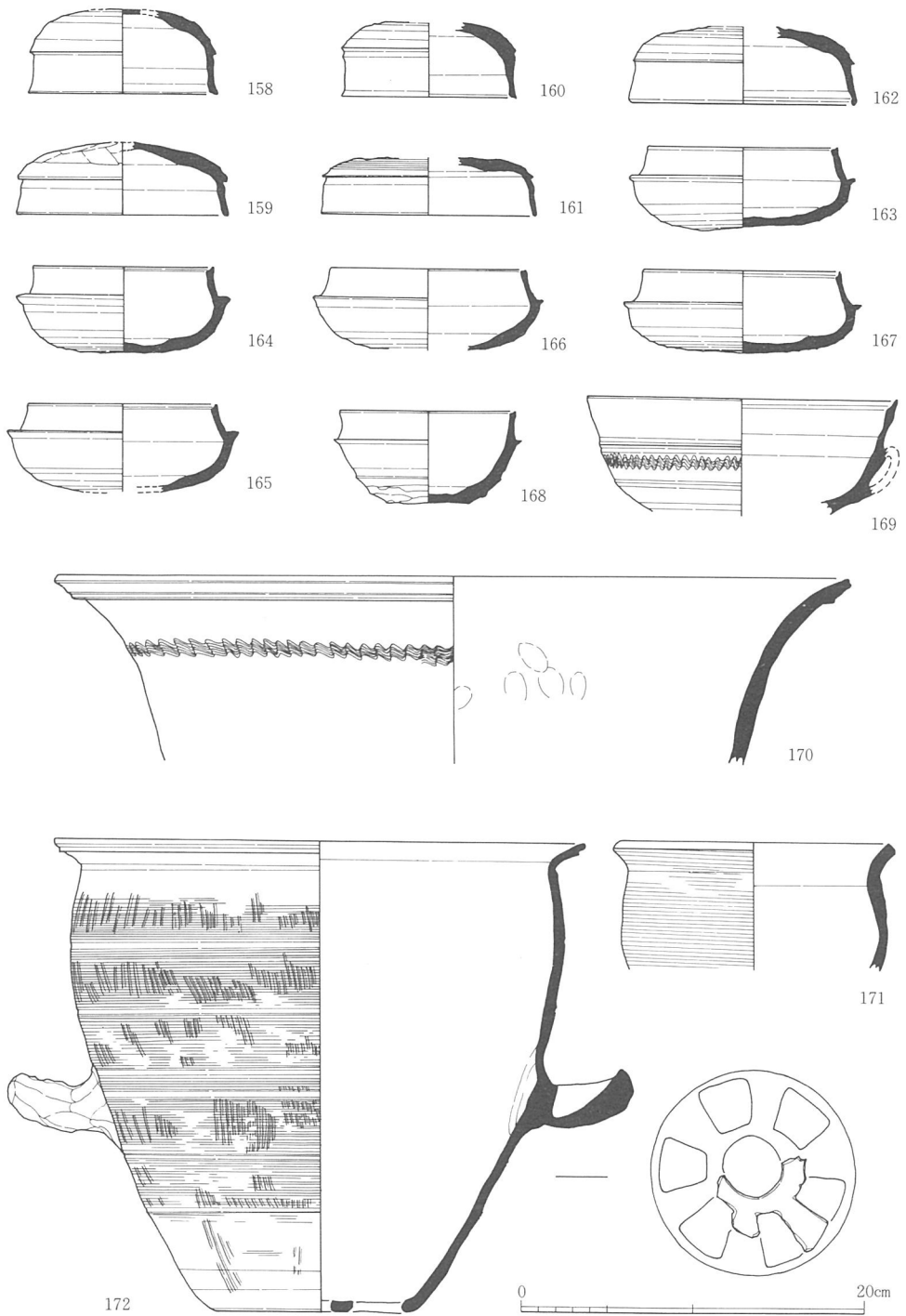
所に配し、裾部に三角形のものを七箇所配す。区画内に施文された波状文は、いずれも上部から順に施文される。甕には大型のもの(151)と中型のもの(150)がある。151は口縁端部の近くに凸帯を巡らし、口頸部の上部に楕円波状文を施す。150は口縁端部近くと、口頸部のほぼ中央に二条の凸線が巡り、波状文は二段に施される。153は土師器の杯で、全体の調整は摩耗が著しく不明であるが、須恵器の杯身の体部の調整にみられる回転ヘラケズリの技法は使用されていない。たちあがりは欠損している。154は小型の丸底壺と考えられる。

またこれらのうち二重壺(143)と器台(152)は1777-O Oとの接合資料である。



第58図 1755・1789・1811・1812・1813・1814・1821-O S断面図 (1/40)

第3節 遺構と遺物

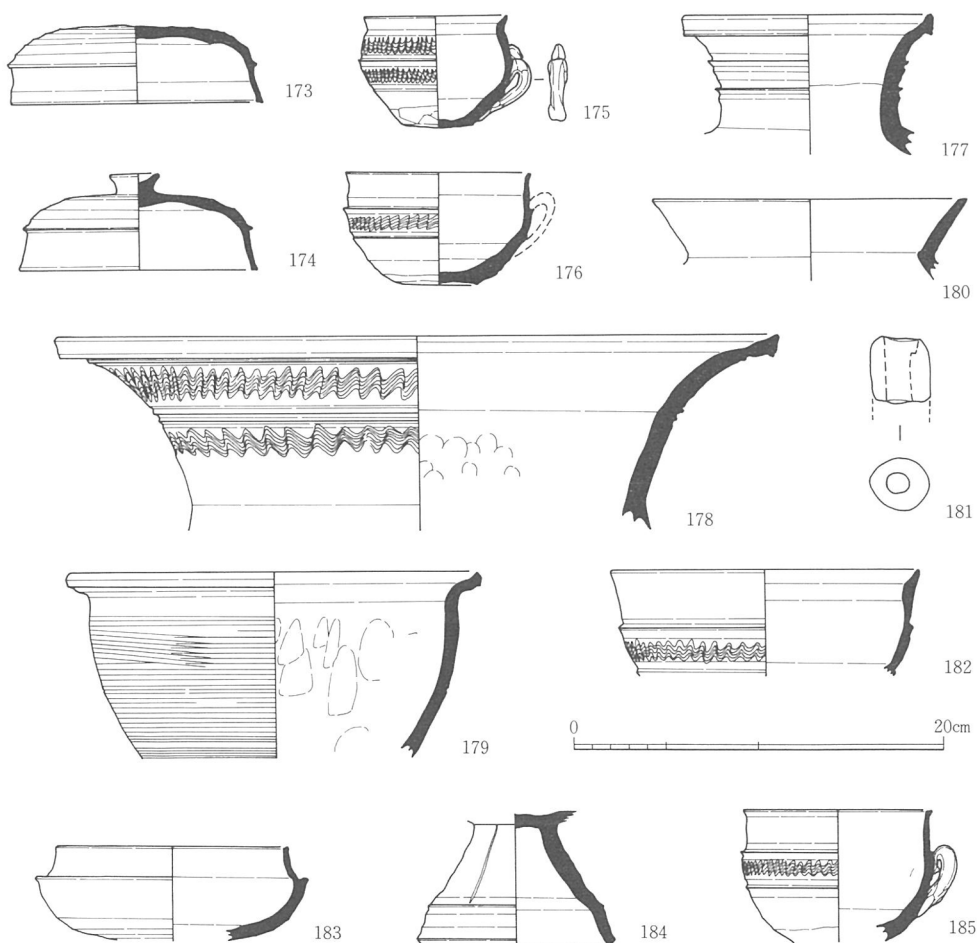


第59図 1821-O S 出土遺物 (1/4)

1821-O S (第58・59図, 図版91)

丘陵下段, K25L I 付近に位置する北東方向に走る溝である。検出全長約6m, 幅0.78~1mである。断面形は緩やかなU字状を呈し, 深さは約0.2mである。底面は北東側がやや低い。埋土は褐色粘質土である。

遺物は須恵器の杯蓋(158~162), 杯身(164~167), 椀(168), 高杯(169), 甕(170), 甌(172)等が, 1750-O Sと同様な状況で出土した。杯蓋には口径10cm前後の小型のもの(158・160)がある。159の天井部には静止ヘラケズリ調整を施す。168は受け部状の凸帯が巡り, 体部には回転ヘラケズリ調整を施す。底部はヘラ切り未調整である。169の高杯は鉢状の杯部を持つもので1750-O Sとの接合資料である。甕は大型のものと同型のもの



第60図 1811・1812・1813-O S出土遺物 (1/4)

第3節 遺構と遺物

のがある。170は大型のもので、口縁端部の近くには断面三角形の凸帯と楕状工具による波状文が巡る。172は図上ではほぼ完形に復元でき、口縁部は短く外反し端部は丸くおさめ、端部直下には凸帯が巡る。体部は全体に平行タタキ調整後カキ目調整を施し、器壁は薄く仕上げる。内面はナデ調整である。171は小型の鉢で短く外反する口縁部を持ち、体部外面には全体にカキ目が認められる。またこの溝は検出位置、方向、遺物の時期、出土状況を考慮すれば、1750-O Sと関連性の高いものと考えられる。

1811-O S (第58・60図の182, 図版27)

調査区の北西K25LA付近に位置し、調査区にはほぼ直交して走る。東側の一部は1810-O Oに切られ、西側は調査区外に延びる。検出全長は約7.2m、幅0.5~1.6m、深さ約0.3mで、西側にむかって徐々に広く、深くなる。埋土は二層に大別でき下層が黄褐色砂礫混じり土、上層がオリーブ褐色砂礫混じり土である。

遺物は須恵器の無蓋高杯(182)、甕等の破片が出土している。182は鉢状の杯部をもつもので、体部には明瞭な稜線で区分した文様帯がある。

1534-O S (付図1)

調査区の南東の丘陵縁辺部、K25MM付近に位置する。丘陵の肩部に沿って南東から北西方向に向かって走る。南東側は後世の削平のため確認できなかったが、さらに延びるものと考えられる。検出全長約9m、幅0.9~1.3m、深さ0.2mである。断面形は非常に緩やかなU字形を呈し、埋土は明黄褐色粘質土である。

出土遺物には須恵器の甕、土師器等があるが、いずれも小片で図示できなかった。

1812-O S (第58・60図の173~181, 図版92)

丘陵の下段のK25OCからJEにかけて位置する。K25OCからNFにかけてはほぼ丘陵に平行して東西方向に延び、MF、NF付近で90°南北方向に屈曲し、直線的に延びる。またK25LEでは南西方向から延びてくる短い溝と合流する。規模は検出全長約29m、幅0.2~0.27m、深さ0.17mで小型のものである。底面の標高は北に向かって低くなる。壁は直立し断面形はU字形を呈する。埋土は北側部で二層に大別でき下層が明黄褐色砂混じり土、上層が黄褐色微砂混じり粘質土である。

遺物は小規模な溝にもかかわらず比較的多く出土した。主なものは須恵器の杯蓋(173・174)、杯身、甕、把手付椀(175・176)、甕(146)、壺(177)、鉢(179)、土師器の甕(143)、須恵質の土錘(181)がある。杯蓋は天井部と口縁部との境に明瞭な稜をもち、口縁端部には水平な面を持つ。175はほぼ完形品で、口縁部は外湾し、体部は全体に丸みを帯びる。

底部は静止ヘラケズリにより仕上げ、把手の上部には豆状の飾りをつける。176は口縁部が直立し、体部との境界には凸線が巡る。179の口縁部は短く外反し、端面は上下に若干のび、稜がつく。体部外面にはカキ目が施される。181は円柱状の土錘と考えられ、外面は粗いナデ調整で仕上げる。穿孔部の上端部には段が認められる。

1814-O S (第58図)

丘陵の下段のK25L EからJ Eにかけて位置する。断面形はU字形を呈し、規模は検出全長約8 m、幅0.18m、深さ0.08mで、ほぼ1812-O Sと同規模である。埋土は褐色砂礫混じり粘質土である。

遺物は土師器の細片が1点出土したのみであるが、この溝は、1812-O Sの西側約1.4 mの間隔を保ちながら平行して走り、溝の形態なども考慮すればほぼ同時期のもので、関連性も高いものと考えられる。

1813-O S (第58・60図の183~185, 図版92)

丘陵の下段のK25MDからK Bにかけて位置する。K25MCではやや屈曲しながら南西方向から延びてくる短い溝と合流し、北側では斜面に向かって直線的に延びる。またこの溝も1814-O Sと同様に1812-O Sとほぼ平行して走る。規模は検出全長約12m、幅0.18 m、深さ0.13mである。断面形はU字形を呈し、埋土は褐色粘質土である。

出土遺物には須恵器の杯蓋、杯身(183)、高杯(184)、把手付碗(185)、甌、土師器の高杯がある。184の高杯脚部には、ヘラ状工具による切り込みが認められる。185は体部から口縁部にかけてほぼ直立するものである。

1789-O S (第58図)

丘陵上段の西南部K25R Yに位置する。西側は東西方向に走り、Q Y付近で北東方向に屈曲する。西側は調査区外に延び、北側は後世の削平のため確認はされなかったがさらに延びる可能性がある。検出全長は約7 m、幅0.27m、深さ0.14mである。断面形はU字形を呈し、埋土は褐色粘質土の単一層である。

遺物は出土しなかったが、溝の形状、埋土等から見ると、この溝は1812・1813-O S等の小型のものと時期や性格は似かよったものと考えられる。

1755-O S (第58・61図の189, 図版27・93)

調査区の南西端K24U Y付近に位置し、ほぼ東西方向に走る溝である。西側は調査区外に延びる。規模は検出全長約5 m、幅約0.27m、深さ0.18mである。埋土は二層に大別でき下層が明黄褐色砂礫土、上層が黄褐色粘質土である。

第3節 遺構と遺物

出土遺物は須恵器の把手付碗（189）、甕、土師器の甕がある。189の底部は回転ヘラケズリ調整により仕上げる。

1805-O S（付図1）

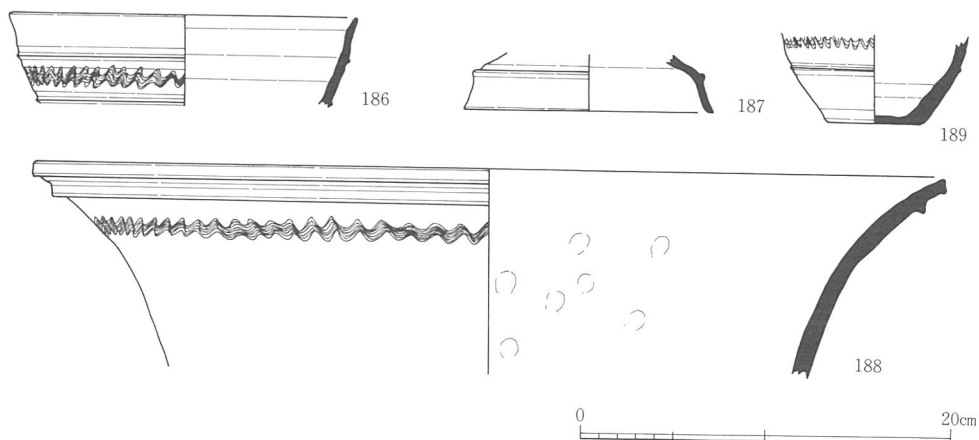
丘陵上段K24SYに位置する小規模な溝である。方向は1789-O Sに平行して走る。検出全長は約2.5m、幅0.2m、深さ0.07mである。断面形は緩やかなU字形を呈し、埋土は黄褐色粘質土の単一層である。

遺物は出土しなかった。

1749-O S（付図1、第61図の186～188、図版93）

K25OHに位置し、1750-O Sにはほぼ平行して走る溝である。北側は後世の削平により確認できなかったが、さらに延びるものと考えられる。規模は検出全長約2.6m、幅0.5～0.85m、深さ0.2～0.3mで、北側に向かって徐々に深くなる。断面形は緩やかなU字形を呈し、埋土は褐色系の粘質土である。

出土遺物は須恵器の杯蓋（187）、杯身、高杯（186）、甕（188）の他土師器の甕や高杯の細片等がある。杯蓋（187）は天井部と口縁部の稜は丸みをもち、口縁部はやや外反する。186の高杯は鉢状の杯部をもつもので、体部には鋭い稜線によって区分された文様帯が巡る。飾りつまみの数については破片のため確認できなかった。甕は大型のものと中型のものがある。188は大型のもので、口縁端部は平らにおさめ、下方にわずかに延びる稜をもつ。端部近くには断面三角形の凸帯と1条の楕状工具による波状文が巡り、内面はナデ調整により仕上げる。



第61図 1749・1755-O S出土遺物（1/4）

第4項 中世以降

中世以降の遺構としては、土坑、溝、井戸等があるが、ほとんどのものは16世紀以降の耕作地開発に伴うもので、Ⅲ区で検出されたような15世紀に属する掘立柱建物や土坑は検出されなかった。

1. 土坑

1817-〇〇（付図1，図版28）

丘陵下段部，K25L〇付近に位置する，埋甕土坑である。掘方の平面形は円形を呈し，直径0.75m，深さ0.25mである。掘方中央部に甕を据え，甕の周辺には裏込め土を施す。甕は土師質の大型品で，口縁部は板状に肥厚し，底部は平底である。体部の外面には粗いタタキ調整を施す。

遺構の性格は，水溜めに使用された可能性が高い。

1533-〇〇（付図1）

丘陵下段部K25KKに位置する。平面形は円形を呈する。規模は直径0.42m，深さ0.1mである。埋土は黄褐色砂礫混じり土である。遺物は16世紀以降の鉢の細片がある。

1517-〇〇（付図1）

丘陵下段部K25KKに位置する。平面形は隅丸方形を呈する。規模は一辺約1m，深さ0.1mである。埋土は二層に大別でき下層に褐色砂礫混じり粘質土が薄く堆積し，上層に黄褐色粘質土が堆積する。

遺物は弥生土器の甕の体部片があるが，当遺構の時期を示すものは出土しなかった。

1505・1511-〇〇（付図1，第62図の190～197，図版93）

丘陵下段部K25MK付近に位置する。1505-〇〇の平面形は隅丸長方形を呈し，規模は長軸長4.8m，短軸長4.2m，深さ0.3mである。埋土は大きく二層に大別でき下層に明黄褐色粘質土，上層に黄褐色粘質土がレンズ状に堆積する。1511-〇〇は1505-〇〇の西に位置し，1505-〇〇に切られる。埋土は黄褐色粘質土である。

1505-〇〇の出土遺物には近世に属する染め付け碗や陶器（194），土師質の甕（196），蓋（195），鉢（193）の他に須恵器の杯蓋（190），杯身（191），甕（192）等がある。1511-〇〇の出土遺物には染め付け碗や須恵器の装飾付壺の一部と考えられるもの（197）がある。

1506-〇〇（付図1，第62図の198～200，図版93）

丘陵上段部K25NJに位置する。北側は後世の削平のため確認できなかったが，平面形

第3節 遺構と遺物

は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は東西長2.8m、深さ0.15mである。埋土は黄褐色粘質土である。遺物は近世に属する陶器碗、土師質の甕の他須恵器の高杯（199）、甗、器台（198）、蓋（200）等がある。

1535-〇〇（付図1）

丘陵上段部K25MKに位置する。北側は後世の削平のため確認できなかった。平面形は不定形で、規模は東西長6.3m、深さ0.3mである。埋土は大きく二層に大別でき、黄褐色系の粘質土がレンズ状に堆積していた。出土遺物は近世に属する土師器の皿、鍋、丸瓦の他に須恵器の杯身、甕等がある。

1782-〇〇（付図1）

丘陵上段部K25QB付近に位置する。平面形は不定形を呈し、規模は東西長2.7m、南北長1.8m、深さ0.15mである。埋土は二層に大別でき下層が褐色粘質土、上層が黄褐色粘質土である。遺物は16世紀以降に属する土師質の甕の細片の他、古墳時代中期に属する須恵器の杯蓋や甕の細片が出土している。

2. 溝

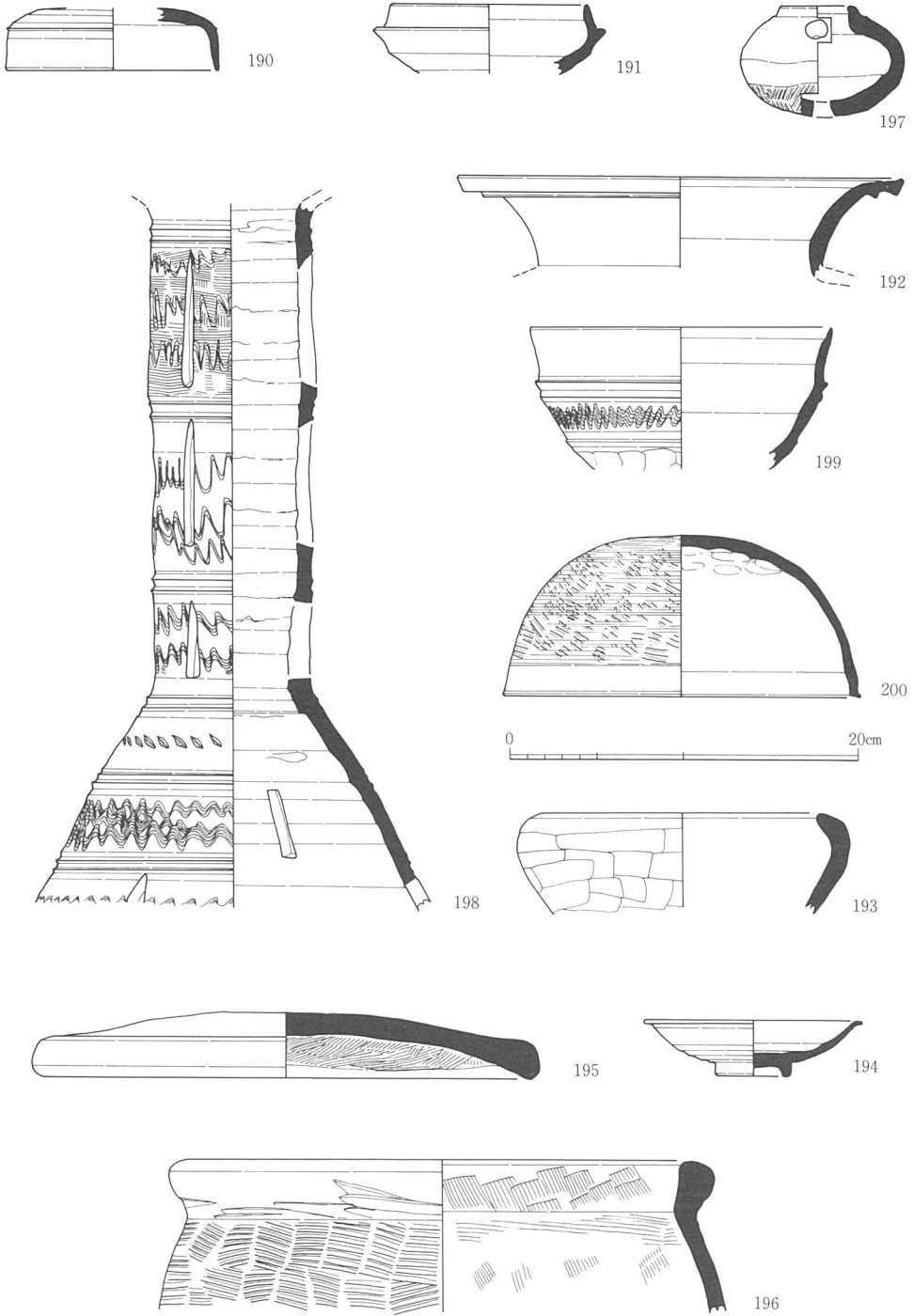
検出された溝はいずれも近世に属するものである。調査区のほぼ中央で検出された1748-〇Sは、近世の大規模な耕地開発の際に構築された溝で、丘陵上段部と下段部の段に沿って東西に走る。埋土中からは近世の染め付け碗や瓦に混じって、多数の古墳時代中期に属する須恵器が出土している。他にも南東端で同様な溝が検出されている。

3. 井戸（付図1、図版28）

井戸は3基検出された。このうち中世に属すると考えられるものは、谷部で検出された1559-〇W1基である。他のものは近世から近代に属するものであり、ここでは説明を割愛した。

1559-〇Wは前述したが、谷部のK25KOに位置する。掘方の平面形は円形を呈し、直径0.8m、深さ約1mを測る。井筒には曲物を利用していると考えられる。曲物は残存状況が悪く、調査では曲物の存在しか確認されていないので詳細な井筒の構造は不明である。井戸内の埋土は青灰色粘土である。

遺物は曲物以外出土しなかったが、近世において曲物を井筒として利用した例は現在のところ周知されておらず、当井戸も15世紀以前のものと考えておきたい。



第62図 中・近世遺構出土遺物 (1/4)

第3節 遺構と遺物

第5項 谷部の調査

当調査区は概要の項で前述した通り、伏尾段丘の先端部に位置し大小いくつもの開析谷が入り組み複雑な地形を呈している。今回の調査では便宜上谷部と呼称したが、この谷部は全体で見ると小規模な開析谷の一つであるといえる。

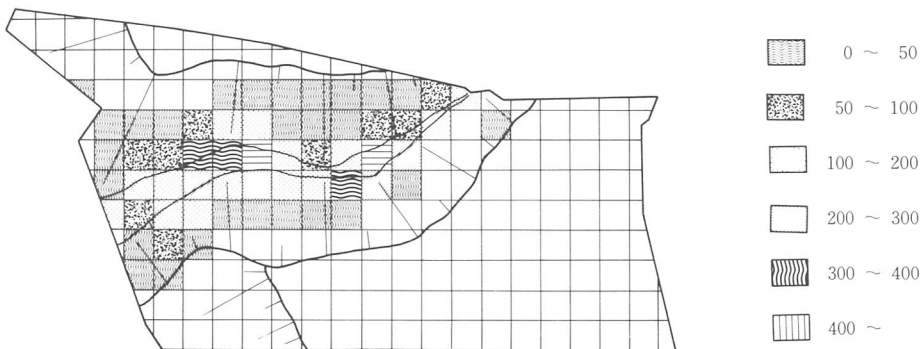
谷部は現状では、雑木林に改変されており谷状地形を呈し開析谷であることは簡単に認識されたが、それ以前の土地利用については調査により明らかになった。

1. 概観と堆積状況（第63～65図、図版29・30）

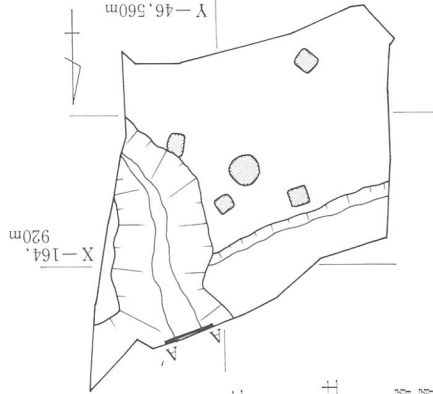
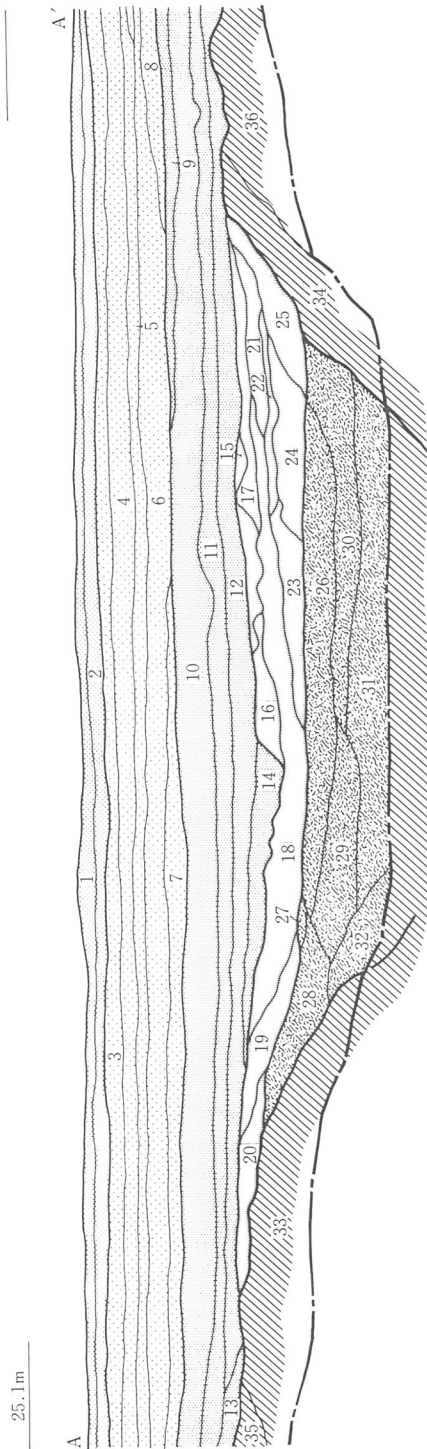
谷部は調査区の東側に位置し、北に向かって徐々に広くなり調査区の北側に広がる陶器川の氾濫原へと続く。北側の上端面での幅は約29m、底面の幅は約6mを測る。底面の標高は南側で24.23m、中央部のK25E O付近で23.06m、北側で21.96mを測り、北に向かって徐々に低くなる。谷部底面と丘陵部との比高差は、北側で約7.3mである。埋土の状況は北側で約1.8m、南側で約3.2mの堆積が認められた。

堆積状況は基本的には全体にはほぼ一様で上から表土、中世から近世にかけての遺物包含層、古墳時代の堆積層に分けられる。

古墳時代の堆積層は第Ⅴ・Ⅵ層にあたり大きく二層に大別できる。北側は谷幅が広く比較的水平的な堆積状況を呈し、北側はレンズ状堆積を呈す。第Ⅵ層は黒色粘土とシルト等の互層を呈し、多量の土器の他自然遺物を多量に含む。層厚は北側で約0.8～0.9m、南側で約0.3～0.5mである。上層の第Ⅴ層には灰褐色系の粘土や粘質土の堆積が認められ、多量の土器を包含するが、下層で多く見られた自然遺物は減少する。層厚は北側で約0.3～0.7m、南側で約0.2～0.7mである。



第63図 谷部土器出土密度分布図

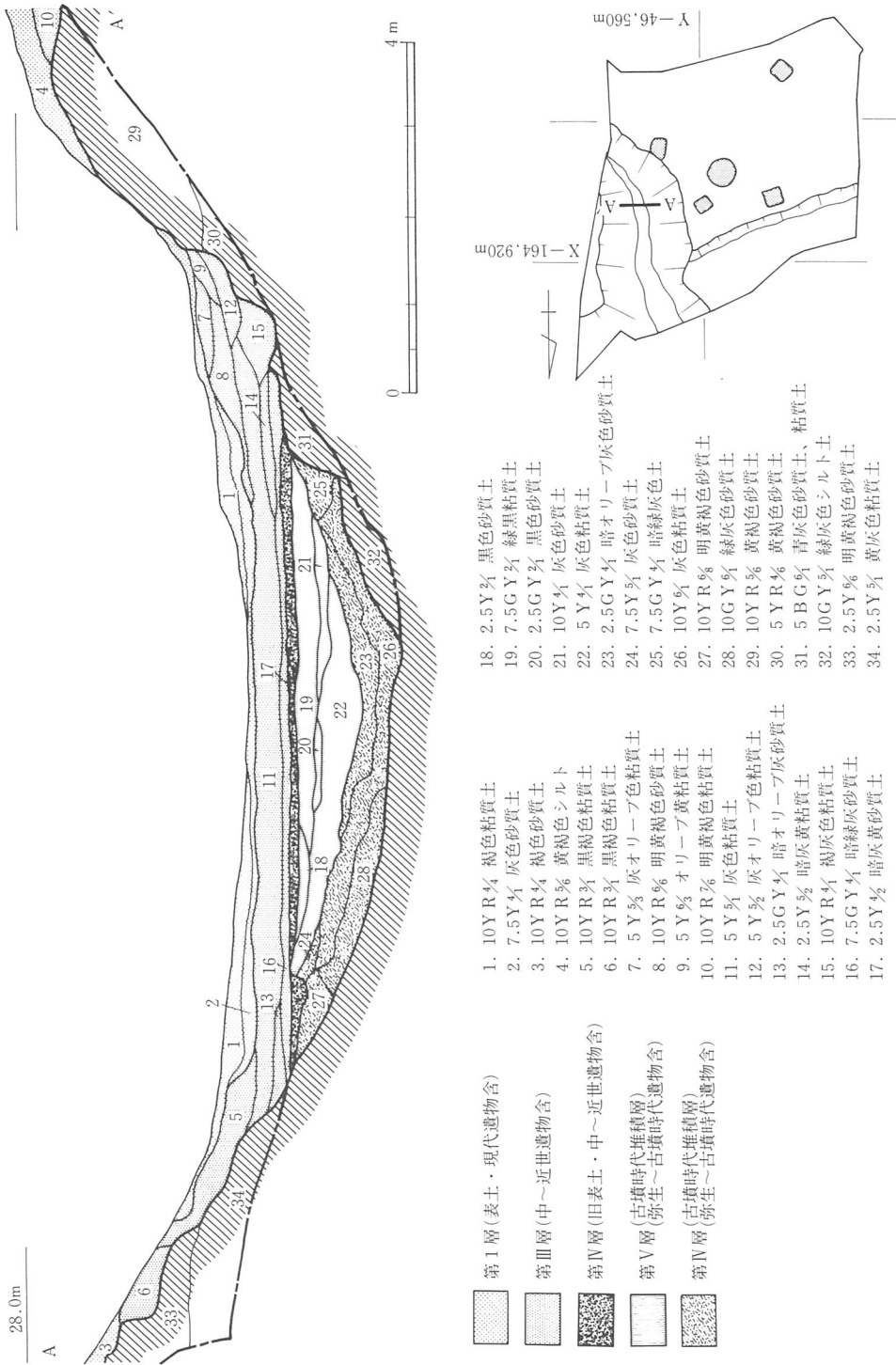


- 1. 10YR $\frac{3}{6}$ 暗褐色粘質土
- 2. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 暗灰黄色粘質土
- 3. 10YR $\frac{3}{6}$ におい褐色粘土
- 4. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 黄褐色粘土
- 5. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 黄褐色粘土
- 6. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 黄褐色粘土
- 7. 2.5Y $\frac{2}{6}$ におい黄色粘質土
- 8. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 暗灰黄色粘土
- 9. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 灰黄色粘質土
- 10. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 明黄褐色粘質土
- 11. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 暗灰黄色粘質土
- 12. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 暗灰黄色粘質土
- 13. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 黄褐色粘質土
- 14. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 暗灰黄色粘質土
- 15. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 暗灰黄色粘質土
- 16. 5Y $\frac{3}{6}$ オリーブ黒色粘質土
- 17. 5Y $\frac{3}{6}$ オリーブ黒色粘質土
- 18. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 黒色粘質土
- 19. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 黒褐色砂礫含粘質土
- 20. 7.5Y $\frac{2}{6}$ 灰オリーブ色粘質土
- 21. 5Y $\frac{3}{6}$ 黒粘土
- 22. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 黄灰色砂質土
- 23. 5Y $\frac{3}{6}$ オリーブ黒色砂礫粘質土
- 24. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 暗灰黄色粘土
- 25. 2.5GY $\frac{2}{6}$ オリーブ灰砂礫
- 26. 10GY $\frac{2}{6}$ 暗緑灰砂礫
- 27. 2.5Y $\frac{2}{6}$ 黒褐色粘質土
- 28. 10Y $\frac{2}{6}$ オリーブ灰色砂礫混粘質土
- 29. 5Y $\frac{3}{6}$ オリーブ黒砂質土
- 30. 5Y $\frac{3}{6}$ オリーブ黒砂質土
- 31. 2.5GY $\frac{2}{6}$ オリーブ灰砂
- 32. 2.5GY $\frac{2}{6}$ オリーブ灰色砂礫混粘土
- 33. 10GY $\frac{2}{6}$ 緑灰粘土
- 34. 10GY $\frac{2}{6}$ 緑灰砂礫
- 35. 5BG $\frac{2}{6}$ 青灰色シルト粘土礫五層
- 36. 5BG $\frac{2}{6}$ 青灰色シルト粘土礫五層

- 第I層(表土・現代遺物含)
- 第II層(中～近世水田層)
- 第III層(水田整地層)
- 第V層(古墳時代堆積層)
(弥生～古墳時代遺物含)
- 第VI層(古墳時代堆積層)
(弥生～古墳時代遺物含)

第64図 谷部土層図1 (1/80)

第3節 遺構と遺物



第65図 谷部土層図2 (1/80)

中世から近世の遺物を包含する層は第II～IV層にあたる。第III層は整地層と考えられる。北側は黄褐色粘質土や灰黄色粘質土が水平に堆積し、古墳時代の堆積層である黒色粘土やベース土である青灰色粘土をブロック状に含む。層厚は約0.7mである。整地の目的は基本的に水田開発に伴うものと考えられる。南側にも同様な堆積層がみられるが、灰色粘質土の単一層であり、北側で確認されたような明確な整地土とは言えない状況を示す。層厚は約0.3mである。第IV層は南側でみられる層厚約0.1mの薄い堆積層である。土色は灰黄色を呈し、土質は砂質土である。第II層は近世の水田層である。層厚は約0.8mで、4～5枚の重なりが認められる。第II層の水田層は谷部の北半で認められ、南側では認められなかった。

第I層は表土である。

2. 出土遺物

この谷部からは多量の遺物が出土した。主なものは弥生土器、須恵器、土師器で須恵器の出土量が圧倒的に多い。他の時代の遺物としては図示しなかったが、中近世の土師器や染め付け椀、瓦がある。出土層位で見ると第V・VI層に弥生土器や須恵器が最も集中してみられ、弥生土器は下層の第VI層で多く出土した。第I～IV層にも須恵器等の遺物はみられるが、出土量は激減し中近世の土器が主流を占める。また今回の調査では調査地の土地状況により、層位的な遺物の取り上げに不安な面があり、ここでは資料にランク付けを行なって提示した。(第66～74図は確実な第V・VI層出土土器、第75～78図は第II～V層出土土器、第79図は谷部の斜面部の出土土器である。)

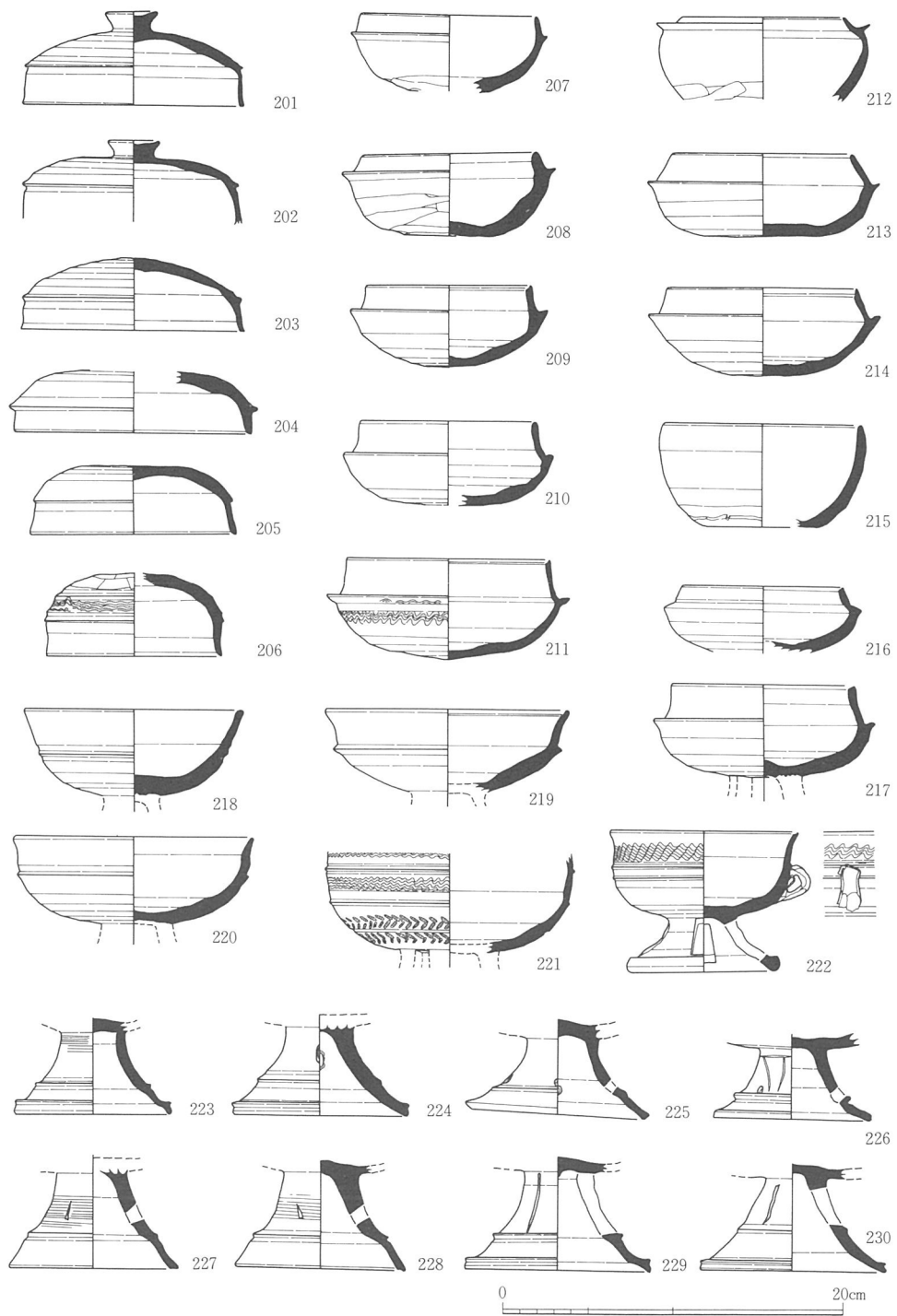
弥生土器(第72～74・78図, 図版99～101・105)

弥生土器は前述したが第VI層で多く出土した。時期別に見てみると後期に属するものが最も多く、ついで中期の後半ものが多い。また中期の前半のものも若干ある。

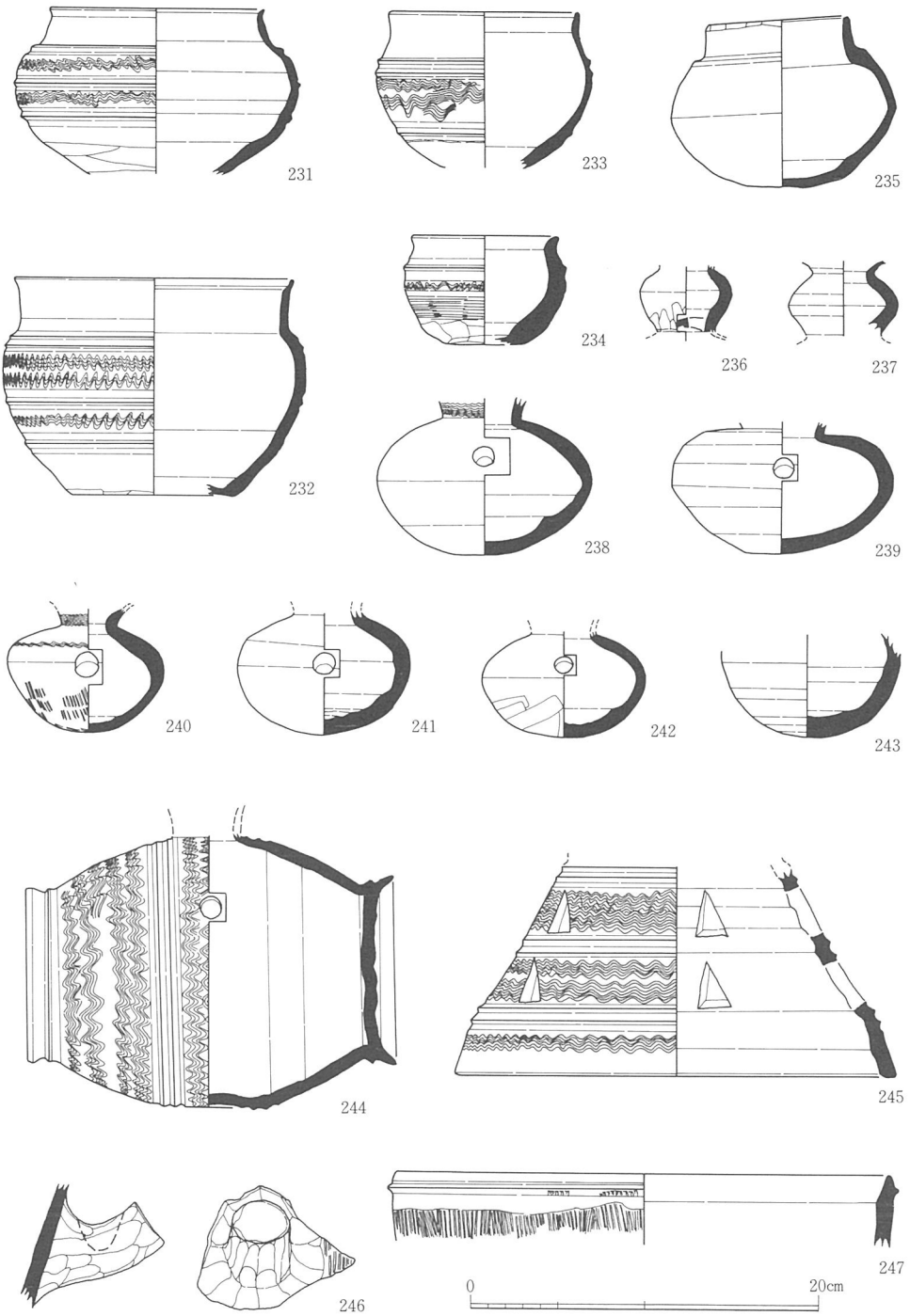
265・298は中期の前半に位置付けられるものである。265は頸部と体部に櫛描直線文と連弧文を施す。298の甕は胎土に砂粒を多く含む。調整等は剥離が著しく不明である。中期の後半に属するものとしては266・277・281・284・341等がある。266は口縁端部を垂下させ、体部外面には不明瞭であるがハケ調整を施す。277は高杯の脚部である。甕は口縁端部に凹線を巡らし、体部外面をハケ調整で仕上げるもの(281)と口縁端部を丸くおさめ、体部外面をミガキ調整で仕上げるもの(284)がある。341は河内産の胎土を呈し、外面には全体に竹管文を施す。

後期に属するものには長頸壺(269～275)、広口壺(268)、甕(279・280・282・283)、

第3節 遺構と遺物

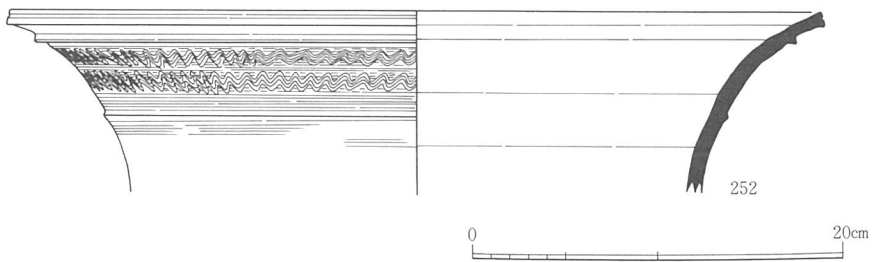
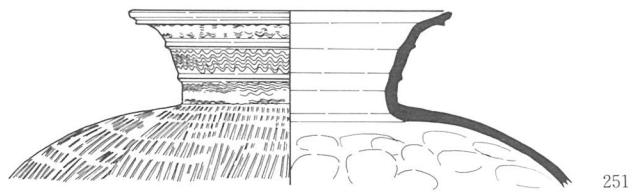
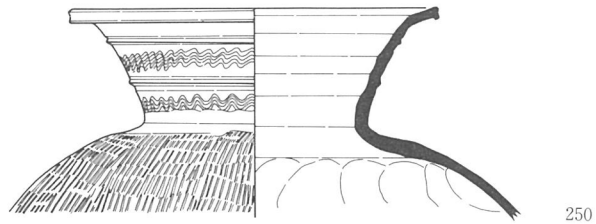
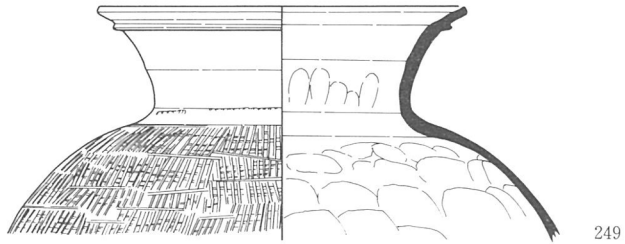
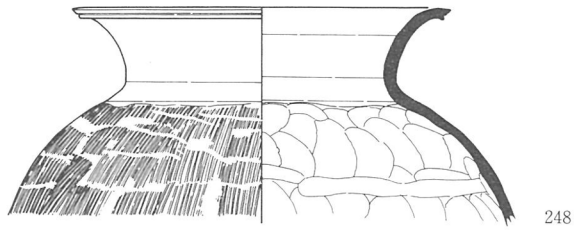


第66図 谷部出土遺物 1 (1/4)

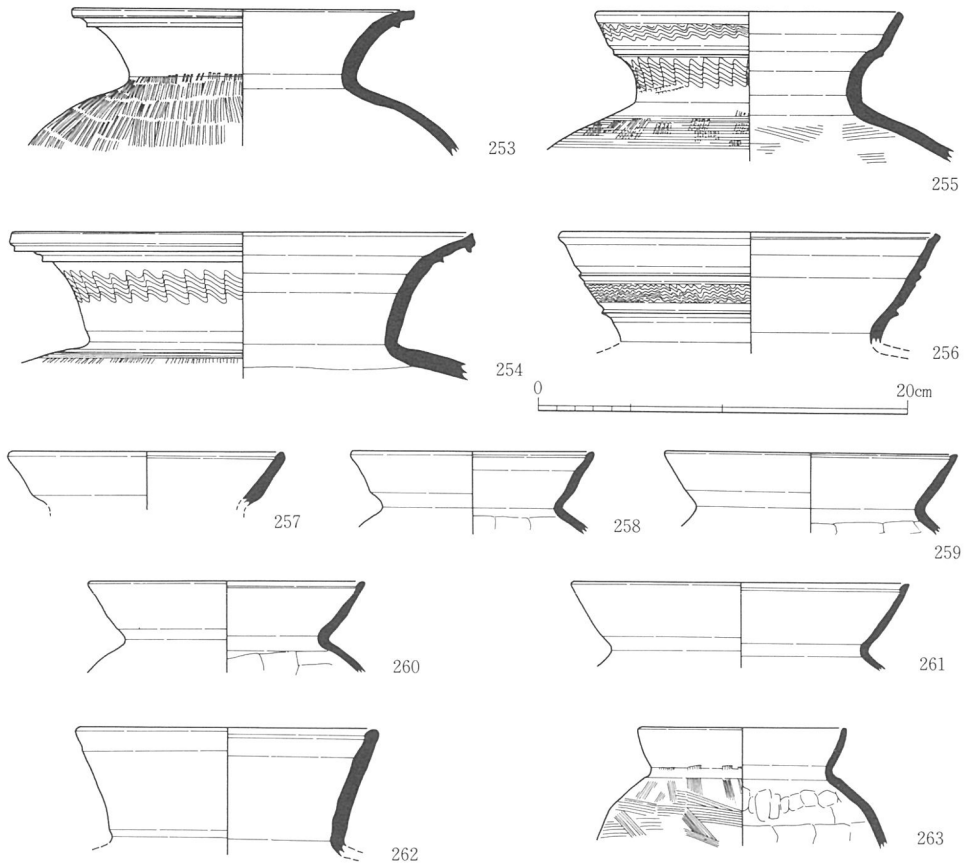


第67図 谷部出土遺物 2 (1/4)

第3節 遺構と遺物



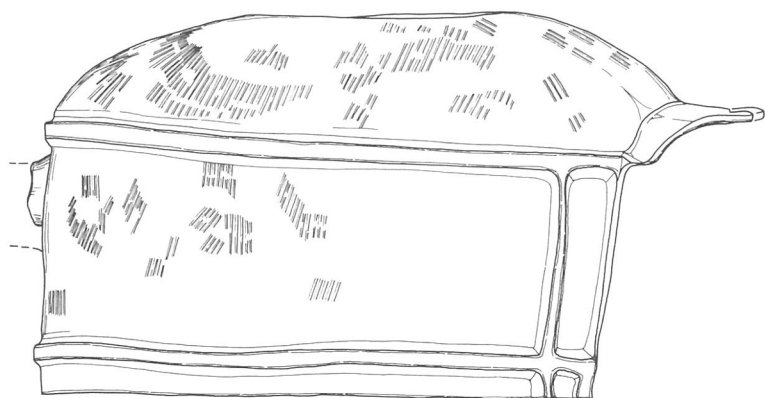
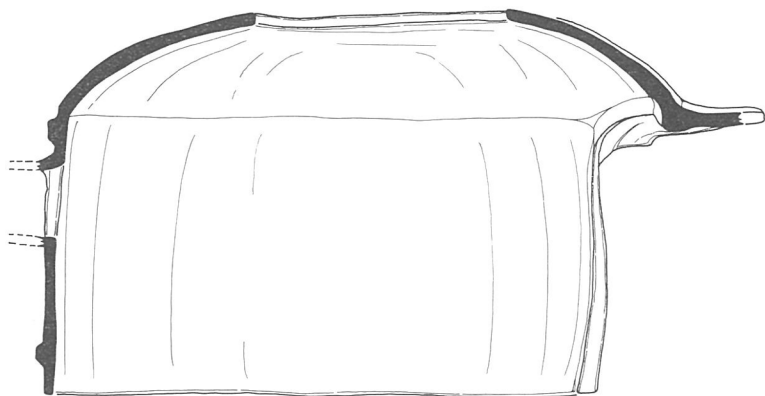
第68図 谷部出土遺物3 (1/4)



第69図 谷部出土遺物4 (1/4)

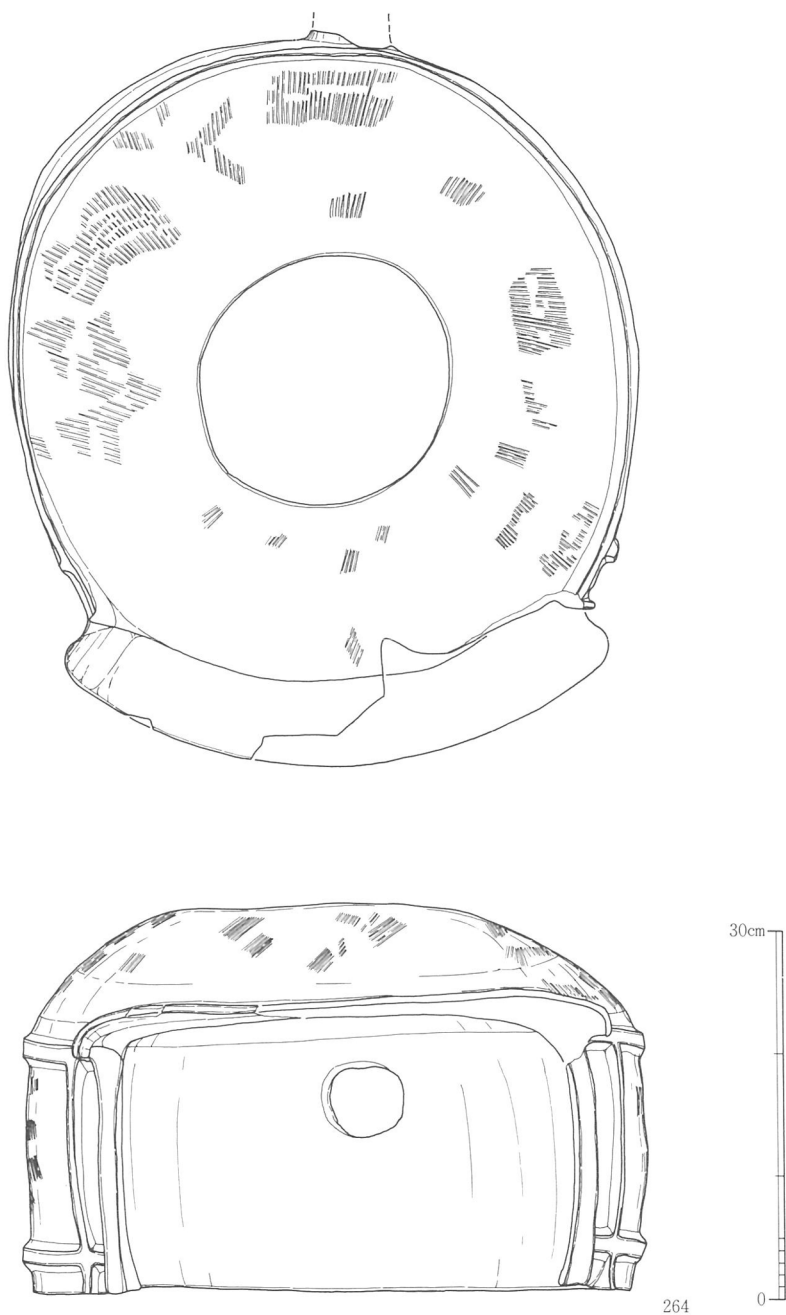
片口鉢(285)等がある。長頸壺は、頸部から口縁部にかけてほぼ直立するもの(269・270・271・274・275)とゆるやかに外反する(271・273)ものがある。調整は外面をミガキ調整で仕上げるもの(269~272・272・274)、ハケ調整で仕上げるものがあり(273)、内面はナデ調整で仕上げるもの(269~273・275)とハケ調整で仕上げるもの(274)がある。広口壺(268)は口縁端部が下方に拡張し、擬凹線、円形浮文を巡らす。282・283は口縁端部を上方に屈曲させ、体部外面はタタキ調整を施す。279・280の外面調整は不明である。285は口径52cmを測る大型品で、体部外面にはタタキ調整後にハケ調整を施し、内面はハケ調整で仕上げる。底部はケズリ調整を施す。298・299は小型の鉢であるが、調整はいずれも剥離が著しく不明である。300は甕の底部を穿孔させるもので甕と考えられる。286~291は壺の底部である。286~289は底部に窪みがあり、290・291は平底である。体部外面

第3節 遺構と遺物



264

第70図 谷部出土遺物 5 (1/6)



第71図 谷部出土遺物6 (1/6)

第3節 遺構と遺物

にはミガキ調整を施し、特に286は細かくていねいに仕上げている。

須恵器（第66～69・75～77・79図，図版94～98・102～105）

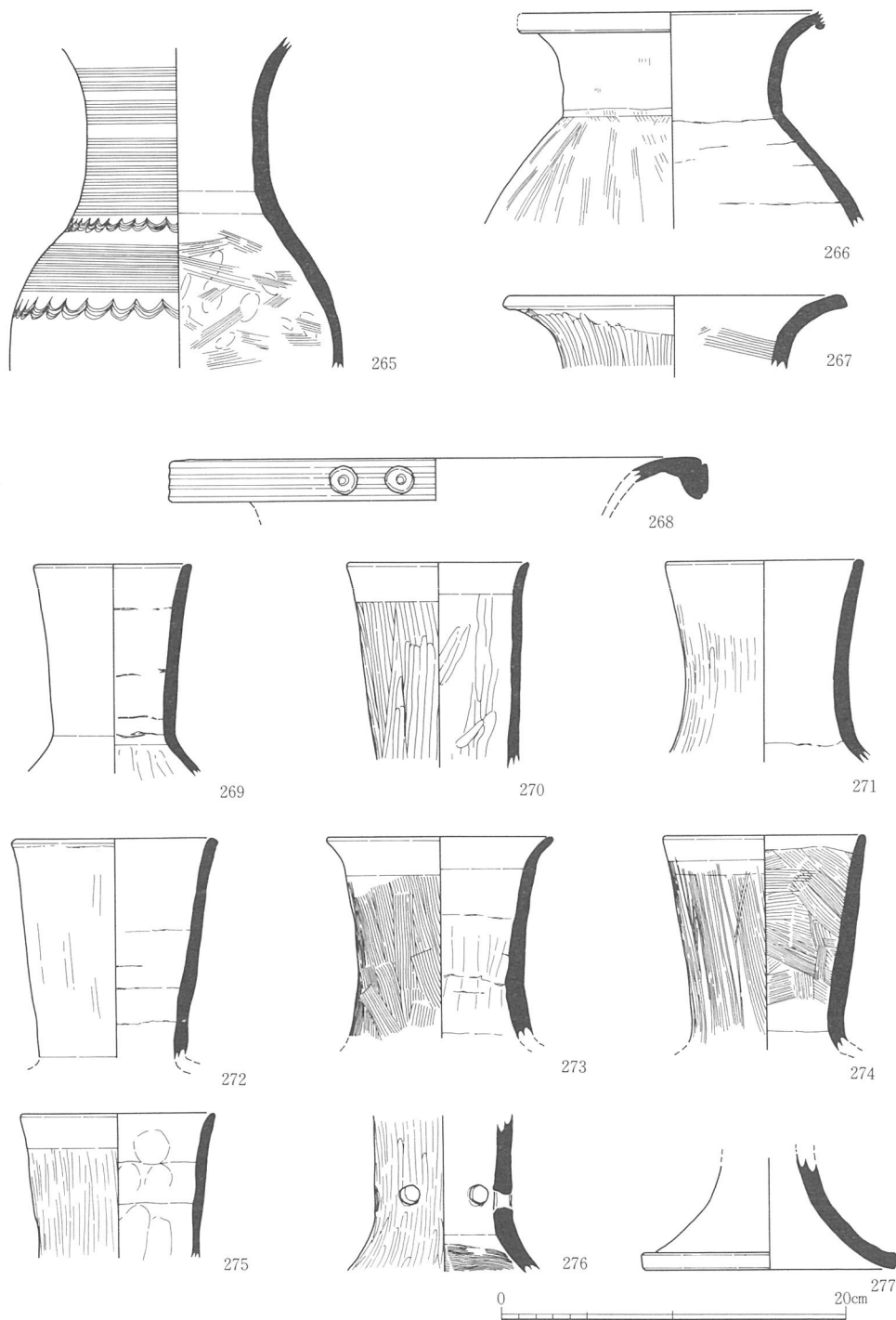
須恵器は約1300点出土している。器種構成については第83図に示したが、甕の占める割り合いがもっとも高く、ついで杯蓋，杯身，高杯，甗の順になる。

杯蓋には天井部に丸みをもち，口縁部の比較的短いもの（203），天井部が比較的平らで，短い口縁部をもち，器壁の厚いもの（204），天井部がやや平らで，天井部と口縁部との境に鋭い稜（301・302）を持つもの等がある。他には高杯の蓋と考えられる天井部につまみの付くもの（201・202）や，口径が10.2cmの小型品で天井部に波状文を施し，頂部を静止ヘラケズリで仕上げるものがある。

杯身は底部に丸みをもちほぼ直立する口縁をもつもの（210・211・303），底部に丸みをもち内傾する口縁をもつもの（214），底部はほぼ平らで内傾する口縁をもつもの（213・304）等があり，口縁端部も丸くおさめるもの，内傾し段を有するものなど細部の形態差は著しい。他にも特徴的なものとして，器壁が厚く，たちあがりの非常に短いもの（208），短く内傾するたちあがりをもち，体部の非常に深いもの（212），体部に波状文を施すもの（211）等がある。また304は時期の下る遺物である。

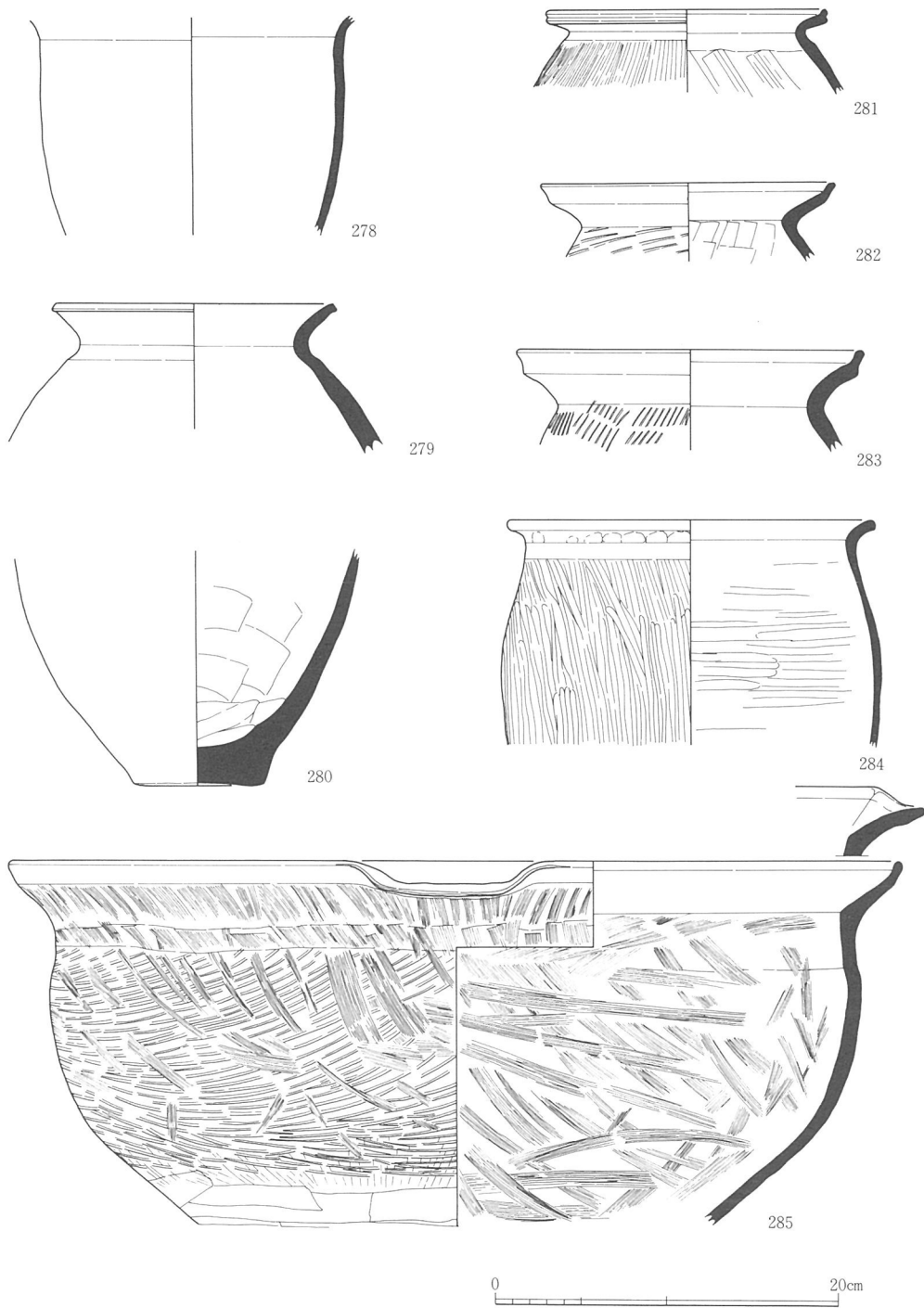
高杯は有蓋のものと無蓋のものがある。有蓋高杯（216・217）は杯部に杯身をもちいるものである。無蓋高杯は杯部に杯蓋をもちいるもの（219・220）と椀形のものもちいるもの（218・221・222・307）がある。218は杯体部に甘い稜線が巡る。221の杯部は深く，口縁部と鋭い稜線で区切られた体部上方には波状文が巡り，体部の下方には櫛状工具による波状文が二条巡る。222は杯部に板状の飾りつまみを付け，脚部は長方形の透かしを四方に配し，端部は丸くおさめる。307は焼き歪みが著しい。223～230・308・309は高杯の脚部で，裾が大きく広がり，脚端部と端部近くに凸帯を巡らすもの（223・224・229・309），脚端部と脚部のほぼ中央に凸帯を巡らすもの（230），脚端部近くに一条の凸帯を巡らすもの（225・226・308），脚柱部から裾部にかけて凸帯により段をつけるもの（227・228）等がある。透かしの種類は楕円形，円形，涙滴形，直線形と豊富である。また配置も二～四方のものが混在する。

甗は小型（238～243・318～325），大型（326），樽型（244・327～329）のものがあり，大型や樽型のもの占める比率は非常に低い。小型甗は体部の最大径が体部上半部に位置し，肩の張るもの（320・325），体部のほぼ中央に位置し全体に丸みをおびるもの（238・240～243）等がある。底部はタタキ，回転ヘラケズリ，静止ヘラケズリで仕上げるものが

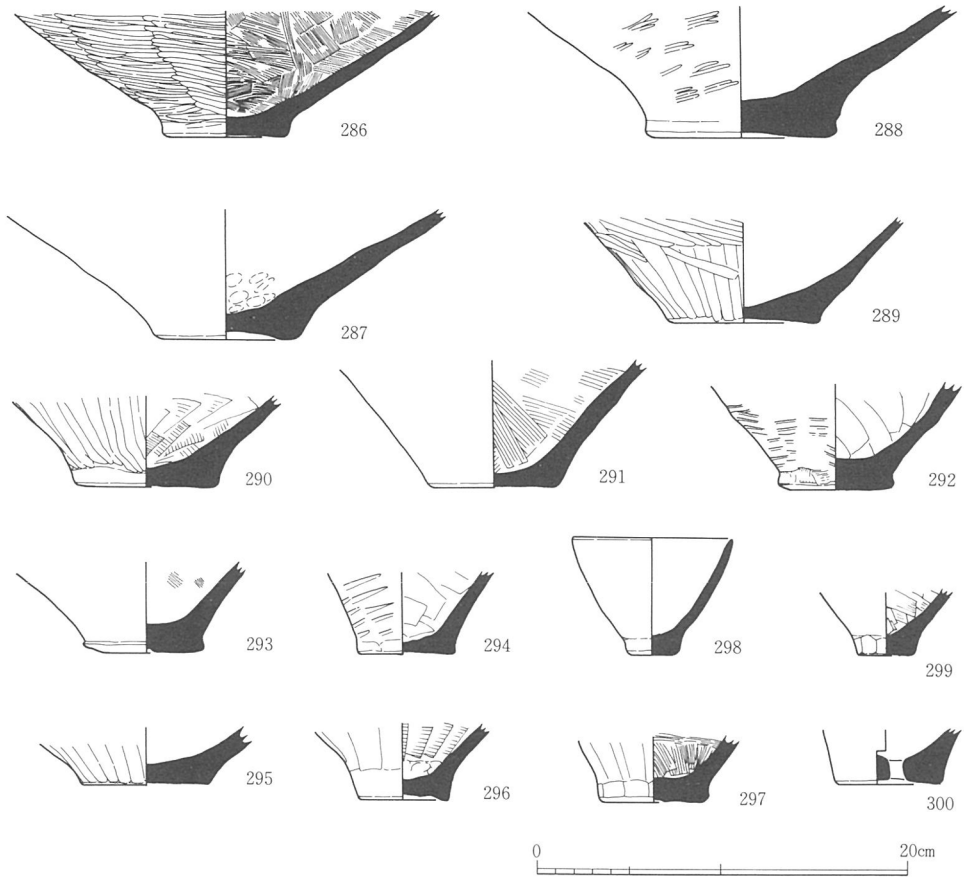


第72図 谷部出土遺物 7 (1/4)

第3節 遺構と遺物



第73図 谷部出土遺物 8 (1/4)

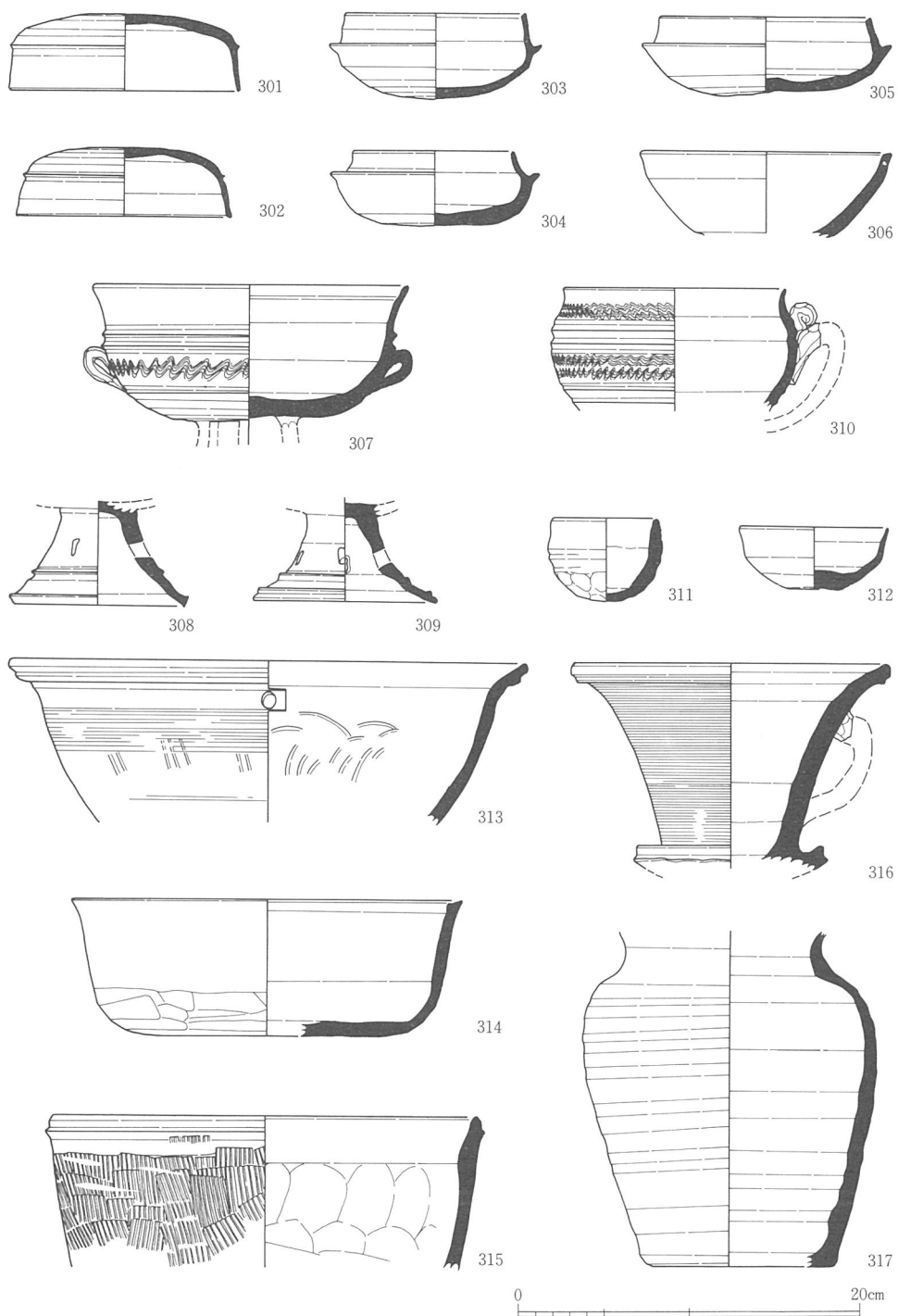


第74図 谷部出土遺物9 (1/4)

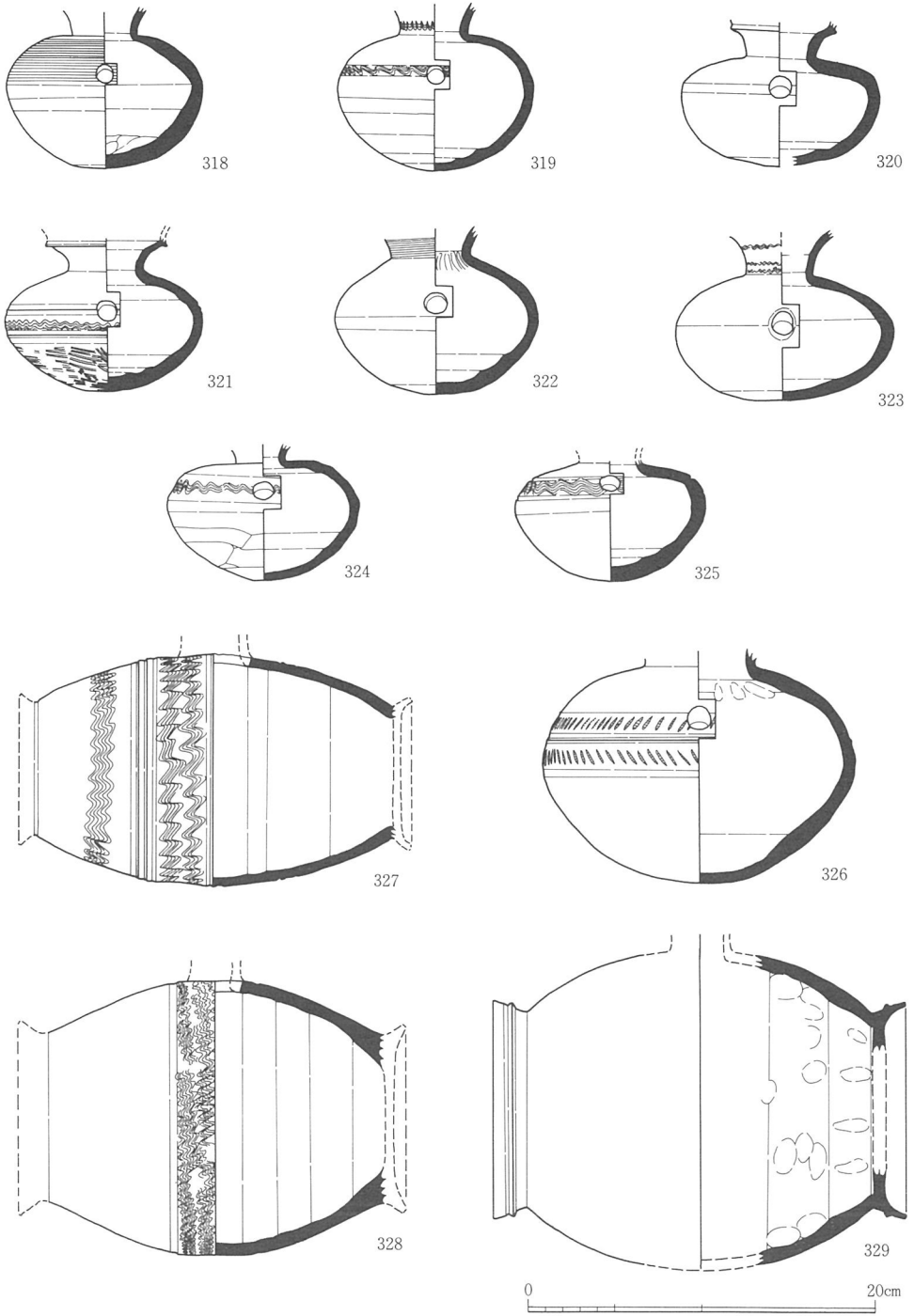
ある。ほかにも底部内面に凹凸が認められ、棒状の工具で調整を施すものや、粘土板を外
面から張り付け、ナデ調整で仕上げるものもある。体部の施文の状況は、無文のものと波
状文を巡らすものが混在する。大型甕は最大径が体部のほぼ中央に位置し、全体に丸みをも
おび、体部には二条の楕状工具による列点文が巡る。樽型甕は体部のふくらみが少ないも
のと(327)、体部中央が膨れるもの(244・328・329)がある。244はほぼ完形品で、体部
に施された波状文はラセン状に巡る。また甕は全体に口縁部のみ欠損し体部は完形のもの
が多く見られた。

把手付甕は体部全体に丸みをもつもの(231~233・310)と、体部から口縁部に欠けて
直立気味にたちあがるもの(343)がある。232は大型品で把手の有無は破片のため確認で
きなかった。

第3節 遺構と遺物

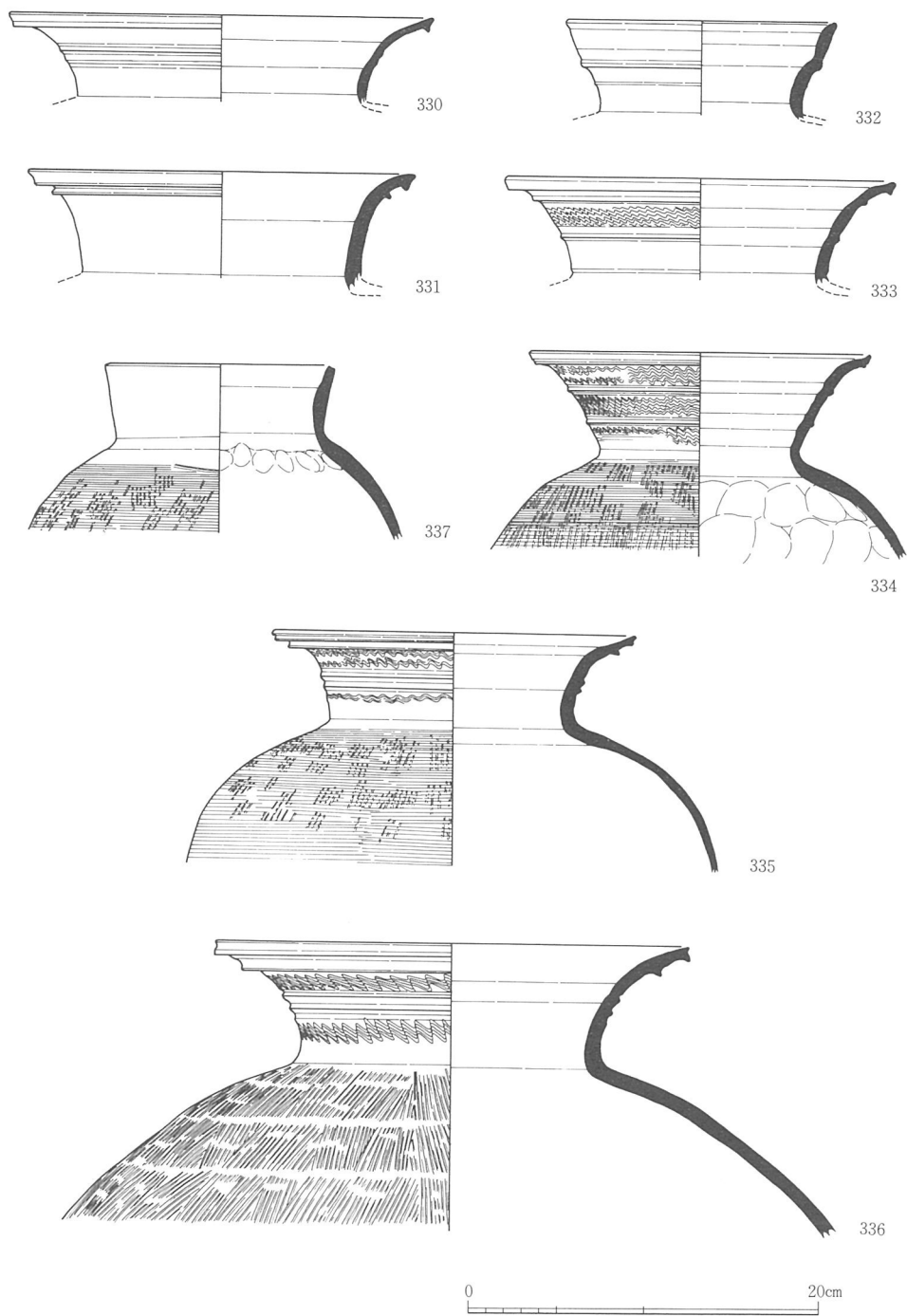


第75図 谷部出土遺物10 (1/4)



第76図 谷部出土遺物11 (1/4)

第3節 遺構と遺物



第77図 谷部出土遺物12 (1/4)

甕は中型のものと大型のものがある。口縁部の形態は外反し、端部を比較の丸くおさめるもの(251)、端部が面をもつもの(249・253)、端部下方に鋭い稜をもつもの(248・250・254・330・331・333～336)等がある。口縁部の凸帯は口縁端部の近くに一条巡らすもの(253・254・249・331)、口縁端部と口縁部に一～数条巡らすもの(235・250・251・333～336)等がある。体部の調整は外面にはタタキ調整を施し、内面はあて具痕をスリ消したものがほとんどであるが、250は内面に無文のあて具痕が残存し、248の内面にはハケ目状の平行線の認められるあて具痕が残存している。

壺は二重口縁をもつもの(255・332)と、短頸壺(337)がある。255は口縁部と頸部に波状文を巡らす。337の体部外面はタタキ調整後にカキ目調整で仕上げ、内面はあて具の痕跡をスリ消す。

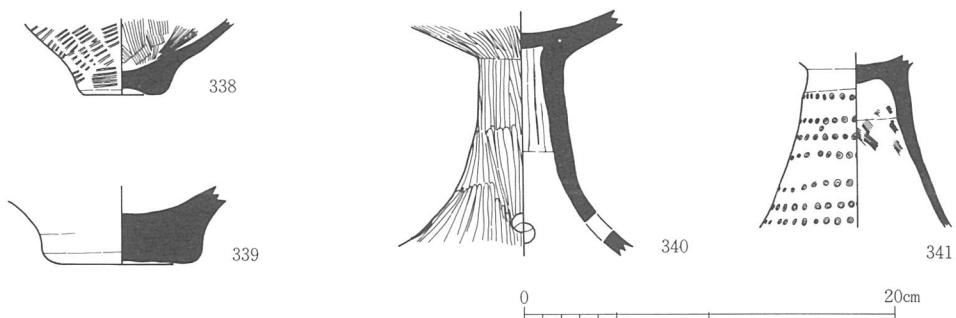
他の器種としては椀(215・306・312・311)、甌(246・247・351)、挿鉢(316)、器台(245・342)、鍋(313)等がある。311は全体をナデ調整で仕上げる手づくね製品で器壁は厚い。312は小型品である。313は口縁部と体部の境に穿孔が認められる。236・237は装飾須恵器の一部である。

314は鉢として図化した蓋の可能性もある。317の壺は時期的に下る可能性のあるものである。

土師器(第69図, 図版98)

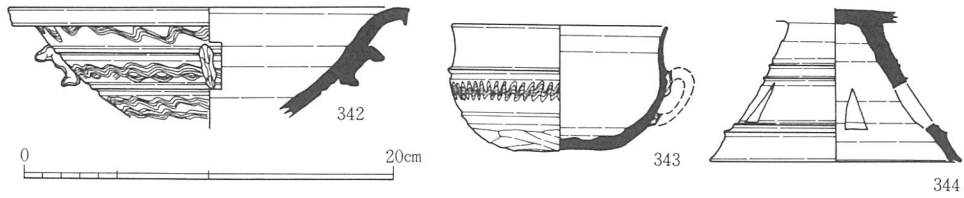
土師器は甕、壺、高杯等が出土したが、量的に見てみると、須恵器の1割にも満たない状況である。

甕は口縁端部肥厚させるもの(257～261)と口縁部は内湾気味にたちあがり、端部を丸くおさめるもの(263)がある。257・258・263は外面に煤の付着が認められる。262は口縁部は長く上方へ開き、端部は内側に肥厚する。



第78図 谷部出土遺物13(1/4)

第3節 遺構と遺物



第79図 谷部出土遺物14 (1/4)

その他 (第66・70・71図, 図版98)

その他の遺物で特筆すべきものとして、瓦質焼成の杯(207)と土師質の移動式竈(264)がある。207の杯は口縁部が短く、体部が深い。体部には受部状の凸帯が短く突出し、体部は回転ナデ調整、底部は静止ヘラケズリ調整で仕上げ、ミガキ調整でみられるような光沢を発する。色調は表面は暗灰色、断面は灰白色を呈し、焼成は良好である。また高杯の可能性もある。

土師質の竈264は図示したとおり体部がほぼ直立し、天井部がドーム状を呈するという特異な形状を呈する。法量は底部分まで含めた全長が58.9cm、径52.7cm、高さ31.2cmを測り、炊き口は幅37cm、高さ23cmを測る。天井部には幅の広い庇を貼付け、両側は端部を肥厚させ丸みをもたせる。天井部のほぼ中央には釜孔と考えられる直径約20cmの円孔が認められ、焚き口の対面には煙だしと考えられる直径7.2cmの円孔がみられる。この煙だし部は現状では欠損し正確には把握できないが、煙突状に突き出す可能性もある。体部と天井部の境と底部付近および焚き口付近には幅1.2cm、厚さ0.3cmのタガ状の粘土帯を巡らし補強を行なっている。器壁は天井部が0.4~0.5cm、体部が0.4~0.9cmを測り、比較的薄いつくりといえる。調整は外面全体を平行タタキ調整、内面をナデ調整で仕上げる。また内面および外面にも煤等の付着は見られず、使用の痕跡は認められない。時期は出土状況や他の出土遺物から、集落の中心的な時期である陶邑編年でいうところのI型式2~3段階に属するものと考えられる。

以上簡単に谷部出土の遺物について説明をしたが、このうち最も出土量の多い須恵器は焼成不良の焼き歪みや生焼けの製品は少なく、西丘陵部に展開する集落で使用された須恵器の器種の構成をある程度反映していると考えられ、陶邑内の集落における須恵器の在り方を考える上で良好な資料であると言える。

第4節 小結

今回の調査では、前述のとおり伏尾段丘を南北に横断するかたちで3地区に分けて調査を行ない、それぞれの調査区で貴重な成果が得られた。ここでは調査結果に基づき第Ⅰ区の弥生時代の集落の展開、古墳時代中期における集落の展開、谷部出土の竈について簡単にまとめておきたい。

第1項 弥生時代における集落の展開

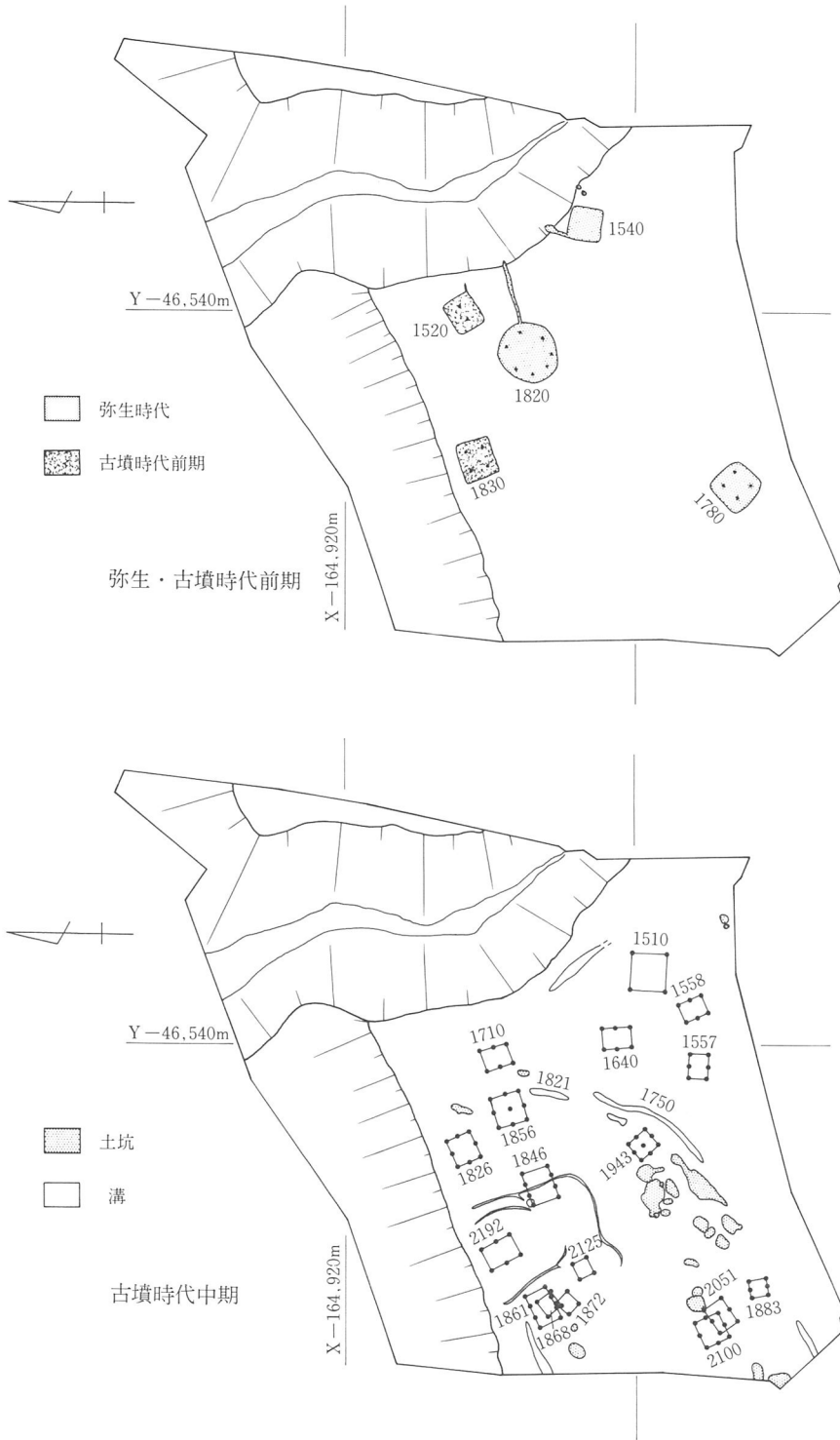
丘陵先端部に位置する第Ⅰ区では、確実に弥生時代に属する竪穴住居は2棟検出された。ここでは立地、構造の特徴や集落の展開を見てみたい。

まず立地を見てみると、1820-O Dは丘陵の縁辺部にあたり谷部に向かって排水溝が延び、1780-O Dも斜面を利用して排水溝を構築している。この状況は第Ⅱ区でも同様な状況を示し、住居の選地にはこれら排水もかなりの要因を占めているものと考えられる。

次に構造であるが、弥生時代中期のものは、第Ⅰ区では検出されておらず、第Ⅱ・Ⅲ区のものを取りあげて見てみると、いずれも平面形は円形を呈し、支柱は壁溝の周りに6～10数本巡らす。後期になると、平面形は円形あるいは隅丸方形ものが混在し、隅丸方形のものは支柱を対角線に配す四本柱構造のもので、円形のものも規模により対角線に配す四本柱のものと、壁溝の周りに6～10数本巡らすものがある。炉はいずれの時期のものも中央に円形の土坑状のものを有する。このように中期段階と後期段階では竪穴住居に若干の特徴の差が見られ、特に平面プランの方形化は時期の変遷を如実に表しているといえる。

集落の展開については、第Ⅰ区で検出されたものはいずれも後期に属し、拡張が認められるものはあるが、それぞれ一定の距離をもって同時並存していた可能性が高い。一方、第Ⅱ区や第Ⅲ区の状況（詳しい状況についてはそれぞれの小結を参照）を見てみると、第Ⅲ区では中期段階に3棟が同時並存していた可能性が高いことが指摘されており、第Ⅱ区は、中期に比較的限られた範囲に出現し、後期段階まで存続するようである。また地形的に見てみると第Ⅲ区と第Ⅱ区は開析谷により分断され、第Ⅰ区と第Ⅱ区の間には住居が存在しない空間が見られ、前述の時期的な広がりも考慮すると、それぞれの調査区で検出された数棟の住居群はひとつの単位としてとらえることができ、弥生時代中期から始まる集落の展開の中で、第Ⅰ区住居群は後期段階に新たに展開を始める単位として捉えておきたい。ただ谷部出土の弥生土器のなかには中期でも前半代のものも含まれており、谷部の東側の丘陵には今回確認されたものより時期的に遡る集落の存在する可能性もある。

第4節 小結



第80図 遺構変遷図

第2項 古墳時代中期における集落の展開

古墳時代中期には、この伏尾遺跡は大きく展開する。第Ⅰ・Ⅱ区では掘立柱建物を中心とした集落が展開し、開析谷を挟んで南側には集落と関係が深いと考えられる古墳群が展開する。ここでは、第Ⅰ区で検出した伏尾集落の一部分についてまとめてみたい。

第Ⅰ区で検出された遺構には、溝、掘立柱建物、土坑等があるが、まずそれぞれの遺構についての検討を行う。

1. 溝の検討

溝は10条確認されたが、規模等から見て大型のものと小型のものに分類できる。大型のものに属するものには1750・1821・1755・1811-OS等があり、小型のものに属するものには1812・1813・1814-OS等がある。

大型のものをみると、1750・1755・1821-OSは方向や規模等から一連のものと考えられ、調査区の西側では丘陵の地形に沿って走るが、南側では丘陵部を直交して走る。また、これらの溝の西側と東側では同時期の遺構の密度に大きな差が認められ、これらの溝は排水の役割りだけでなく、区画の目的も大きな比重を占めているものと考えられる。

小型のものに属する1812・1813・1814-OSは、大型のもの西側、丘陵下段部で比較的まとまって検出された。この3条を比較してみると、1812-OSは丘陵中央部で北にはほぼ90°屈曲して走り、1813・1814-OSは1812-OSに一定の距離を保ちながら併走し、これらの溝も企画性の高い、区画を目的としたものと考えられる。またこれらの溝はいずれも北斜面に向かって走り、排水の役割りも大きな比重を占めているものと考えられる。

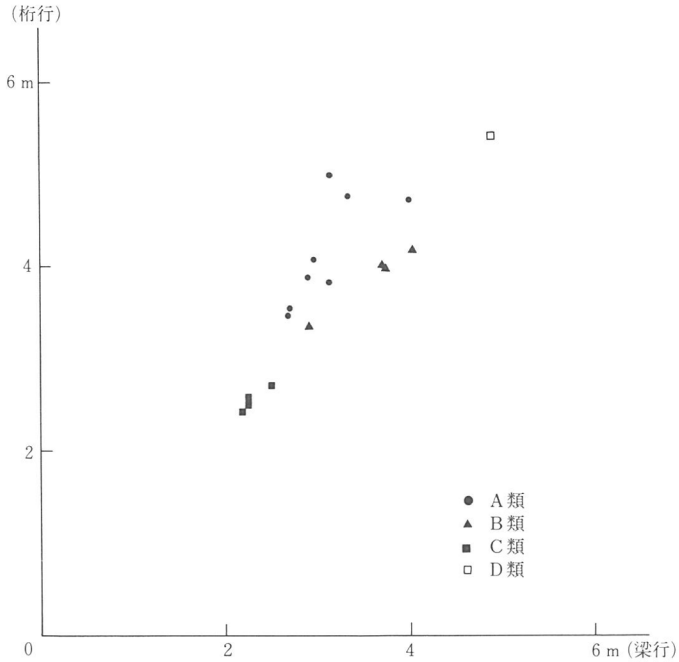
時期的な変遷は出土遺物や、遺構の重複関係からまず大型の溝群が先行して出現し、つづいて小型の溝群が出現し、大型の溝群と同時並存していたと考えられる。廃絶の時期も出土遺物から同時期と考えられる。

2. 掘立柱建物の検討

掘立柱建物は17棟確認されたが、これらのものは構造や規模により、大きく四類に分類できた。

A類としたものは平面形が長方形を呈し、桁行が2～3間、梁行が1間のもので、梁行が桁行の柱間に比べて著しく広いものである。またA類は規模によりさらに細分でき、大型のものをA1類、小型のものをA2類とした。A1類に属するものは1846・1861・2192-OBの3棟、A2類に属するものは1640・2051・1710・1557・1558-OBの5棟である。

第4節 小結



第81図 掘立柱建物法量グラフ

床面積はA 1類が18.25～19.09㎡， A 2類が9.45～12.95㎡で他のものに比べばらつきが認められる。

B類としたものは平面形がほぼ正方形を呈し， 2間×2間のものである。さらにB類は細分でき総柱構造のものをB 1類， 中央の束柱の確認できなかったものをB 2類とした。B 1類に属するものは1856・1943－OBの2棟， B 2類に属するものは1826・2100－OBの2棟である。またB類は中央の束柱の有無で細分を行なったがB 2類の中央の束柱は削平されている可能性もある。1943－OBは現在検出したものよりさらに北側にのびる可能性もあるがここではB 1類としておく。床面積は9.71～17.43㎡で不確実な1943－OBを除いた3棟にはまとまりが認められ， 企画性は高いものと考えられる。

C類は平面形がほぼ正方形を呈し， 非常に小規模なものである。C類も細分でき， 2間×1間のものをC 1類， 1間×1間のものをC 2類とした。C 1類に属するものは1883－OBの1棟， C 2類に属するものは1868・1872・2125－OBの3棟である。床面積は5.88～6.45㎡でまとまりが認められ， B類同様企画性の高いものと考えられる。

D類としたものは1間×1間の非常に大規模なものである。D類に属するものは1510－

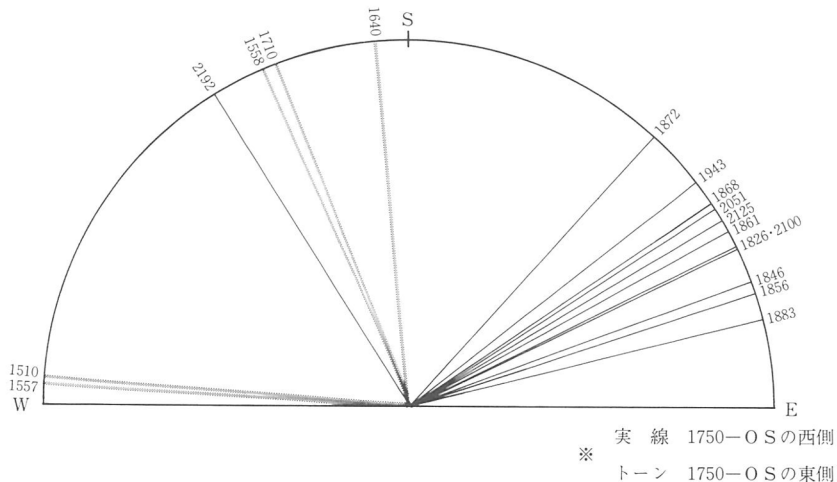
OBの1棟のみである。

以上分類を試みたがこれらの建物のうちA類としたものは住居、B類としたものは倉庫、C類としたものは小規模な納屋のような建物とここでは推定しておく。

建物の方向性については、第84図のグラフで表示したが、 $N-76^{\circ}-E \sim N-42^{\circ}-E$ の間に集中する一群が認められた。この一群は、すべて1750-O Sに代表される大型の溝の西側に位置し、建物の方向性からも溝の区画的性格が高いことが指摘できる。また2192-O Bは溝の西側に位置し、これらの一定の方向性をもった建物群から約 90° 振るものでこれらの一群として考えることができる。他のものは $N-5^{\circ}-W \sim N-87^{\circ}-W$ の間に大きなばらつきをもって存在し溝の西側とは様相を異にしている。

このように溝で区画された空間に一定の方向性をもちながら展開する建物群が認識できたが、次に溝で区画された空間に展開するこの建物群について見てみたい。区画内には、A類に属するもの4棟、B類に属するもの4棟、C類に属するもの4棟の計12棟で、平面的にはそれぞれ1826-O B、1861-O B、2100-O B、1943-O Bを中心とした周辺に数棟がまとまって存在し、異なった性格の建物が密接に関係しながら展開をすることは認識できる。また建物と溝、建物と土坑、性格の異なると考えられる建物に重複関係が認められ、出土遺物の検討を通して、短期間の間に数次の変遷が予想される。

代表的な重複関係が認められるものは、1846-O Bと1812-O S・1822-O O、1861-O Bと1868・1872-O B、2100-O Bと2051-O B等がある。1846-O Bと1812-O S・



第82図 掘立柱建物主軸グラフ

第4節 小結

表1 掘立柱建物一覽表(1)

分類	遺構番号	法 量	地区・方位・面積・備考
A ₁	1 8 4 6		K 25 ME N 70° E 19.09m ²
A ₁	1 8 6 1		K 25 L A N 61° E 15.89m ²
A ₁	2 1 9 2		K 25 L C N 32° W 18.25m ²
A ₂	1 7 1 0		K 25 K J N 21° W 11.32m ²

表2 掘立柱建物一覧表(2)

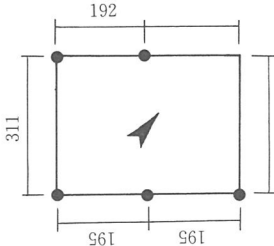
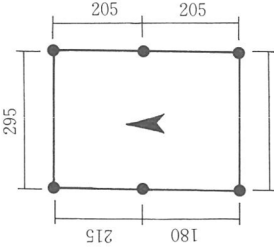
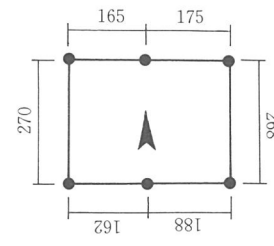
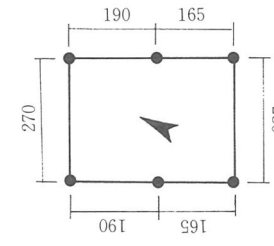
分類	遺構番号	法 量	地区・方位・面積・備考
A ₂	2051		K25 S A N57° E 11.97m ²
A ₂	1640		K25 O K N5° W 12.95m ²
A ₂	1557		K25 R J N87° W 9.45m ²
A ₂	1558		K25 Q L N23° W 9.94m ²

表3 掘立柱建物一覧表(3)

分類	遺構番号	法 量	地区・方位・面積・備考
B ₁	1 8 5 6		K25 L H N72° E 17.43m ²
B ₂	1 8 2 6		K25 I F N64° E 15.20m ²
B ₂	2 1 0 0		K25 S A N64° E 15.20m ²
B ?	1 9 4 5		N25 O G N52° E 9.71m ² 建物はさらに大きくなる 可能性有り

表4 掘立柱建物一覧表(4)

分類	遺構番号	法 量	地区・方位・面積・備考
C ₁	1 8 8 3		K 25 T B N 76° E 6.24m ²
C ₂	1 8 6 8		K 25 M B N 56° E 6.45m ²
C ₂	1 8 7 2		K 25 N B N 42° E 6.05m ²
C ₂	2 1 2 5		K 25 N C N 59° E 5.88m ²
D	1 5 1 0		K 25 Q L N 85° W 28.06m ²

第4節 小結

1822-〇〇, 2100-〇Bと2051-〇Bについては柱穴の埋土の堆積状況等から1846-〇B, 2100-〇Bが他のものに先行することが確認され, 1861-〇Bと1868・1872-〇Bとの前後関係については確認できなかったが, 平面的に3棟の重複関係が認められ, 最低で三時期の変遷がたどれ, 1943-〇Bは, 周辺に柱穴と考えられるピットが多数検出されており, 数時期にわたって建て替えが行なわれたことが窺える。このようにここでは部分的な建物の変遷についてはおおまかな把握はできたが, 建物を含めた集落の構成については土坑や溝等の分析を含めて考えていきたい。

3. 土坑の検討

土坑は約60基検出されたが, 規模により大型のもの, 中型のもの, 小型のものに分類できる。大型のものは平面形が不定形を呈するものが多く, 小・中型のものには, 楕円形や円形を呈するものが多い。

またこれらの土坑はそれぞれ埋土や遺物の出土状況に特徴をもち, 土坑の性格も推定されるものもある。大型のものに属する1766-〇〇は埋土に焼土や炭を多く包含し土器が投棄された状況で出土し, 廃棄用の土坑と考えられ, 小型のものに属する1796-〇〇は完形品の杯身と杯蓋がセットで出土し, 意識的に土器を納めた祭祀的要素の高いものと考えられる。同様に祭祀的要素の高いものとしては, 1806・1822・1530-〇〇があり, 積極的に廃棄用の土坑と考えられるものは, 他にはみられなかった。他の土坑としては中型のものに属し, 土器の細片が数点出土するものや, 小型のものに属し遺物の出土はほとんどみられないが, 埋土に焼土や炭を多く包含し, 直径50~60cmの, 円形を呈するものがある。積極的には言えないが, 谷部で出土した移動式竈の底部径とほぼ同規模であり関連性の指摘も可能である。次にこれらの土坑の分布の状況を試みると, 1861-〇B, 2192-〇Bの周辺には祭祀的要素の高い土坑が1基ずつ存在し, 大型のものはみられない。一方対照的に1943-〇Bの西側に位置する土坑群は, 大型のものや小型のものが数基重複し, 廃棄や祭祀的要素の高いものが混在し, 大型の不定形なものや, 埋土に焼土や炭の包含されるものがみられる。また2100-〇Bの東側には中型のものに属し土器の細片が数点出土するものが数基認められた。

このように土坑は建物の周辺に位置し, 建物と密接な関係にあることは明らかであるが, 個々には特徴的で, 分布状況も一様ではなく, 建物を中心としたそれぞれの一群で特徴をもつことが指摘できた。

4. 集落構成

これまで集落を構成するものとして溝、掘立柱建物、土坑について簡単な分析を行ってきたがここで、全体的な集落の構成についてまとめておく。

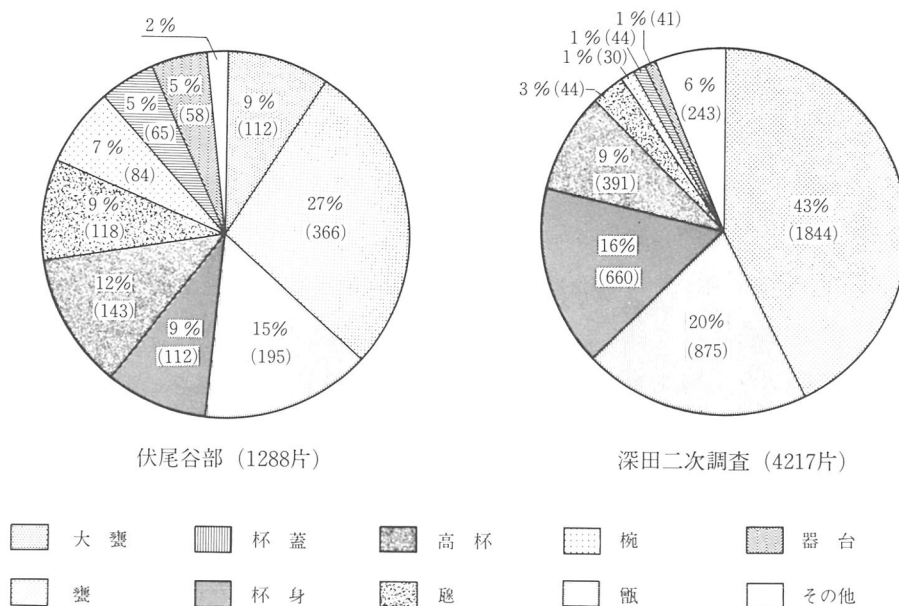
溝の検討の中で、1750・1755・1821－〇Sは関連性が高く、掘立柱建物のおおまかな方向性より区画の性格が強いものとして位置づけたが、1755－〇Sは調査区外西側に延び、この溝で区画された空間はさらに広がる様相を呈する。

区画内に配された掘立柱建物は住居、倉、納屋等と推定できるものが混在し集落を展開するが、その構成については、土坑の特徴やその分布状況等から指摘できることは幾つかある。まず下段に位置する建物群について見てみると、平面的には四群に分かれる。このうち重複関係から1846－〇Bは先行することは前述したが、細かい主軸方向をみてみるとこの建物の東側に位置する倉と推定できる1856－〇Bとほぼ一致し他のものに比べて同時並存した可能性は高い。土坑は中型の不定形なものが数基認められるが、出土遺物もほとんどなく特徴を見出すことはできない。1861－〇B・2192－〇Bの一群はその配置や方向性から1812・1813・1814－〇Sと関連性の高いものと考えられ、1812－〇Sと1846－〇Bの重複関係から1846－〇Bの一群より後出する一群と考えられる。土坑は祭祀的要素の高い小型のものが認められる。同時並存の可能性のあるものは1861－〇Bと同軸方向の納屋と推定できる2125－〇B、倉と推定できる1826－〇Bがある。また1861－〇Bは前述のとおり三時期の重複が認められるが、1868－〇B、1872－〇Bについてはどの建物の一群に伴うものかは不明で、調査区外の西側に関連する建物がある可能性もある。また、第Ⅱ区の集落構成を参考にすれば、1826・1856－〇Bは二棟一対で存在した可能性もある。

丘陵上段部は平面的に見ると二群が認められる。1943－〇Bは単独で存在するが、前述のとおり数次の建て替えの可能性が、土坑の分布の状況からひとつのまとまりとしてとらえることができる。この一群は土坑の在り方が特徴的で、他の群の空間とは異なった性格を有するものと考えられ、廃棄土坑の存在や埋土に焼土、炭が大量に含まれること、廃棄土坑の出土遺物は他の遺構の出土遺物に比べ煮沸形態の土器が多くみられることなどを考慮すれば、区画内に展開する集落の共同の作業場的なものとも考えることもできる。2100－〇Bを中心とした一群は最低二時期の変遷が追え、細かい主軸方向の一致するものはみられないが、住居と納屋の関係を示す1861－〇Bの例を参考にすれば、ここでは2051－〇Bと1883－〇Bが同時並存した可能性が指摘される。

このように第Ⅰ区で確認された集落は、数次の建て替えを行ないながら展開するが、そ

第4節 小結



深田遺跡については大阪府文化財抄報『陶邑・深田』1973 fig.2 遺物出土地区および数量より作図した。

第83図 須恵器器種構成グラフ

の存続期間を考えた場合、非常に短期間であり、詳細な全体の変遷を軸とした構成を明らかにすることはできなかったが、溝で区画された空間には、倉、居住、作業場、それぞれの要素をもつ建物群が存在することが明らかにされた。また、調査区外には第II区で確認されたように竪穴住居の存在する可能性もあるが、その数は少ないと予想され、掘立柱建物を中心に展開することは確かである。

以上第I区の集落の展開について簡単に述べたが、第II区でも同時期の集落が調査区のほぼ全面で検出されており、集落全体の展開は次の第II区の小結の部分で触れたい。

第3項 谷部出土の移動式竈

第I区谷部の調査では、図上ではほぼ完形に復原できる移動式竈（韓竈）が出土している。この竈はこれまで各地の古墳から出土しているミニチュア製のものや集落から出土するものと比較して、形態や製作技法に特徴的な部分がみられる。

谷部の調査の項でも記述したが、ここでもう一度この竈の特徴をみることにしたい。焼成は土師質を呈する。全体的な形状は第70・71図に示したとおり体部は直立し、天井部は